
非現実世界《ヴェルメン》

T r i e s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェルメン
非現実世界

【Nコード】

N6234J

【作者名】

Tries

【あらすじ】

幼馴染たち7人はいつもと変わらぬ平和な日々を送っていた。そんな平和な日々は突然に崩される。非現実的な世界に飛ばされた7人にたくさんの苦難な運命が待ち受ける。

そして、最後に見つかる運命の真実とは・・・

いつもの朝（前書き）

Triesです。

忙しい日々のために更新は不定期、または長期にわたって更新不能となる可能性が非常に高いです。
それでもという方だけお進みください。

予定では週1（土、又は日）更新です

いつもの朝

「早く来いよ！」

そこら辺にいる普通の男子高校生が寮から出て大声で出てきた寮の玄関に怒鳴った。

男の身だしなみは整っていて、真面目な雰囲気漂っている。

玄関からまた一人、童顔の男が出てくる。

こちらも服には皺1つないが、寝癖は直っていないために全てが台無しである。

「決まってるでしょ、今日だけは」

寝癖に気付いていないことに男は呆れた顔になり、童顔男の肩に手を置く。

「寝癖がついてりゃ台無しだ」

「ええ？朝起きて鏡・・・見てないや」

「顔洗ったか？」

「んゝ、半分寝てた」

「・・・」

半分寝ていたと言うことはちゃんと洗えてないだろう。呆れ返って言葉も出ない男は馬鹿らしさに頭を抱えた。そんな男に気付かずに童顔男は話を変える。

「今日で卒業か・・・」

そつ、今日は彼らの高校の卒業式なのだ。

そのために普段は皺がついている制服の皺を伸ばしたりと身だしなみをいつも以上に整えている。

そうしておかないと真面目な幼馴染が口煩く文句を言うからというものもあるのだがと幼馴染たちを思い出して男は思った。

「ほんとに卒業できるのがおかしい奴がいるだろ」

「いいじゃん、自分の好きな奴と一緒に卒業できれば他はどうでもいいだろ」

「まあ、そうだけど・・・って、何言わせんだよ！！好きな奴はまったく関係ないだろ！」

童顔男の話にすごく真面目に即答してしまった男の顔が茹蛸の様に赤くなり、童顔男に怒鳴る。

「何赤くなってるんだ？俺のことだったのにねえ」

そんな男を見てからかう様に笑った童顔男の周りに5人の幼馴染が現れる。

「おはよ、海人^{うみひと}」

「おはよお[♪]」

「ん、はよ」

幼馴染の中の2人の女のうち、一人が男に片手を挙げて挨拶し、その女の背中に乗るようにいた可愛らしい女は男と童顔男に笑いかけた。

男は2人に軽く挨拶を返した。

男の名はは市川海人^{いちかわうみひと}。

文武両道な優等生の海人はここ一番というときは冷静になれる為に、普段からリーダーシップをとり、人望も厚い。

綺麗な黒い短髪にしっかりと前を見る黒い眼、真面目で優しげな顔立ちに平均やや上の身長で細身の身体とルックスも悪くはないために異性からの人気が高いが恋愛には奥手な純情君。

「詩音・・・俺は無視かよ」

「ん？中学はあっちだよ？」

「同年だろーが」

「ごめんごめん、ど」

「童顔言っな？」

「はいはい。おはよ、彰」

童顔男は無視した女に文句を言いながらも楽しそうに笑った。

童顔男は新崎彰。しんざきあきら

我が道を行くという自由人だがそれなりの常識と協力性のある彼は海人同様に人望がある。

年相応の平均的な身長は持っているものの、地毛である柔らかな茶髪と無邪気そうな顔立ちからか童顔に見え、かわいい異性に人気があるが、本人は無自覚な上に海人同様に恋愛には弱い。

しかし、キレたときの二重人格の性格を知っている幼馴染やその他の友達は無言に思えてならない。

詩音と呼ばれた女は紺野詩音。こんのしあん

女子高生にしては少し高めの背で、若干つり目のそれなりに綺麗な顔立ちの彼女は漆黒と呼ぶにふさわしい黒のやや癖のある髪はをポニーテールにしている。

幼馴染といるときも女らしいことはほとんどしないためなのか、恋愛に興味は0である詩音は幼馴染以外の友達を作らず、よそでは完全な一匹狼だが、男女問わず、密かに憧れを持たれている。

また、幼馴染から見ても謎が多い。

「彰あ、アズちゃんから詩音に移ったかあ？」

「勝手なこと言うな、マゾ野郎」
「彰に好かれるなんて虫唾がはしる」

マゾ野郎と言われたのは7人の中では1番目立たない村田祐志。むらたゆうじ

中肉中背でかなり平凡な顔にごくごく普通の黒髪に普通すぎる髪型と、これと言った特徴のない彼だが、周りの幼馴染たちがかなり特徴的なために逆に可哀想なほどに可哀想な意味で目立っているが、本人は気にしている素振りを見せない。

相談や喧嘩の仲裁役と人の話は親身になって聴ける温和な性格だが、爆弾発言をして状況を悪化させることも多く、それはマゾという性格を持っているからだという説もあるが真実は謎である。

恋愛はただいま5連敗で縁を切っている。

「アズちゃん、今のうちに避難しといた方がいいよ」

「触らぬ仏に祟りなし・・・です」

「そうだね・・・」

皆からアズちゃんと言われて大事にされている女は詩音の背中から下りて少し離れているところにいた2人の男のほうへと、これから起こるのであるう口げんかから避難した。

ゆりかわあずさ
百合川梓、通称アズちゃん。

ふわふわの髪に若干垂れ目で少し小さめの癒し系キャラの梓は学校のアイドルであり、彰と海人の想い人でもあるのだが、あまり恋愛に興味はないらしく告白などは全て断っている。

大事にされているのは怒らせると親友で一番懐かれている詩音でも手がつけれなくなるからでもあるが、普段はとても可愛く優しい小動物的な存在だからと言うのが一番の理由である。

丁寧口調の男は石倉俊也。いしくわつとよ

小柄な梓より更に15cm近く背が低く、かなり小さい俊也は誰が相手でも常に礼儀があり、しっかり者である上に成績は常に満点ト

ツプだが、あまりの小ささからか運動は平均以下である。

「チビ」と女性以外に言われると即行でキレるが、そんなに長くは根に持たないが、裏の性格はサディストで重度のシスコン野郎でもあり、恋愛対象者は妹と雰囲気おのいっきの似ている梓である。

俊也に比べて身長差が45cm以上ある背の高い男は尾野伊槻。

いつもなるべく笑顔ではいるが、笑顔と言うよりはニヤケ顔が多いためか気持ち悪いらしいという不評である彼はこの幼馴染たちの中で1番の問題児で、人をからかうのが大好きであると言う困った性格の持ち主・・・だったのだが、最近はやられる側になりつつある。恋愛に関してはヘタレなうえに、好きになる部分が周りとは少しずれている。

3人がそそくさと離れたのに気づいた海人も少しずつ距離を開けて無事に避難した。

他の人なら止めるであろう海人だが、彰と詩音の喧嘩だけは自分優先である。

「こんなの女じゃねえだろ！」

「はあ？目えおかしいだろ！」

喧嘩が始まったところに喧嘩仲裁役である祐志が止めに入ろうと数秒悩むもすぐに仲裁に入った。

どうすれば止まるかと悩んだ拳句・・・

「ごめん、詩音が女って同意できないよ」

祐志が禁句を言ってしまった。

「馬鹿・・・」

「火に油注いでは駄目でしょう」

「我関せず」

「・・・同感」

梓が頭を抱え、俊也が遠くから祐志にツッコミをいれ、海人が関係ないとばかりに首を振った。

その隣で一人小さく伊槻が同意というと、4人は同時に手を合わせた。

「ご愁傷様です」

息もぴったりに祐志の冥福を祈ると4人は学校へと一足先に行ってしまった。

「祐志、そんなに死にたかったの？」

「・・・あれ？もしかして俺ヤバイ？」

「うん、じゃあ彰と一緒に地獄に堕ちろ。手伝ってやるから」

「って詩音さん！それ怖い！ちょ、やめっ・・・」

「うるさい、死ね、馬鹿」

後に残った3人は遅刻ギリギリまで喧嘩していたのを、同じく遅刻ギリギリだった同級生Aが目撃したというのはまた別の話である。

いつもの朝（後書き）

これからよろしくお願いします

運命の日

卒業式、7人にとって散々な日となっていた。特に彰・海人・梓は特に酷い迷惑なことが起こる。残りの4人にも酷いことが起こる。

「市川先輩！私にボタン下さい！！」

「新崎先輩！！私と付き合ってください！」

「アズ先輩、このあと一緒にどこか行きませんか？」

「紺野先輩、幼馴染を誰か紹介してくれませんか！！」

毎回恒例となつてしまつた後輩からのラストアピールが、卒業式の終わつたお昼少し前から始まつた。

3人を中心に群集ができ、一人離れている詩音の周りには詩音のファンや3人のファンが集まつて詩音に必死になつてお願いをしている。

残された伊槻・俊也・祐志はラストアピールと群がつた後輩たちにもみくちゃにされ、7人が解放されたところには既に夕日がほぼ完全に沈んでいた。

「疲れた・・・」

「何で断つても断つてもくるのかな・・・」

「アズは分かるけどよ、他はどこがいいんだよ・・・」

「知るか・・・」

海人も梓も彰もいつもと変わらない笑顔で「丁重にお断りします」と全てを断つていったが、それでも人は減るところが増える一方であつた。

人付き合いが苦手な為にいつも以上に不機嫌な目つきで詩音は群が

つてくる後輩を睨んでいた為に早くに人は減ったが、やはり結末は伊槻や俊也達と一緒にだった。

「まあ、気を取り直して僕の家を集まりませんか？」

俊也が解散するよりはいいと笑いかけると伊槻と祐志が頷いた。梓も私も行くと言るように手を上げる。

それによって自然と彰と海人が加わり、残る詩音も行くことになった。

俊也の家は普通の一軒家である。

俊也は10離れた妹が一人いるが長期出張中の両親について行つてる為に誰もいない。

誰も生活していないために少し埃っぽくなって入るが、幼馴染たちにとって都合のいい溜まり場となっている。

人数分の毛布があるために度々泊まることもあった6人は寮の次に馴染みのある宿泊場でもある。

もちろん、高校生男女が同じ部屋というのはいろいろと不味い為、鍵付きの俊也の部屋に梓と詩音が入る約束である。

極稀に詩音はリビングで平気で寝ているが・・・興味がない上に恐ろしい為に手を出すことは120%ない。

「疲れた、つつーか飯い。腹減った」

「荷物、家に送っちゃったの失敗だったかも」

家に着いてリビングに入るなり女二人の不満発生。

「アズちゃんは俊也の服着れるんじゃない？男の服って少し大きめだし」

「ジャージでいいなら貸すよ？余分に持ってるから」

海人が俊也を指差した隣で彰が持っていたバッグを探って梓に差し出した。

数秒迷ったあげく手を伸ばした梓の手に詩音が自分のジャージを握らせた。

梓に握らせたジャージのほかに1着、制服の下に着ていた詩音は梓をつれて洗面所へと向かっていった。

「覗いてたら殺すからな？」

リビングを出て行く直前の詩音の脅し言葉に不機嫌オーラがたつぷりと宿っていた。

こんな調子では就寝前に八つ当たりタイムが発生するだろうと察知した男たちは顔を見合わせて犠牲にするものを考えた。

「・・・ここはやっぱり彰でしょ、原因作りナンバーワンの」

「いや、ここはマゾで喧嘩の仲介役の祐志だ」

「無理無理」

「皆の平和のために逝って下さい・・・伊槻」

「まさかの流れ弾あ！！しかも漢字違う！まだ死にたくねえ！！」

「うるさいよお」

着替え終わった梓と詩音が戻ってきた。

梓の着ているジャージにはもちろん紺野と書いてあるが、まあ気にしないでおこう。

その後、他の5人も持っていたジャージに着替えるなり、下に着ていた普段着になるとリビングの中央に固まって座った。

「・・・やっぱ詩音がスカートっていうのは違和感あったな」
「確かに」

「合わないよね」

「自分もそう思う・・・」

「アズちゃん可愛いんですけど、詩音はちょっとおかしいです」
「同感」

「男の子用のほうが似合うよね」

そんな普段と変わらぬ雑談をしていた7人だった。
いつもと同じように、明日が来ると思っていた。
だが、それは裏切られる。

過酷な運命の齒車は、動いた。

突然床が黒く染まっただと思うと大きな穴へと変わった。

一瞬で地を失った7人はそのまま重力に引つ張られ暗い闇へと落ちていった。

「!？」

突然のことに戸惑うが、何もできることはない。
ただただ、重力の虜となって落ちていく他なかった。

「わっ」

「うおっ」

「グヘッ」

「いっ・・・て」

「つつう」

「イタイ」

「・・・着地成功」

真っ暗な闇が突然に光を受け入れ、どこかの森の中の小屋の前へと

変わった。

うまく着地できた詩音を除く6人は地面に落ちた。

「ここは・・・」

詩音がずっと立ち上がると小屋に触れた。

まったく意味の分からない6人はただ黙って顔を見合すだけである。

「・・・イーファイ、か？」

小屋の戸が開き、中から老人がでてきた。

杖を突き、白い髭を生やし、茶色の襷袢を纏った優しい雰囲気のお爺さんであった。

「マーモ爺さん。お久しぶりです」

「ああ、久しぶりじゃの。なぜ、ここに？」

「よく分かりません」

「そうか・・・」

知り合いらしい詩音とおじいさんが数回言葉を交わすとお爺さんは小屋へ入るように促した。

よく分からないままに6人は小屋へと入っていった。

モウ、後戻りハデキナイ。

タダヒタスラ前ヘト進ムシカナイ。

既ニ運命ノ系ハ脱ケ出スコトガデキナイホド、キツク絡ンデイルノ
ダカラ。

非現実世界

見知らぬお爺さんの小屋に入ると、そこはお伽話に出てきそうな小屋だった。

お爺さんに促されて7人が置いてあつた座布団の上に適当に腰を下ろしてお爺さんを見ると、お爺さんはお茶を淹れて出してくれた。少し濃いめの良い香りが鼻腔をくすぐり、全員が茶を飲んだ。

見た目はかなり濁りのある緑茶だが、口当たりのよい味に思わず和んでしまう。

「さて、少しは落ち着いたかの？　ワシはマーモ・デスト。イーフィの曾祖父じゃ」

よつこらしよ、と掛け声を出して詩音と彰の間にあつた残っている座布団の上にマーモは座つた。

マーモが座つたことで8人が円を描くような隊形になり、円の中心が光つた。

円の中心は色とりどりに不規則的に光っており、何かを伝えているようだった。

その光をマーモがじつと見つめ続け、そして頷いた。

「正族に戦族に魔族に技族。希少種の万族までおる。極めつけは・王族。そしてお前はワシと同じ死族。非現実世界の七部族揃えるとは。イーフィ、お前は無力世界でどんな運命を持ってきたんじゃない？」

「・・・放つといってください」

呆れたように詩音を見たマーモから詩音は目を逸らした。そんな詩音はとりあえず脇においておき、話が分からない他の6人

に説明をするために資料を取ろうとマーモは腰を浮かす。

だが、その前に詩音はマーモの服の裾を掴んで座らせると声を潜めて2人で密かに話し始めた。

「釘を刺しておきます。例の件は内密に。自分はもう行かなければならないので」

「どこか行くのかの？」

「ええ、あの方のところへ。自分も一応所属してますし・・・アイツには逆らえません」

「あの方、とはどちらだ」

「アイツの方です」

「そうか。ワシも一つ釘を刺しておくが・・・裏切るなど、無理なことじゃからな？」

「・・・分かってます」

小さな小さな声で会話を終えると、詩音は席を立った。

「こつちでいろいろ用があるから別行動だ。悪いな」

「えっ？詩音？・・・詩音！」

いつもちゃんと話していた梓を無視して詩音は小屋を出て行った。

残された6人が急いで小屋の外へと出ると既に詩音は木の上にいた。気づいたときには既に別の木へと飛び移り、あっという間に見えなくなってしまうた。

尋常ではない運動能力に全員が呆然としていた。

「まあ、また会えるから心配はいらんよ。中で話してあげよう。非現実世界、ヴェルメンについてをな」

マーモが目を細めて詩音が行った方向を見て言うと、また小屋の中

へと6人を招いた。

先程と同じ場所に座ると、マーモが少し遅れて資料を持って座った。

「えーと、マーモさん。ヴェルメンって言ってましたけど、ここはどこですか？」

6人を代表として俊也が尋ねる。

「非現実世界、ヴェルメンじゃ。お前たちの遠い祖先の生まれた場所じゃ」

マーモは資料を広げ、ゆっくりと説明し始めた。

大昔、世界はヴェルメスという創造神が作り出した、ヴェルメルという世界だった。

人も植物も獣も竜も自然神もいた世界である。

そんな平和な世界に一人の魔神、フィリールが生まれた。

フィリールの影響によって魔の力が世界に広がり始めてしまう。

獣は魔獣に、デス・モンスター竜は獄竜へと変化し、ヘルト・ドラゴン人は魔の力を扱えるようになった。

魔の世界になるのを恐れたヴェルメスはしかたなくヴェルメルを5つに割った。

フィリールの魔の力の影響を受けずに済んだ人々のいる無力世界。ヴェール

魔の力の影響を受けて魔の力を扱えるようになった人々のいる魔力世界。デス・モンスター

聖なる竜たちと、それを操る人々のいる竜神世界。ドルチェリ

魔の力から避難したヴェルメルの神々のいる天空世界。ヴォルメン

そして、フィリールの生まれで影響が一番大きかった地獄世界。スカルアース

「ヴェルメン非現実世界とは後に無力世界の人々からみたその他の4世界をまとめて呼んだものである。」

「そしてここは、ヴェルメン非現実世界の中の魔力世界。デメイス魔の力を持った人々はその才能によって7部族へと別れておる。イーフィ、詩音と君達全員合わせてちょうど7部族揃っておる」

「へえ、すごい偶然ですね・・・」

「確かに自由人に真面目君にいい加減に温和に・・・っているんな奴がいるしな」

「伊槻、多分部族と性格はそんなに深く関係しないと思うよ？」

「マーマは緊張が解けて和み始めた一人一人を指差して部族を説明し始めた。」

「彰は7部族最強の王族。」クラウ

「純血どころか混血までもが少なく、魔の力も身体能力も最強であり、洗脳ができるほどの魔の力を持つものが多い最高部族。」

「海人は純粋な魔の力を持つ正族。」ジャディ

「正族の純血は闇の能力を打ち消す特別な力を持ち、デスト死族と正反対の種族でもある少数部族。」

「伊槻は戦闘好きの多い戦族。」ソル

「魔の力を身体強化へと変えての肉体戦はトップクラスであるが、魔の力を放つということはできず、ジック魔族とは長く敵対関係である、デ魔力世界三大部族の一つ。」

「俊也は魔の力が強くておとなしい魔族。」ジック

「魔の力の変化が得意で使う種類が多く、魔の力を封じさせることもできる唯一の種もあり、ソル戦族と同じく三大部族の一つ。」

「祐志は7部族で一番魔の力を持たない技族。」クック

「魔の力を攻撃に変えたり、身体強化に使うなどの使い方は苦手だが、

物を作る能力はピカイチであり、三大部族、最後の一つ。

梓は全体のバランスがとれた万族^{オウル}。

身体能力も魔の力も王族^{クラウ}の次に強いが、王族^{クラウ}同様に純血も混血も少ない超希少部族。

詩音は闇の力を司り、それなりの代償を払って生死の契約を行う死^デス^{スト}ト^{スト}族^族。

万族^{オウル}よりも数が少ない上にそのほとんどが温和だが、7部族の中では一番危険な部族であるのには変わらない。

「魔の力は右腕と左腕に一つづつ魔根というものから供給される。

細かいことはワシにはよく分かんがのう・・・ワシは才能に恵ま
れなくて死族^{デスト}から追いやられたんじゃ。イーフィがいい才能を持っ
て生まれたことは、本当に誇りに思つとる」

「微妙に性格おかしいけどな・・・」

「彰！」

「ホッホッホッ、確かにイーフィは捻くれてたの。それよりこれか
ら、どうするんじゃ？」

突然の質問に全員の言葉が止まる。

よく考えれば、この世界と部族は知ったが元の世界へとはどうやつ
て戻ればいいのかは分からない。

「・・・考えてなかったな」

「俺はマーモさんが知ってるかと思つてたんだけど」

「いや、ワシは無力世界^{ヴェール}になんか行けんよ。魔の力が莫大に必要じ
やからな。イーフィは親の力で無力世界^{ヴェール}へ言ったのじゃろうし」

祐志が頼りにしていたマーモも知らないということで、完全に手詰
まりになってしまった。

イマダニ氣付イテイナイ。
運命ノ畏ヘト自分カラ進ンダ事モ、
運命ノ畏ガ作動シヨウトシテイル事モ、
誰一人氣付イテイナイ。

町

途方に暮れていた6人だったが、海人がふと思い出した。

「マーモさん、確か詩音にまた会えるって言っていましたよね？」

「どうせイーフィのことじゃからの。あちこちを飛び回っておる。

アヤツは幼くして天空世界ヴォルメスにも行ったことがあるからの。適当にウロウロしておればいつか会えるじゃろ」

「そんな確率低いものに賭けられませんか・・・」

会える確率はとんでもなく低い。

会えたらそれは奇跡としかいえないだろうことに賭けれるほど6人はお気楽ではない。

「いや、ウロウロしておれば向こうから現れるはずじゃ。小屋を出たら道なりにひたすら進むと大きな町に出る。その町のある場所にいると思うがの？最近のアヤツを知っているのはお前たちじゃろ？」

につこりとマーモは笑ってヒントをだすと、6人は考えだした。

6人の考えがまとまる前にマーモは6人分の旅用の服を用意した。

少し色合いの違う茶色ベースの丈夫な服にと男用のマント、梓にはローブに近い上着が用意された。

「いろいろとすみません」

この世界の情報から能力、旅の服まで用意してくれたマーモに海人は頭を下げた。

後から梓や俊也、祐志も丁寧^{マナー}に礼を言うと彰と伊槻が慌てて頭を下げた。

そんな彼等を見て微笑むマーモに見送られて6人は老人の住む小屋から旅立っていった。

「いい才能じゃ・・・もうすぐあの日がやってくるのう」

マーモの呟きは6人には聞こえない。

半日ほどかけて歩いた末に6人は大きな町へと出た。

梓がすぐに詩音のいそうなところをまわって詩音を探すために人込みの中へと入っていった。

「アズちゃん！待って」

「置いてくなよ！」

見失うまいと彰と海人が人込みを掻き分けて梓を追い、その後ろを伊槻と俊也と祐志がついていく。

「俊、ちっさいんだからはぐれるなよ！」

「大丈夫です。そんなに小さくありませんし伊槻がいれば遠くても分かりますから」

「人込みの中じゃ見えないだろ・・・おてて繋ごうか、ボク？」

「余計なお世話です」

コントのような会話をしながらも伊槻と俊也は進んでいく。

その後ろを祐志がついて行く。

そのはずだが、祐志はそこにいなかった。

人込みというたくさんの人の中、少し距離が開いただけでもはぐれ

てしまう。

祐志は人の波に飲まれて、完全に迷子になってしまったのである。先を行く梓とそれを追っていた彰と海人はそんなことは知らない。そして伊槻と俊也も、後ろにいるはずの男の存在が消えていることに気付くことはなかった。

梓達は人の波の中を進み、狭い路地へと入った。

伊槻と俊也がしばらくして同じように道を外れて路地へと入った。

「やっと追いついた・・・」

「人酔いする・・・って、だああ！祐志が迷子かよ！！」

伊槻がふつとため息をついて周りを見渡し、やっとそこで祐志がいないことに気付いて叫んだ。

ずっと少し後ろをついてきていると思っていた5人は顔を見合わせた。

「仕方ありません、探しましょう」

俊也が呆れた顔で呟くと海人が指示を出し始めた。

「詩音も探さないといけないしな。2つに分かれて・・・詩音と祐志が見つかったも見つからなくても日没までに町の入り口に。はぐれても同じだからな？」

「了解」

「あつ、ついでに魔の力についても調べといたほうがいいんじゃない？　ここで詩音が見つかるって保証はないし」

「そうだな。じゃあ、調べれることはなるべくな」

「んじゃ、いったん解散！」

彰の掛け声で彰と海人と梓のグループと伊槻と俊也のペアで詩音と

祐志の搜索が始まった。

オレ達ハイマダ二分カッテイナカッタ。

コノ世界ノ恐ロシサモ、コノ運命ノ酷サモ、自分達ノ能力モ、
ナニモカモ・・・少しモ分カッテイナカッタ。

路地裏の恐怖

「いやあ、まいったなあ」

祐志は人込みの道を外れ、彰達とは逆方向の路地へと避難した。ついていつている最中にロープを着た男にぶつかられ、目を離れたときに見失ってしまったのである。目立つ伊槻も、目を離れたうちに路地に入ってしまった為に祐志は見つけられずに完全な迷子となってしまった。

「すみません、私のせいですね」

ロープを着ていた男に対して祐志はしょうがないと言って手を軽く振った。

「時亜^{ときあ}、おまえも非現実世界^{ヴェルメン}に？」

「ええ、少し前から」

幼馴染たちのクラスメイトの永沢時亜^{ながさわときあ}。

祐志が時亜の声がいつもよりも強張っているのに気づき、時亜を見た。

ぱっとしない顔であまり目立たない時亜はいつもとは違う瞳で祐志を見ていた。

その瞳が、冷たく光った。

祐志は背筋を冷や汗が流れるのを感じた。

「実は、同僚に頼まれたんです。あなた達を連れて来るようにと。最初はあなたですよ」

クラスではめったに笑わなかった時亜は気味が悪いほどに笑うと、祐志の首に手を伸ばした。

祐志が後ずさると時亜は一瞬で距離を詰め、祐志の首をしっかりと掴んだ。

女並みに非力だった時亜が決して小柄ではない祐志の身体を片手で持ち上げた。

首の圧迫感に焦る祐志をよそに時亜は簡単に任務が終わりそうな事にほっと息を吐いていた。

「呆れましたが、感謝します。身体強化も基本魔法も何もできないとは・・・楽でいいんですが、面白くありませんね。少しいたぶってみましょうか、メレ？」

残忍な笑みを浮かべた時亜の後ろに突然、空から降って現れた人に祐志は目を見開いた。

「そこまでやれとは言っていないし、お前の楽しみのために頼んだわけでもない」

突然現れた人の声は祐志が先ほどまで捜していた女であった。体にピッタリと合った肩出しの黒いシャツと黒い短めのスカートを着た女の顔を見れば、紛れもなく詩音だった。

右目に真っ黒な眼帯が着けられており、残る左目で時亜を見て、祐志を見た。

助ける気も、哀れむ気もない目だった。

祐志は自分が逃げられないことを悟った。

そして、それは当たっていた。

足に詩音が触れたと思うと、次の瞬間には意識が飛んでいた。

詩音が祐志の身体に触って呟き一瞬で祐志の身体を凍りつかせたのだ。

時亜と詩音は凍り付いて意識のない祐志を見ながら淡々と会話を始めた。

「一応報告しておくよ。一人捉えたら戻って来い、後はメレに任せろ。お前は最終日の準備を続けるだ」と

「じゃあ、これをつれて戻れば？」

「ああ、それなりの報酬は出るだろ。元は自分じゃなくてアイツの命令な訳だし」

「あの方をアイツ呼ばわりするとは」

「別にいいだろ、親族だし」

「どうかと思いますがおいとおきましょう・・・話は変わりますが今回の件の恩ですが？」

表情を変えなかった詩音がぴくりと眉を動かす。

時亜は話を続ける。

「最終日の貴女の相手と一度、戦ってみたいのです。もちろん、半殺し程度に」

「ああ、アレか・・・一応できるよう努力しといてやるけど、気に入らなかつたら自分が殺すからな」

子供のような無邪気な笑みを浮かべた時亜だったが、内容はそう可愛いという問題ではない。

だが、詩音はそれを了解と取れるような返事をした。

「貴女のその性格ではお父様は苦勞されるでしょうね」

「お前まさか最終日の作戦内容知らないのか？」

「いえ、最終日の前の話です」

「・・・どうせ気に入らなくて切り捨てるさ」

「どうでしょうね、大切な方ですよ？」

詩音の眉が眉間によった。

だが、詩音はすぐに切り捨てた。

「くだらない。アイツの子として生まれてしまっただけなら大切な人だろうが愛する人だろうが関係ない」

詩音はそう吐き捨てると時亜と祐志を置いて路地を出ていった。

残された時亜は溜息をつきながらも祐志を抱えて空へと飛び立った。

「しおくん、ゆーじー！」

入れ替わるように彰達がやってきたが、路地は何事もなかったようにひっそりとしていた。

梓と海人が路地を出て人込みを見渡す。

「ん……詩音の声がした気がするんだけどなあ」

海人が頭を掻きながら呟く。

隣で梓が、詩音を見つけた。

「あの人、詩音と同じ髪型だけど……」

「……詩音があんな短いスカートを穿くわけがない」

「確かにね。人違いか」

今までの印象からありえないと捨てて、3人は逆方向へと歩いて行ってしまった。

マズ畠ニカカタノハ、心優シキ親友

ダガ、イマダに畠ニ氣付カズニイル

ソシテマダ、親友ガ畠ニカカタ事ニ氣付イテイナカタ
次ノ標的ハ既ニ狙ワレテイルト言ウノニ

灰色の服の男と美女と黒服の女

自然の光に溢れていた町はだんだんと人口の光に照らされ始め、昼とは違った賑わいを見せ始めていた。

結局5人は詩音も祐志も見つけることができず、町の入り口へ肩を落としながら集まっていた。

「どうする・・・？」

「腹減ったけど飯なんかねえし、金もねえ」

「ないものはしょうがない・・・宿屋にも行けないし」

ほぼ半日歩いていた5人は空腹を抱えながらその場に腰を下ろす。そのまま梓と俊也は眠り、伊槻と海人も眠気に負けそうになっていた。

その中で彰は眠気もなく、ただ漆黒の夜空を見ていた。

雲が出ている様子はないのだが星は一つも見えない、なんとも気味の悪い夜空だった。

彰は先ほどから悪い事が起こるのではないかと感じる体を抱いた。

この世界に来てから、なんだか身体が疼く。

特に胸の辺りと両腕、そして右目。

おもいきり声を出して暴れたい。

自分の命を燃やし尽くすほどの力を放ちたい。

そんな気持ちはずっと見え隠れする中で、その気持ちを抑えられたのはなぜなのか。

どこかでそれを咎める力でも働いているのか。

彰には分からないが、確かに暴れたいという気持ちを何かが抑えている気がした。

「それが王族の血なんだろうねえ。こんなとこにいたらゼノオ、連

れ去ってくれって言うてるも同然だよお？エースはエースで命狙われてるのにさあ・・・早くしないとフィーが来ちゃうよお、起きて」

彰とさほど身長が変わらない男が間延びした話し方をしながら彰に近づく。

その後ろで美人の女が海人に近づいた。

男は少し幼げな可愛らしいという言葉の似合う顔立ちだったが、背に担いだ背に担いだ大きな剣がその雰囲気完全に壊していた。薄い灰色の服を身に纏った男は笑うかのように彰を見ていた。

「ゼノリー・クラウとエース・ジャティ、その他4名・・・一人足りないわね」

そんな男に向かって海人に近づいた美女が話しかける。

男は彰達を一人一人数えてからポンと手を叩いた。

「ああ・・・フィーといた茶色服の子お」

「すいませ〜ん、何の話かさっぱり」

まったく話についていけない彰は片手を上げて自分の存在を強調した。

「ちょっと待つてえ。ビュークウ、まいったねえ」

男は彰を見ながら頬を掻いた。

どうやら男は彰が話を理解してると思っていたらしい。

彰の本気で分からない顔を見ながらどう説明しようか考えている男の後ろで何かが光った。

「防御陣・土」

彰には何が起こったのか見えなかった。

気がついたときには目の前には茶色い壁が立ち、男が消えていた。そして、耳を劈くサイレンの音が響いていた。

「何・・・？」

眠っていた海人たちがサイレンの音に目を覚ました。

目を覚ました皆を守るように美女が立ち、手を合わせる。

「防護印・術」

美女の澄んだ声が響くと同時に彰の目の前の壁が崩れた。

崩れたことにより壁の向こうが明らかになった。

その奥にはまるで漫画の世界のような壮絶な戦いが展開されていた。だが、それがはっきりと分かっているのは美女だけだった。

目がついて行けていない彰達には、何がどうなっているのかがまったく分からなかった。

美女だけは目の前の戦いをじっと見つめていた。

だが、それでも男が黒服の女と大剣を使って戦っているぐらいしか分からなかった。

時が経つごとに両者のスピードは増し、だんだんと美女の目でさえもついて行けなくなる。

やがて戦いは音だけが傍観者の得られる情報となっていた。

地を蹴る音や剣が空を斬る風斬音。

剣が剣を受け止める金属の鈍い音。

たくさんの音があたりの音の世界を支配していた。

「はあああつ！！」

「らあああつ！！」

どれくらい経ったのか。

急に両者が大声を出し、音が途絶えた。

刹那の静寂の後、刃と刃がぶつかった金属独特の音を響かせあい、衝撃によって両者の動きが止まった。

――パキン

黒服の女が持っていた剣がか細い音と共に折れ、黒服の女の武器は消失した。

一気に不利になった黒服の女だったが、表情は少しも変えなかった。男は剣を構えて真っ直ぐに黒服の女を見る。

「魔術・大地の戒め」

隙を見て美女が屈んで地を叩くと黒服の女の回りに草が生え、黒服の女を瞬く間に拘束した。

黒服の女は抵抗をすることもなかった。

男が大剣をしまつて女と彰達を手招きした。

黒服の女の着ている、胸元が大きく開いている肩出しのシャツに丈が短いスカートといういでたちに一瞬で彰達の顔が赤くなる。

膝の辺りまであるブーツまでもが黒一色の女の顔は彰達絡みえる右側からは真っ黒な大きめな眼帯で分らない。

藍色の髪を詩音と同じようにポニーテールにしている女が俯いた。少し長い前髪が女の顔を隠した。

「・・・詩音？」

理解デキナイ。

コノ世界の事ハ理解デキナイ。

目ノ前ノ存在ヲ理解スルノニサエ、
時間ガ力カルトイウノニ。

覚醒

女の顔は髪で隠された。
だが、それでも梓は気付いた。
大事な親友であることに。

「人違いじゃない？」

黒服の女は否定する。

黒服の女が身体を少し動かすと黒髪の女の拘束が一瞬で解けた。

「上級魔術・茨地獄」

美女が魔術をかけ直すよりも速く魔術を発動させると、あつという間に先ほど素早い動きをしていた男はもちろん、全員の拘束を成功させた。

鋭い茨の棘が体に刺さり、あちこちから血が流れ、思わず苦痛の声が出る。

「幼馴染をこんなにする人はいないはず・・・私はデトロイト様に仕える組織、ダズの幹部兼作戦実行部隊、隊長のメレ。まあ・・・一応は、紺野詩音って女だったけど」

傷だらけになった彰達を見つめながら詩音は眼帯をはずした。
眼帯の下の目は閉じたまま、哀れむように左目で幼馴染たちを見ながら詩音は彰の前に立った。

「やりたくなかったけど・・・仕方がないか。死なれても困るし」

詩音は彰を拘束する茨を気にすることなく彰に抱きつき、首筋を噛んだ。

詩音の歯は皮膚を食い破り、彰の首筋と自分の唇を血で汚した。色素の薄い唇が赤く濡れ、薄笑いを浮かべた。

ゆっくりと彰を拘束していた茨が枯れ、彰の拘束を解いた。

彰が顔を真っ赤にしながら首の傷を抑えて詩音から離れると、詩音は薄笑いを消して戦っていた男に近寄った。

「キース・ソル……仕事の邪魔はつかしてたら、いくら恩人でも殺すよ?」

「フイー、いい加減に正気に戻ってくれないとまずいよお?」

閉じたままの右目を隠すようにまた眼帯をつけた詩音は男、キースを睨んだ。

だが、キースは怯えることもなく詩音を正面から見る。

「詩音、何が何なのか……ちゃんと話せよ」

伊槻が傷だらけになりながらも拘束から逃れると伊槻のだけでなく、他の茨も枯れていった。

伊槻は解らなかった。

伊槻だけでなく、彰も、海人も、俊也も、梓でさえも。

詩音が何を考えているのか。

普段、本気で怒る時の様な言葉使いを普段の表情で何の躊躇いもなく使っている。

そしてその言葉が冗談には聞こえない。

本気なのだ。

伊槻は人を簡単に傷つけられるととれる発言をしている詩音を許せなかった。

詩音は伊槻とよくつるんでいた。

仲のよかった友達であつたが、本気で一発殴つてやりたいという考えが頭をよぎり、自然に身体がゆっくりと動いた。服が破け、血があちこちから流れている身体で近づく伊槻を止めようと伊槻の前に出た俊也は伊槻の瞳を見て驚愕した。

普通の日本人らしい伊槻の黒っぽい茶色の瞳は紅くなっていた。

伊槻の体を流れる戦族^{ソル}の血が、極度の怒りによって戦族^{ソル}の能力を覚醒させたのだ。

そんな伊槻を見て詩音は無言で右手を伊槻と俊也に向けて突き出した手を握った。

白い光が集まり、白金のレイピアへと形を変えて詩音の手に収まった。

鋭い剣先が俊也の後頭部に触れる。

「関わるな。これ以上絡むようなら祐志は殺す。王族^{クラウ}だろうが万族^{オウル}だろうがな」

「祐志は無事なんだろうな？」

伊槻の後ろにいた海人が足を進めながら真正面に突き出した手を握った。

銀の光が集まって刀の形を作ると海人の手にぴつたりと収まる。

詩音を睨む海人の目は美しい翡翠色となっていた。

正族^{ジャディ}の純血は海人の髪色をも黒から青へと変えた。

海人は正義感が強い。

変わってしまった友のことを思い、いなくなってしまった友を思い、手に納まっていた刀を構えた。

元の友に戻ってもらうために、いなくなつた友を助けるために、海人は刀を詩音に向けた。

「覚醒が思った以上に早いな。ちょっと戦^やつてみたいが、警備隊^{ジャステイン}が来たなら逃げさせてもらう」

伊槻と海人の変化を見て笑うと、レイピアを地面に突き刺した。
レイピアが眩く光ると詩音は消えた。
遠くからサイレンの音が近づいてくる。

「やばいなあ・・・ビュークウ、僕達も逃げるよお」
「わかってるわよ。ちょっと不気味だけど我慢してね」

キースの呼びかけに答えて両手を合わせると、美女は目を閉じた。

「移動陣」

地面からたくさんの腕が伸び、全員を地面へと引きずりこんだ。

変ワツテシマッタノハ、誰？
オレ？真友？アイツ？
馬鹿ダッタ親友？
イヤ、変ワツテシマッタノハ世界ダ。
オレガ追イツケナイダケナンダ。

血と才能

地面へと皆が引きずりこまれた後、サイレンの主である警備隊^{ジャステイン}がやってきた。

ダズの幹部の一人が現れたという情報を得てここにやってきた警備^{ジャステ}隊^{イン}だったが、そこには誰もいなかった。

ほんの数分前には術を使っている者の反応があつたのだが、消えてしまい、後には地に刻まれた文字だけが残された。

『I receive true King to my who
le families soon!』

（我は真の王を近いうちに我が一族に迎え入れる！）

真の王、最強の王族^{クラウ}を一族へと取り入れ、魔力世界^{デメイス}の支配へとダズは乗りだす

魔力世界^{デメイス}は我が一族のものだ！

『

彰達はキースとキースと一緒にいた美女——ビューク・ジックと一緒にある山の洞窟にいた。

小さな灯りのおかげでお互いの顔は見る事ができるが、周りの様子は見難い。

正直、梓と俊也は半分そのことに不安を感じていた。

だが、キースとビュークはそんなことを無視して5人に向き直った。

「いろいろと訊きたいんだけどお？」

「貴方達何者なの？」

「そう言われても、私達もなにがなんだか・・・」

「髪色が変わる構造はこっちが訊きたい位だ」

質問にまったく答えることのできないことにビュークはため息をついた。

「仕方がないわ。お互い、持ってる情報だけでいいから出しましょ。早くしないと大変なことになってしまっし・・・キースもいいわね」

ビュークは隣にいるキースを見た。

キースは手を頭の後ろで組みながら、いつもと変わらぬ表情で答えた。

「んぐ、まあ反対はしないけどお。万族の子なんかはショックだと思っようお？」

「何億もの人の命と、一人の精神を比較してみなさいよ！！人の精神はいつか回復できるのよ！あなたはまだ人の命を背負ってる自覚がないの！？」

語尾が延びるような口調で、くつろぎモードに完全に入ってしまったパートナーにビュークは怒鳴った。

「何億の命を守る子の精神は壊したくないってただだよお・・・話さなきゃ意味ないってこと位分かってるよお。だからあ、話すよお。この世界にいる死族のリーダーデストが一族を中心に魔力世界デメイスの支配を始めたんだあ。その組織の名前はダズっていつてねえ、リーダーは史上最悪の男のデトロイトオ」

言いづらそうな顔をしたキースに変わって、落ち着きを取り戻した

ビュークが続きを話す

「自分と万族オウルの融合を成功させて一人の娘を生んでる。それがイー
ファイ・デスト」

「嘘だ」

伊槻が即座に否定した。

小さい頃から自分たちと一緒にいるのだ。

そして、詩音の家族にも会っている。

「残念ながら彼女には血が繋がっている親はこの魔力世界にしかないわ。私達も一度無力世界ヴェールに言っ
て彼女を監視したときに彼女の家族を見てきたわ」

「ファイの家族は全員が技族クックだったあ。ファイは血縁的には死族デストになるしい、低い確率でも万族オウルなんだよ。つまり、ファイの家族が技族クックということはファイの本当の家族じゃないって事だよ」

2人はあくまで冷静に現実を突きつける。

少しでも厳しい態度を緩めれば、情が出てしまう。

昔から役目として背負っていた自分と、突然に突きつけられる彼等とは感じる重みが違う。

そして、それを辛いだろうからと庇ってしまえば自分だけでなく、結局は彼等までもが危険な目に遭ってしまうのだ。

「デトロイトの目的は真の王になって魔力世界全土を支配下に置くことよ。最強の王族クラウの子と、自分の創り上げた娘の融合によって最強の人間兵器を生み、そしてそれを使った恐怖政治によって支配するつもりよ。放っておけば無力世界ヴェールや地獄世界スカルアースはもちろん、天空世界メンや竜神世界も支配されるでしょうね」

「ファイはデトロイトの目的に感じて正界にやってきたんだあ。
レジスタンス

「まだ物心ついたばかりだと思うよあ・・・ここにいても危険だから
無力世界に逃がしたけどお、同じ頃に王族も感づいてゼノを無力世
界に逃がしたんだあ」

逃亡先である無力世界、そこで2人は会ってしまった。

それだけならよかった。

会うだけならば、お互いの血筋について触れることはないから。

だが、2人は仲良くなってしまった。

詩音はたぶん最近になって気付いたのだろう。

彰が父親の目的の為に自分と融合させられる相手だと。

同時期に監視をしていたビュークも気付いた。

だが、デトロイトの狙っている王族とデトロイドの娘が一緒にいて
はあちらも監視をつけている可能性は高い。

その2人の近くに、覚醒の始まっていない純血である正族や天才の
血筋である万族がいた。

正族と万族とも仲良くなってしまっている今、派手に動いてしまえ
ばダズに殲滅され始めている正族はもちろん、危険視されている万
族までもが殺されてしまう。

それだけでは終わらなかった。

そのまわりにいる他の人の血筋を調べてみれば戦族も魔族も技族も
いた。

しかもそれが世界が一つだったときにたまたま無力世界の区域に入
っていた、非現実世界で知らない人はいない位の天才の家系。
7部族全て、部族一の天才である代表が揃ってしまった。

「だからもうねえ、手遅れ何だあ」

一息ついて、キースとビュークは重たい口を開いて言った。

彰、海人、伊槻、俊也、祐志、梓、詩音。7人の中で、
誰が死んでも乱は必ず起こる。

畏二向カッタノハ自分。

仕掛ケタノハ、己ノ運命。

進マセタノハ、己ノ血。

ダッタラ、作動サセタノハ誰ダ？

ソシテ、戦争ヲ起コススイッチヲ押スノハ誰ナンド？

夢

ぼんやりとした世界の中に自分、彰がいた。

モノクロ
白黒な世界の中で自分は剣を持っていた。

剣だけは鮮明な色を持ち、焦げ茶の峰と白銀の刃を持っているのがわかった。

白銀に光る刀身は淡い光を放っている。

自分の周りの風景はピントの合わないレンズを覗いているようにぼやけており、ほとんどわからない。

その中で、確実に彰に近づく『もの』があった。

彰はそれに向かって剣を振り上げ、振り下ろす。

愚直なほどに真っ直ぐ、フェイントも入れない動作に彰に近づく『もの』の動きが止まった。

その代わりに紅の花が白黒の世界の中で辺り一面に鮮やかに咲いた。1センチにも満たない小さな花から5センチくらいの花たちの中に、2メートルはあるであろう大きな花がいくつか咲いていた。

彰は大きな花の中の一つに近寄る。

だんだんと、ピントが合ってきたかのように視界がはっきりとしてくる。

くれない
紅の花は鮮血だった。

大きな花の中央には人がいた。

身体に大きな傷を刻まれ、苦悶の表情を浮かべながら絶命した哀れな人の姿がしっかりと見えるようになった彰の視界に映る。

目の前で死んでいたのは、海人だった。

周りを見渡せば、他の幼馴染たちも同じように身体に傷を刻まれて死んでいた。

俊也と祐志が並んで肩から脇腹にかけて大きな傷を刻まれて死んでいる。

その2人のすぐ近くに、まるで2人を守ろうとしていた様に剣をし

つかりと握ったまま腹部から血を流して死んでいる伊槻もいた。梓は詩音に守られるかのように抱きしめられながらも、2人とも身体中に無数の切り傷を負って死んでいた。

海人は一番酷く、首から身体の右側を通して右足の先までの大きな傷を負っていた。

だが、彰は泣きもしない。

ただ無言で目の前にある幼馴染の遺体を見ていた。

ゆらりと死んだはずの海人が立ち上がり、彰の首に手を伸ばした。

彰は驚きもせずにその手を掴む。

海人が薄笑いを浮かべて言った。

「生きるか死ぬか、殺すか殺されるか、友か想い人か、自分か相手か。2つに1つの世界なのは知っている。彰だってそうなのも知ってる。いつかはお前が人を殺すかもって思ってたさ。

だけどな、お前は理不尽な理由で仲間を殺せるとは思わなかった・・・失望したぜ！」

海人はそう言うとその場に崩れ落ちた。

「ねえ、怨むよ！」

「信じてたんですよ！」

「お前だけは違うと思ってた俺が馬鹿だった！」

「何で！」

「・・・ハハッ！」

祐志が、俊也が、伊槻が、梓が、彰の意識に直接訴える。

その中の一つの笑い声が、彰の前に形となって現れる。

ゆっくりと人の姿へと変わった。

「いいぞ、ゼノ。仲間を切り捨てて頂点へと・・・さあ、私の腕と

なり、魔力世界を！」
デメイス

人形が彰の肩を掴む。

彰は何も言わず、首を縦に振ろうとした。

「彰あ！」

叫んだのは、誰だ？

「彰あ！起きろ！！・・・ってトシくん！」

伊槻はキースたちの話を聞いた後に仮眠を取っていた全員を起こしていた。

昔から寝起きが悪く、遅刻の多かった海人を伊槻と俊也が2人掛りで起こし、彰を起こすのに悪戦苦闘していた伊槻を待っていた俊也はいつの間にやらなかなか起きない海人を起こすことでの疲れからなのか、またも寝てしまっていた。

「寝足りないんですよ、伊槻の寝言がうるさくてなかなか寝つけませんでしたから」

「同じ理由で眠い」

「悪かったな」

彰は悪い夢を見たことを頭の片隅へとなんとか追いやると3人の会話へと入った。

「さつさと寝ないから寝不足になるなんだよ」

「一番最初に寝てアズちゃんの名前連発して安眠妨害するからだろ」

「海人も言ってますたよ、梓って」

「アハハハハ、人の事言えねーじゃん！」

「ちなみに伊槻は海人が寝る前は2次元キャラの名前、寝た後はし・
・・」

「うわあああああああ！！」

「伊槻、寝起きの大声は耳にきついからやめろ」

「俊也あ、伊槻は何言ってたんだ？」

「隣のクラスだった志乃ちゃんだろ。伊槻好みのちっちゃい子」

「ああ、俊也と身長変わらなくて梓並みにか弱くて可愛いあの子？」

「でもお、戦族^{ソル}は強い子に興味があるかあ、恋愛自体に興味がない
かのどっちかだよお」

「いつの間にキースが入ってるし・・・って、何で俺ネタで話を進
めるんだあ！！」

『うるさああい！！』

朝からうるさい男たちをビュークが隣の部屋で怒鳴って黙らせた。

いつもと場所は違うけど、いつものような日常。

彰は夢の事を忘れて話へのめり込む。

それでもやつぱり、祐志がいけないというその一つの寂しさをどこか
で感じながら・・・

オレハ警告ヲ無視シタ。

最初デ最後ノ警告。

デモ、警告ヲ無視シテイナカットシテモ、サホド変ワラナイ。

ソレホドマデニ、過酷デアッタ。

セルビアとセアン

ビュークに怒鳴られた後、5人はある程度身だしなみを整えて部屋を出た。

洞窟の奥の更に奥には巨大な基地があった。

その中のキースの個室に彰・海人・伊槻・俊也が、ビュークの個室に梓が仮眠を取るためにいた。

即行で寝ていたキースと彰、静かだった部屋にいたビュークと梓以外は大きく寝てはいなかったのだが、朝の様子では、思ったより疲労はないようである。

無力世界では日をまたぐまで起きていたり徹夜で話していたりしていたためだろう。

彰達6人を基地の中心部へとキースとビュークは連れて行く。

重そうな鉄の扉の前に立つと、キースはその扉を押した。

ゆっくりと扉は開き、扉の向こうが露わになる。

扉の向こうには10〜20人位の人と空席の目立つたくさんの椅子とテーブルがあった。

「改めてようこそ。私たちの組織、^{レジスタンス}正界へ」

「ビュークは正界のボスでえ、俺は作戦実行部隊の隊員なんだあ」

「キース・・・あなたは特別作戦実行部隊の隊長でしょ」

「あははあ、そうだったっけ？」

ビュークは前を進むキースの馬鹿っぷりに頭が痛くなった。

「でも、隊員はほとんど出払ってて部隊として出たことは1回もないから仕方がないですわ」

「たしかにそうなのら〜」・・・僕もキースの部隊だけど、出たことないのら〜」

銀髪の女の子と、明るい緑の髪の男が笑いながらキースの肩に手を置いた。

「私はセルビア・クラウですわ。よろしく願いします、ゼノお兄様」

「僕はセアン・ジャティなのら〜」エース君、会えて嬉しいのら〜」

特徴的な口調でセルビアは彰に、セアンは海人に笑いかけた。

セルビアはさらさらの銀髪を耳の下で緩く結び、薄紫のシンプルなワンピースを着ていた。

銀髪の下から覗く大きな瞳は紫水晶のように綺麗に透き通っていた。中学生くらいの幼い顔はとても可愛らしい。

梓に負けず劣らずの容姿をもった彼女は小柄な梓とさほど変わらぬ背丈だったが、身体の発育はその身体には似合わぬほどに育っていた。

そんなセルビアが彰に対して「お兄様」と言った。

「お・・・お兄様？」

急に妹宣言をされて、納得できるほうがおかしい。

納得するのは、ロリコンでシスコンの俊也位だろう。

今も「後数年したらメグちゃんも・・・」と一人で自分の世界へと入ってしまったている。

そんな俊也は放っておこう。

彰は梓に負けなくらいの容姿を持った女の子のいきなりの妹宣言に混乱していた。

「そうですね。私のお兄様はゼノリー・クラウ一人だけなんですの。

私とお兄様のお母様はシリス・クラウ、お父様はアルト・クラウと
いますわ」

「ええ、でも・・・」

「お兄様はお母様と顔つきがそっくりですわ。お母様はすごく自由
奔放な方でしたから、お兄様もそうなのでは？ちなみに童顔は私と
同じですわ。一応、私はお兄様とは一つしか違いがないんですよ」
「・・・そうですか」

童顔の言葉が彰の心に刺さった。

その彰の後ろで必死に笑いをこらえる伊槻と俊也をセルビアが見比
べた。

「随分とチビの癖に老け顔ですわ・・・おいくつですか？」

「18です・・・」

綺麗な薔薇には棘があるとはこの事だと俊也は痛感した。

女性相手にはめったにキレない俊也だが、お嬢様風のセルビアの発
言に危うくキレかけた。

だが、セルビアはそんなことにまったく気付くことなく梓へと歩み
寄った。

「貧乳」

何の前触れもなくハッキリと言ったセルビアに梓は開き直ったかの
ような笑顔を見せつけた。

「ええ、そうですよ。でも、そこまで大きいと邪魔でしょう？それ
に、胸は脂肪の塊ってご存知？」

黒々としたオーラを出して梓はセルビアへと言い返す。

そんな梓を見て海人は思った。

こうな切り返しができるのは絶対詩音の影響だと。

無垢な梓を帰してくれと嘆きながらも、気に食わなかったセルビアに梓が言い返しができた事をよかったと思う。

「ビュークはこの子の席を外さして欲しいのら」

「ちよつと待つて！」

「これ以上喧嘩はさせないわ」

セアンは一触即発な状態の2人の間に入るとビュークに梓を引き渡した。

「知り合つて早々喧嘩しちゃだめなのら」お兄さんの好きな人だからつて敵対心を剥き出しにしたらお兄さんにも嫌われちゃうのら」

セアンは青髪に碧眼の青年だった。

やや癖のある髪なのか、ただ普段髪を整えることをしていないだけのか、ぼさぼさの髪の下の楽しそうに歪められた目は一発で彰の心を読みとり、躊躇なくそれをバラした。

「ンナアッ！！」

「おお、当たつてる」

彰が顔を真っ赤にし、その後ろで海人が拍手した。

そんな2人をクスクスと笑いながら他の人たちの心をも読んでいく。

「エース君と魔族ジックの君もあの万族オウルの可愛い子が大好きなようなのら」戦族ソルの君はここにはいない子が大好きらしいのら」僕は会った事ないけどとても強気で怖いって噂の子なのら」僕はとても

じゃないけど近づきたくないのらっ」

「梓あんなののどこがいいのかしら？」

「セアン！サクツとバラすなあ！」

「な・・・何を言ってるんですか。ぼくはアズちゃんをお・・・幼馴染としか見てませんよ！」

「動揺してたら説得力ないよ、俊也」

隠せないと思った伊槻はいつものように突っ込みを入れ、俊也は動揺しながらも否定した。

海人だけがいたって冷静だった。

「なあ伊槻。お前ってM？」

「いや、あっちが超ドSなだけだ・・・って、何言わせてるんだよ！」

「志乃ちゃんじゃないんだ」

「死んでも言わないからな！」

「言ーえ、言ーえ、言ーえ、言ーえ、言ーえ」

「うるせえよ！！」

「はいストップなのらっ」これから技族クックの男の子助けに行くから用意するのらっ」

賑やかだった4人が一斉に言葉を止めた。

楽しく賑やかだった空気と4人の顔が一瞬で引き締まると、セアンは部屋の一番奥へと移動した。

キースもその後を追い、結果7人が部屋の隅へと集まった。

「そういえばアズちゃんにも話さなくていいのか？」

「うん、ビュークは多分後からくると思っけど万族オウルの娘こはちょっと連れていけないのらっ」

「万族オウルの能力は惜しいけどお」

キースは担いでいた大剣を抜いた。

刀身が鏡となって自分を映し、自分を見つめた。

「ダズの幹部に洗脳術を持つてる奴がいるから結構危険なんだあ。今のミューズは支えの一部だったファイがない、しかもダズとして敵にいるってことで精神不安定だと思っただあ。簡単に敵になって全滅させられる可能性もあるしい・・・誰でもその可能性はあるけどねえ。俺でもビュークでもなるかもしれないしねえ」

自分の支えとなっていたものを一部失った梓を連れて行くことはあまりにも危険であることを諭す。

諭しながらその危険が自分に降りかかるかもしれないと、キースは自分の支えとなっている剣と2人の人物を思い出す。

3つのうちどれが壊れても自分は狂うだろう。

きつと、この中の誰よりも。

「さっき言ったとおり万族^{オウル}の娘^この事を想うなら支えとなってるはずなのら」不利になったら正界^{レジスタンス}の組織壊滅つてのもありうるのら」

梓を想う人が多いこのグループで梓を連れて行き、そして敵となっただけは精神的にキツイ。

その上梓と同じ状況になって集団洗脳にかかれば一気に正界^{レジスタンス}の戦力は落ち、逆にダズの戦力は上がってしまう。

「行きたくないなら行かなくていいですわ。ただ、助けられる可能性は低くなりますわね。」

セルビアの選択肢を彰達は躊躇いもなく決めた。

「行くに決まってるだろ!!」
「いい返事なのら〜」

それからしばらくして7人は正界^{レジスタンス}の基地を出た。
白ベースの戦闘衣に身を包んで――

初魔術

レジスタンス
正界の調査部隊の情報を頼りに祐志の連れて行かれたと思われるダズの基地へと徒歩で7人は進んでいた。

なぜ徒歩かというと、彰達は能力の使い方をほとんど分かっていないために教わる時間が必要だったからである。

早く行かないと祐志が洗脳とかされるかもしれないし、万が一ということもある。

理解したところからは術移動の予定だが、ビュークは梓の相手もしなければならぬ。

最上級の移動術を使えるのはビュークのみ。

王族^{クラウ}のセルビアの移動術は二人ほどが限界、セアンは苦手分野でキースは短距離専用の単体移動術のみということで、魔族^{ジック}である俊也の才能開花を待つしかなかった。

「叩き込めるだけ叩き込みますわ」

セルビアは大量の情報を早口で話し始めた。

延々と続く情報を要約しながら理解していくのは俊也と海人だけで、彰と伊槻は俊也達の要約した説明を聞きなおしていた。

魔力^{メイ}の力、魔力^{メイ}は血液と共に身体中を流れており、脳からの命令と流れる血によって魔力^{メイ}を変形させたり、エネルギーとして発動させることができる。

つまり、スピードを上げたい、雨を降らしたいと強く願うと自分の脚力を上げたり、雨を降らすことができる。

海人が詩音に会ったときに手に剣を出したのは、海人の中の正族^{ジャティ}の血と魔力^{メイ}、そして海人の強い正義の意志があったからだ。

魔力^{メイ}が変化する要素である血によって大きく2つに魔力^{メイ}は変化する。
戦族^{ソル}や正族^{ジャティ}が得意とする身体強化と魔族^{ジック}や技族^{クック}が得意とする体外変

化。

身体強化には脚力アップ等、自身の能力を上げることができ、体外変化は雨を降らす等、自分ではないものを作り出すことができる。2つとも魔力の量が多いほどより強力に、大規模にすることができる。

魔力の量は精神力や生命力と関係していることはわかっているのだが、いまだ詳しいメカニズムはわかってはいない。

「完全に自分の命だけが頼りだからあ、調子に乗ってバンバン使ったら駄目だからねえ」

「魔力の循環を感じる事や魔力を一箇所に集中させると事は天才の血筋を持つている貴方達でもまだ無理だと思いますわ。慣れてくれれば上級魔術もできてくるでしょうし」

につこりとキースとセルビアが笑った。

目の前にいる天才の切り開く未来を、天才達自身の未来を期待した笑みはとても優しくかった。

「ちょっと試してみますか？」

「そうだね、ぶつつけ本番も不安だし」

「あつ、俺も！」

「なにをやるうかな・・・」

俊也は目を閉じて両手を胸の前で合わせ、精神統一を始めた。

海人が逆に目をいっぱいに開けて両手を広げる。

伊槻が銃を構えるまねをする。

彰は左手で顎を触りながら少しの間考えると両手をだらりと下げた。

「合成魔術・凍嵐雷」

「上級魔術・火炎河」

「印・無限狙撃」

「秘術・宇宙遊飛」

自然と自分の口から術名が飛び出す。

同時に4人や4人の周りで変化が起きた。

俊也の髪が淡く綺麗な紫色に、伊槻の髪が眼の色と同じように真っ赤に染まった。

俊也の魔族^{ジック}の覚醒が始まり、伊槻の戦族^{ソル}の覚醒が完全なものとなったのである。

海人の周りを炎が大河のように広がり、辺りの良いとも悪いとも言えない微妙な天気が凍えるような寒さと雷を伴う激しい嵐の天気へと一変した。

海人の思うように炎の河は流れ、強弱までもが自由自在に変化した。俊也は氷と光の術を混ぜ、悪天候をこの地域一帯に実現させた。

並の魔族^{ジック}ではとても真似出来ない術を俊也はいとも簡単にやり遂げ、今もなお維持し続けている。

伊槻の手には鈍く光る漆黒の拳銃が握られていた。

拳銃の側面には∞《無限》の記号が紋章化したものが描かれており、紋章は金色に光っていた。

体外変化の使えない戦族^{ソル}では異例である体外変化を使い、その中でも難しい『印』を伊槻は成功させた。

その隣で彰は重力に完全に逆らっていた。

無重力空間にいるかのように彰は1分以上も宙に浮いていた。

王族^{クロー}の持つ莫大な魔力^{メイ}によって成功させたのである。

だが、一つ問題があった。

セルビアは彰の身体から使いきれずに滲み出ている魔力^{メイ}の量を見て、極めて危険と判断した。

「お兄様！術を止めて！」

彰は術を止めて着地する。

足に力が入らずに彰はそのまま前に倒れた。

大丈夫かと海人が呟きながらも起こしてやるが、なかなか起き上がることができない。

「お兄様、魔力が多すぎて制御ができていないわ・・・」

彰が使った術はセルビアも使ったことがあった。

正直、30秒も維持できなかった。

それを彰は1分以上も維持しながら、術の維持に使う魔力の倍以上の量を体外へと出していた。

使い切れない魔力が体外へと出る際に僅かながらに身体を壊している。

生命を維持するためのエネルギーだが、体外へと出れば破壊のエネルギーとなる。

大量を超える量の魔力を出し続ければ自分の命を削り切る前に身体が壊れてしまう。

「うう・・・しかたないねえ。本当に危険なときだけ術は使っていないよお」

キースが困ったように頬を掻きながら言った。

ここまでの才能をこんなにも早く開花させるとは思わなかったのである。

「よかったのら、首の傷が思った以上に魔力を身体を傷つけずに放出してくれてるのら、脳のダメージが一番怖いし、首は唯一の脳への魔力の供給ラインだったから、傷があつてよかったのら」

彰は昨日の事を思い出して首に手をあてた。
そんなに大きな傷ではない。
それに、血はもうとつくに止まっていた。

「あら？セアン。あの傷には術がかかっていることがわかりませんか？魔力を吸収する封印術が」

「んゝゝゝ。そう言われて見ればそうかもしれないのらゝゝ誰にかけてもらったのらゝゝ？ゝゝゝゝ」

「あつ、昨日ファイがゝゝゝ」

「そういえばなんかやっていましたね」

「ふゝん、詩音がゝゝゝ」

「まさか知ってたのか？彰が魔力を制御できずに身体壊すほど放出するってゝゝゝ」

「それはないよ。昨日は術なんか使ってない」

—— フフッ

7人があーだこーだと話していると、不意に忍び笑いが聞こえた。

再会

忍び笑いが聞こえたほうに目をやると、少し離れたところに生えた木の下に祐志が立っていた。

「まさか本当に来るとは・・・嬉しいな」

祐志は嬉しそうに笑うと7人のほうへと向かってきた。

俊也が一番に祐志へと駆け寄った。

少し服や顔が汚れてはいたが目立った傷もなかった。

無事でよかったよ。

俊也はそう言おうとしたが言うことは叶わなかった。

「グッ・・・」

「おかげでこっちから向かう必要がなくなったから」

祐志は一瞬で作り出した短剣で俊也の腹を刺した。

俊也の白い戦闘衣が鮮血によって真っ赤に染まり、俊也の足は力を失い崩れ落ちた。

「急所は外したよ。次は心臓狙うけど」

崩れ落ちた俊也を片手で無理矢理立たせると空いた手でまた短剣を作り出した。

短剣を胸に突きつける。

俊也の荒い呼吸で上下する胸が切先に触れる。

「彰。一緒に来てもらおうか？それとも、全員殺してから無理矢理連れて行こうか？」

できれば後者がいいけどねと心の中で笑う祐志。

痛みに耐えながらどう逃げようかと頭を悩ます俊也。

隙を探すセアンとキース。

術の発動準備をするセルビア。

「どうする」と無言の相談を始める海人と伊槻。

予想不可能な未来を考える彰。

沈黙の時間が生まれ、一瞬のうちに変化は起きた。

「うあああああ！！」

祐志の手に黒い光が生まれ祐志は激しい痛みに襲われた。

短剣と俊也を支える力を手放し、結果として俊也は刃から逃れられる。

黒い光はすぐに消え、痛みのなくなった手で短剣を拾い直される前に俊也はなるべく遠くへと地面を滑らせる。

海人がそれを足で受け止め、隣では戦族の十八番である身体強化を使った伊槻が俊也の腕を掴んで祐志と距離をとるために跳躍。

伊槻と俊也が着地したところでセルビアが俊也の傷の回復のために準備していた回復術を発動させる

人質も武器もなくなった祐志に向かって隙を窺っていたセアンとキースが剣を抜いて飛び出す。

だが、剣は祐志に届くことはなかった。

「ゼノ・・・」

「邪魔あ」

祐志に向かって飛び出した2人を見て彰は2人を上回るスピードで走り出し、先回りして祐志を庇うかのように腕を広げた。

無言で体中に防御印を発動させた彰は斬撃を防ぎ、真っ直ぐに目の

前の2人を見る。

「俺の親友だ。傷つけるな」

多分止めなくても祐志は死ななかったと思う。

でも、見ていられなかった。

甘いことだとは思う。

けれど、心の声に身体が勝手に動いた。

思考を全て無視して彰は祐志を守った。

「甘い。真の王と呼ばれるお前が言う言葉じゃない。時には正義でも殺す。今の場合、殺しておいた方が後々安全だった」

セアンがいつもの口調を捨てて彰を睨む。

彰は怯むことなく、逆にセアンを睨んだ。

「殺すことが正義か？」

「違っただろうな」

「それなら、なぜ？」

彰の問いに答えようとセアンが口を開こうとした。

だが、それよりも早く祐志が叫んだ。

「こうなるからだよ!!」

祐志が先ほどよりも大きめの剣を作り出して彰の背を狙って振り上げた。

しかし、その動きはそこで止まってしまった。

「……ラル、任務失敗。一回帰れ。後始末は私がやる」

祐志の後ろに突如詩音が現れ、祐志に触れて祐志をその場から消した。

詩音は昨日と変わらぬ格好をしているのだが、昨日とは違う雰囲気を出していた。

昨日のように冷たく殺伐としていた感じではなく、いつものような、幼馴染達といるときのような平和な感じがした。

「俊也、生きてる？」

心配そうな声で詩音は尋ねた。

「生きてます。セルビアが回復術が使えたのでなんとか」

「そう、よかった。梓は？」

「都合上置いてきた」

「そうなんだ……。まあいいや、一応言っとく事があるけど、祐志は完全に洗脳されてるから自分でも助けられなくなっちゃったから。救出から組織壊滅だなんて面倒なこととしてないでさっさとダズを壊滅させてくれる？」

昨日とは違う詩音に彰達はもちろん、キースまでもが呆然としていた。

そんな詩音を怪しく思い、伊槻は尋ねた。

「まさか、今日のが本物で昨日のが偽者だったのか？」

「両方本物だけど？昨日は監視がいたからああしただけ。今日は自分が監視役だから地いつものに戻しただけ」

何も危害を加える気はないからと言いながら詩音は腰に差していた銃を抜いた。

とつさにセアンと海人が剣を構える。
だが、その銃を詩音は伊槻に投げた。
伊槻は片手でキャッチして、その銃を見た。
何の変哲もないただの拳銃である。

「彰の魔力が暴走したらそれで撃ちな・・・銃弾は麻醉弾。撃てば自分へ連絡がくるから魔力を止める。昨日かけた術を理解してるなら、キース、伊槻、撃つことに躊躇はしないだろ？」

詩音が真剣な眼差しで伊槻を見る。

伊槻はしばらく銃を見つめた後、腰に差した。
頷くことはしなかった。

やっぱりまだ信じきれない。

一応は敵である詩音の言うこと全てを鵜呑みにしてはいけませんが、少しは信じてみようと思う。

疑うような表情の伊槻から警戒を解かずにいるキースへと詩音は顔を向けた。

「いくつか、謝らなきゃいけない事があるんだけど・・・なんかいい隠れ場所はない？」

「この近くにある正界の第3支部はあ？あそこならダズも来ないんじゃないの？」

「駄目だ。・・・あそこには正界の情報網目当てのダズのスパイがうようよいる」

「街な・・・フィーは警備隊にも見つかったちゃ駄目だしねえ」

「外じゃ見つかりやすいし・・・自分の行くところはダズに握られてるだらうし・・・」

「それならあ・・・」

2人がいろいろと案を出しては却下していく。

その隣で海人が案を出した。

「移動魔術で正界本部の部屋に直接行けばいいんじゃないか？ビュークはボスなんだから専用の部屋持つてそうだし、鍵もついてると思うんだけど？」

「ああ！確かにビューク^{ボス}の部屋ならダズはいないしい・・・ビュークもミューズもいるねえ」

「・・・そういうところは術体制がしてあるんじゃないか？」

「うん。確かにしてあるけどお、部屋の前なら大丈夫う。俺がいれば開けてくれるよお」

「それじゃ、行きますか」

俊也が移動魔術の準備として精神統一を静かに始めた。

8人を一斉に移動させることにはあたりまえだが大量の魔力^{メイ}を必要とし、それを身体中から急いでかき集める。

自分の体の中に気を集中させて魔力^{メイ}の溜まっている所を探し出してそこから少しもらう。

その間にも魔力^{メイ}の溜まっているところを探し出していく。

そうして集めた魔力^{メイ}を俊也は一気に地へと放った。

「陣・長距離移動」

俊也を中心に大きな円を描くような緑色の紋様が彰達の足元に浮かび上がり、そして眩く光った。

次の瞬間、紋様の上にいた彰達はいなくなった。

詩音の過去

長い廊下の突き当たりに8人は立っていた。

突き当りには頑丈そうな扉があり、キースはその扉を開けようと手をかける。

両開きのその扉を押そうとしたその瞬間、勢いよく扉が吹っ飛んだ。キースはすぐさま吹っ飛んだ扉を背中 of 剣で真っ二つに斬った。

頑丈そうな鉄の扉を何の苦もなく斬った後、キースは部屋の中を見た。

キースの記憶が正しければだっ広い部屋の中には大きな机と椅子が一つずつと、数えきれないほどの本棚と、本棚に入りきらなかった恐ろしいほど高く詰まれた本の塔がこちらにも数えきれぬほどある。本の塔は一人が通れるスペースをあげながら等間隔で所狭しと作られている為に、だっ広いこの部屋が狭く感じられるのだ。

「ビュークウ、危ないよお！ってエエエ！？」

だが、部屋の中には本しかないのではないかというほど横幅も高さも大きな大きな本の山ができていた。部屋のはほぼ全てを本が陣取っている。ビュークの姿も、梓の姿もない。

「た・・・助けて」

「ビューク！」

その本の山から手だけを出したビュークを皆で引っ張ったり、本をかき出したり、掘り出したりして救出する。

ビュークが本の山からなんとか抜け出すと、ビュークの服に？まっっていた梓も出てきた。

「ハア、死ぬかと思ったわ」

「私も・・・」

「何でこんなになってるんだよ・・・」

「術の練習してたの」

梓もビュークに術の基礎を教えてもらい、ためしに風を操ってみた。「風」というよりは「空気の流れ」を制御してみたのだが、思ったよりもすごく簡単にできてしまった梓は少し難しい「空気の密度」を変えて圧縮した空気をビュークの作り出した的に当てていた。

そのビュークの作り出した的という物が、1円玉と変わらない大きさだった。

空気を圧縮して打つということは梓にとって簡単で、密度を1000倍まで上げることさえ容易くやってのけたのだが、射撃なんてやらない梓に精密な射撃はできず、何発かしか的に当たらなかった。その外れた弾がいつ崩れてもおかしくない本の塔に命中してしまつて崩落したのだろう。

崩落は崩落を呼び、全ての本の塔が崩れて一つになり、本の山ができた。

「一応外した弾は私の作り出した空気の壁で勢いを相殺したはずなんだけど。失敗、失敗、テヘッ」

「相殺とかの前に、こんなとこで術の練習をするのがおかしいことに気付けよ！」

「ビュークウ、なんか気持ち悪いよお。本で頭でも打っちゃったの
お？」

ビュークの発言に伊槻とキースが突っ込む。

その後ろではセルビアとセアンがぼかんと口を開けていた。

自由で呆れるほどの戦闘狂であるキースを正しい道へと導いていた

ビュークだ。

こんな一面を見せられてそうなってしまった2人だが、すぐに話を切り出した。

「ボス、祐志レンの救出の件ですが・・・」

「知ってる。ある程度はキースとの同調で見てたから。多分そのときに氣をとられて一部壁がもろくなったんだと思うわ。」

イーフィ、話せるところだけでいいから正直に話さない」

ビュークは詩音を真っ直ぐに見つめた。

見つめながら術を使って本の山をかたしていく。

宙を舞う本の数が詩音に威圧感を与えるほど一気に増え、そして一瞬で片付いてしまった。

ふつと息をついた詩音は話し始めた。

「あんまりここにいと不味いから手短に話す。口出しは一切するな」

当たり前のように詩音は人間とされているが、生まれが特殊な為に別の名がついている。

特殊生命体、アルスロッティ・・・固体名はアルセイディ。

特殊生命体アルスロッティを作り出すには死族デストの特殊能力である命の契約を利用しなければならぬ。

特殊生命体アルスロッティは親2人の能力を引き継ぎ、高確率で親とは違う能力、しかも天性の才能を持って生まれる。

詩音の場合、戦族ソルの能力を手に入れた。

この戦族ソルの能力のせいで詩音は物心ついてすぐダズに入れさせられ、自分と融合させられる相手を探さねばならなくなった。

父親と融合させられてしまった不幸の母は詩音に大量の魔力メイと知識を授けていた為に、巧妙に仕組まれていた父の嘘を見破ってダズか

ら離れ、僅かな情報から正界へとやってきた。

僅か5歳の少女がダズに所属していたこと、そしてダズのボスの娘であることに驚き、哀れに思った当時のボスが自分でも手の届かない無力世界へ逃げるように指示した。

詩音の持つ魔力はいとも簡単に詩音を無力世界へと送り込み、同時にその世界で家族となる人を探し出し、詩音を実の子供だと思い込ませるように洗脳をかけた。

無意識のうちにしていた。

そう思っていた詩音だが、真実は違っていた。

ダズに全ての行動は筒抜けだった。

無力世界から詩音はいつでも召喚で帰らせる事ができると踏んだ父が魔力世界で正界の手に落ちるより安全だと考えて無力世界での安全を確保した。

それを知ったのは魔力世界に召喚されてからだ。

中学生を卒業した頃、魔力世界に召喚されて父と再会、全てをしつかりと聞かされ、そして自分はあちこち逃亡した。

魔力世界で父と再会し、ビュークとキースに出会った。

ビュークとキースと共にダズの追っ手から逃げ、地獄世界に渡って何度も死にかけた。

ダズの幹部の一人、キャレに追われて地獄世界から竜神世界へと飛び、そこから天空世界を経て無力世界へともどってきた。

天空世界辺りからはキャレに追われることはなくなり、ホッとしたのも束の間、高校にはキャレの姿があった。

永沢時亜として、詩音の前に現れた。

だが、何も起きなかった。

事が起きたのは召喚される前の日だった。

時亜は詩音に話を持ちかけた。

「彰と共に魔力世界に戻れば無関係な幼馴染の命の保障はできる」
できれば承諾したかった。

無関係な幼馴染たちを巻き込みたくはないからだ。

だが、そのとき詩音は融合に利用されてしまう相手が彰だと気付いていた。

無関係ではない彰の命の保障はできないということだ。

融合のベースは彰ではなく、自分が使われる。

それでは彰は100%死ぬ。

昔、自分の母がそうであつたように。

詩音は時間が欲しいとその場を離れた。

そして次の日、いきなりに召喚をされてしまった。

抗議の為にダズへ向かったがそれが仇となった。

マーモの家はまだ皆が残っている。

刃向かうなら死しか残されていない。

そして、最悪なことに特殊生命体は他に1体いた。アルスロツティ

今度は母の双子の妹を使って作り出した特殊生命体——アルスロツティ 固体名アリ

ユリーは父に忠実だった。

アリユリーは詩音そっくりだった。

キャレと共にアリユリーは祐志を捕まえ、キャレは洗脳をかけた。

祐志は人質兼強力な人材となってしまうた。

ここまでできてしまえば従うしかなかった。

「ということだ。彰以外を無力世界に送り返すことも考えたけど、さすがに魔力メイがなくなる。そうなればアリユリーと彰の融合で結局意味がなくなるし、彰を他所に逃がしても結局同じだ」

フーッと息をついた詩音は扉へと向かった。

「じゃあ、帰るわ」

「詩音！！」

梓は帰ろうと扉に手をかけた詩音を呼び止めた。
詩音は手をかけたまま振り返る。

「一緒にいけないの？」

じつと梓は詩音を見つめる。

詩音は皆を守ろうとしている事がよく分かった。

だったら、嫌なところではなく皆と一緒にいればいいんじゃないか。辛い気持ちもいつでも好きなときにいえるここにいれば。

「話を聞いてたのか梓？祐志の命はもう握られてるんだ。アリユリは正直、自分以上だ。裏切り行為をすれば祐志だけじゃなくて自分も危なくなるんだ。そんな馬鹿馬鹿しいことするか」

詩音は扉を開けた。

扉を半分ほど開けた詩音は扉を開ける手を止めた。

「帰る前にやらなきゃいけない事があったでしょう、メレ」

扉の奥にはキャレが立っていた。

無表情で立っていたキャレを見て鳥肌が立った詩音だが、すぐに唇の端をあげて笑った。

「ここを出てくるとはな。作戦妨害でもする気か？」

「失礼、貴女が心配だったので」

「まあいい・・・ビューク！悪いが正界は徹底的に壊滅^{レジスタンス}させてもらう」

その言葉が合図かのように爆発音と警報音が耳を劈くかのように鳴り響いた。

ダズの幹部と正界のボス

爆発音、サイレン、雄叫び、悲鳴・・・

たくさん音、声が、耳に一斉に届く。

その中でよく響いた音が高笑い。

扉の奥にいた男、時亜キヤレの笑い声だった。

「ハハハハハ！さあ、共に行こう！高みへと！！」

狂ったように笑う時亜に詩音は呆れたように背中を見せて室内に戻る。

時亜は詩音の肩を抱くかのように腕を回した。

詩音は嫌そうに顔をしかめるが腕を払うことはなく、時亜を受け入れた。

彰の心の中に靄しおんが生まれた。

なんだか、気に入らない。

気安く幼馴染しおんに触るな。

何でそんな風にお前しおんも時亜を受け入れるんだ？

わざと足音を立てて2人に近寄ると、詩音はいつそう顔をしかめた。

その事がより一層彰の靄しおんを大きくした。

俺がそんなに嫌いなのか。

まだ時亜の方がいいのか。

そう思うと「嫉妬」という靄しおんがどんどん膨れ上がっていた。

「はあ・・・一応正界レジスタンスビュークのボスの抹殺を頼まれてるんだろ、キヤレ」

「ええ、まあ。でも、簡単に勝てますよ。未来の夫の力ぐらい、貴女なら知っているでしょう？」

海人にはプチッと何かが切れる音が重なって聞こえた気がした。

詩音の唇の端がヒクヒクと動いている。

「キースがいるから注意しろと言っているだけだ」

「おや、心配してくれているのですか？」

ブチィッ

海人だけではなく、梓も、俊也も、セアンも、セルビアも、ビュークも、キースも、確かに聞こえた。

詩音が、彰が、伊槻が、我慢できなくなっけキレた。

「誰がてめえの心配すると思ってる・・・さっさと終わらせろっただけだ」

「さっきから馴れ馴れしいぞ、てめえ！穢れた手で大事な幼馴染に触ってんじゃねえ！！」

「もう我慢の限界だあ！何が未来の夫だあ！！詩音が恋愛や結婚に興味ねえの位知ってるだろ！！」

怒鳴り声に耳を塞ぎながら部外者たちはその場から離れ、扉へと向かう。

3人が時亜に怒鳴り終わると一瞬で修羅場と化した。

「早くどけ！ 上級魔法・鎌鼬嵐」

「ム力つくんだよ！！ 銃弾強化・死弾」

「危ないですね・・・ 印・無力」

彰が鎌鼬の嵐を呼び、伊槻が両手に漆黒の銃を作り出して、銃弾の威力を最大まで強くした。

2人は同時に時亜へとぶつけるが、その前に時亜は2人を無力化させた。

「お前がな。 印・聖域」

詩音がつま先でとんとんと床を叩くと、白銀の光が現れた。
光は時亜を吹き飛ばし、詩音はそのまま扉へと向かった。

時亜は尻餅をついてしばし茫然としていたが、静かに妖しく笑うと立ち上がった。

「いいんですか？ここに來た軍隊だけでも危険ですが、そこにメレの指揮が入ってしまえばここは30分もしないうちに壊滅しますよ」
「いいわけないのら〜」

「でも、ボスが殺されるほうが困りますわ」

時亜の発言にセアンが剣を抜き、セルビアが手に淡い青の光を集めて杖を作り出した。

「キース！ゼノたちを連れてダズの軍隊をどうにかしなさい！」

「フフフウ、身体が疼くねえ！！皆あ、キャレはセアンたちに任せて行くよお！！」

キースが扉からものすごいスピードで出て行くと、海人がついていく。

伊槻は俊也の腕を掴み、キース以上のスピードでキースたちを追いかけた。

彰は無言を言わず梓を抱き上げると飛ぶように扉をくぐった。

その様子を見ていた時亜はクツクツと妖しく笑うと、目の前にいる3人を見た。

才能のある証拠である青髪の正族ジャティが睨み殺されるのではないかとい

う位時亜を睨んでいるが、時亜はその鋭いにらみを飄々オウルと流して、

隣で古そうな杖を持った幼げな王族レジスタンスと美人な正界のボスを見た。

2人とも、いい魔力メイを持っているなと思った。

それでも時亜の勝利は動かないと見た。

だからこそ思う疑問が一つ。

なぜ、さつきキースと呼んでいた戦族^{ソル}と一緒に戦わせなかったのか。今最初に出て行った戦族^{ソル}と正界^{レジスタンス}のボスが組めば時亜が勝つことができなかつただろう。

馬鹿なのか、それとも何かあるのか。

後者だと予想して時亜は3人が視界に入るように動く。

3人も人数が多いところを勝利の希望と考え、誰か一人でも時亜の視界に入らないように無言で3人が調整をかけ合う。

しばらく、無言の時間が流れる。

時亜が3人の動きが絶対に見えるのは部屋の角だが、それでは咄嗟の時に回避ができない。

やはり地道に位置を変えるしかないのか。

ふと視線を3人から部屋へと移したその隙を、セアンは待っていた。生暖かい息が時亜の頬に当たり、時亜の目の前には剣とセアンの顔が迫っていた。

剣はもう一つの剣、時亜の剣で受け止められていた。

魔族^{ジック}である時亜だが、剣がまったくできないわけではない。

瞬時に作り出した剣をとつさに顔の前でやや斜めに構えた。

嗜み程度の為に不慣れな剣だったが、なんとかセアンの剣を受け止めた。

セアンが移動のために吸っていた空気が衝突と共に吐き出されて時亜の頬が生暖かい息を感じたのだ。

だが、力も技術も差は歴然。

すぐに時亜は剣を手から離して距離をとる。

ガランと金属が床に落ちる鈍い音と同時に時亜は腕の痺れを感じる。セアンも、剣を通じてきた手ごたえに驚く。

予想以上だ。

見切りは完璧だ。

気を抜けば一瞬でやられてしまう。

長期戦は難しい。

後ろの2人がどうなのかわからない。

ビュークやセルビアはいつ動く？

疑問や不安が徐々に溜まっていく。

セアンはぎゅっと剣の柄を強く握り締める。

時亜は両手に術を展開し始めた。

ビュークやセルビアも、術の展開の準備をはじめた。

そして、動いた。

眩い光が部屋を包み、光が消えたときには部屋の中に動くものはなかった。

ダズの幹部と正界のボス（後書き）

戦族の本性

扉を出てひたすら真っ直ぐ廊下を突き進む。

足を1歩進めるごとに音や声が大きくなっていく。

ただ真っ直ぐな廊下に分岐点が出てくる。

音や声のするほうへと曲がり、そしてまた突き進む。

やがて広い広い部屋へと出た。

入り口付近の大講堂だ。

彰達と同じ白ベースの戦闘衣に身を包んだ人たちと、黒い戦闘衣や銀に光る甲冑を着た人や暗い色のローブを着た人が戦っていた。

甲冑の人たちが剣や術を恐れずにぐいぐいと突き進んで正界の前衛レジスタンスの人たちを部屋の間へ隅へと追いやっていく。

その後ろを戦闘衣の人たち——末端兵がローブの軍——術

部隊を守るように並びながら足を進めていた。

術部隊は守られながらバシバシと術を使って正界の兵の数を減らし
レジスタンス
ていく。

甲冑の軍の隙間をなんとかくぐり抜けた兵もいるが、術隊に向かつて剣を振り上げることもできずに末端兵の集中攻撃にあつて生命の火を消されていた。

防戦を強いられていた正界は不利な状況だった。
レジスタンス

剣が甲冑や剣を叩く金属音、歩く靴音、術の発動音、術によって発生する風の音や、炎の燃え上がる音。それに混じって痛みによる絶叫、死に逝く仲間の名を必死に呼ぶ声も響く。

そんな中、突然耳を貫くかのような鋭い音がした。
キースがいつも背中に背負っていた大剣で甲冑の軍を斬った音だった。

おびただしい量の血に濡れた何十もの甲冑の兵は胸から腹の辺りで真っ二つに斬られていた。

味方のいない軍の中心部へと跳躍。

跳躍しながら剣をぎりぎりまで身体に引き寄せる。

そのまま兵と兵の間へと狙いを定めて、着地。

そして、力の限りなぎ払う。

もともとの戦族ソルの力の上にのせた強力な身体強化で振られた剣は、強大な力を持った斬撃をつくりだして刃の届かない離れたところにいた兵までもを斬った。

キースを中心に半径5mは死の空間が出来上がった。

その中心に立ったキースの顔は返り血を大量に浴び、狂喜の笑みで歪んでいた。

戦闘狂という異常な性格をもったキースの真の姿が現れた。

血のような真っ赤な髪に真っ赤な目。

赤い目が己についた赤い液体に気付く。

「ハハ・・・アハハッ・・・アハハハハハハ！」

キースにはもう、感情を抑えることができなくなった。

痛みと苦しみの証が自分の肌につく感触に死を感じ、

てき相手の警戒の構えに自分の危険を感じ、

みかた周りが果然としながらおくる視線を感じ、

そして確かにあった手ごたえから自分の罪を感じ取る。

だが、後から後から湧いてくるのは興奮だった。

平和な普段の生活では感じない興奮に身体は震え、そして、口は自然と笑みの形をとる。

いつも主導権を握っている脳は心に支配され、心は閉ざしていた危険な感情の扉を開いた。

「さあ！！俺が満足のいく殺し合ゲームいをしようじゃないか！！」

普段の口調を忘れ、普段の気持ちを忘れ、敵も味方も忘れ、キースは近づいた1体の兵に斬りかかる。

絶命したことに気付けばその呆気なさにつまらないと呟いてまた別に、そちらも絶命すればまた次と、キースは血に飢えた獣へと化してダズも正界も関係なしに襲い掛かった。

「やめる！！」

海人はキースを止めようと走り出す。

「死ぬ気か、馬鹿野郎！」

「落ちていくください！！」

彰と俊也がすかさず止める。

だが、正義の塊である海人はそう簡単に止まろうとしない。

仕方なく彰が海人の腕を掴み、俊也が海人の前に回って押し倒す。

2人がかりで押さえつけたすぐわきを伊槻が走り出す。

「戦族は戦族に任せろ！！」

走りながら右手に剣を作り出して構える。

キースは伊槻に気付くと迷わず伊槻に剣を突き出した。

ギリギリのところで伊槻が避け、伊槻もキースの顔の横を狙って剣を突き出す。

キースは真っ直ぐと伊槻の顔を見据え、避ける。

伊槻の剣は避けきれなかったキースの頬を僅かに斬った。

血が頬を伝う。

伊槻はその紅を見て、何かが動いたのを感じた。

剣を持つ右手が自然とキースを斬るために動く。

キースは嬉しそうに笑って剣を引き寄せて伊槻の剣を受け止める。

伊槻はすぐに我に返って後ろへと飛んで距離をとる。

キースは剣を振り上げながら高速で距離を詰める。

伊槻は剣を両手で持つて衝撃に備え、正面から剣を受ける。
両手に残る痺れに舌を巻きながらも伊槻はキースの剣を弾いた。
弾く際に切先がキースの腕に触れ、鮮血がキースの腕の動きによつて散った。

ドクンツ・・・

鮮血が伊槻の視界の中心に入ったとき、伊槻の理性は失われた。
キースとは正反対の感情で、キースと同じ戦族の暴走状態、狂戦士へと変わった。

キース同様に黒髪を赤に変えて。

何も言わず、無駄な動きもなくキースを峰で吹っ飛ばし、その後を追う。

眼に何の感情ものせず、無機質的な顔で伊槻はキースを狙って剣を振り下ろそうと腕を上げる。

「あー、死なれちゃ困るしなあ・・・」

2人の戦いを呆然と無言で見ていた両軍だったが、誰かの呟きが部屋に響いた。

呟きの余韻が消える頃、2人は同時に倒れた。

何が起きたのか、一人を除く全ての者が理解できなかった。

「ここからが本当の殺し合い・・・何人生きてられるかな？」

突然、彰達の目の前に詩音が現れた。

冷酷な眼で、残虐的な笑みを浮かべて・・・

大事な人

詩音はそう言いながら静かに彰達に近づいていく。

「彰……一緒に来てもらうよ？一番死なれちゃ困る人だし」

彰は無言で詩音を見つめる。

詩音は魔力世界でいつもの服装である黒いスカートに眼帯。

髪型も同じだったのだが、何かが違うと思った。

梓にはとてもかなわないが整った顔をしている。

目の前の詩音もそうだ。

だが、詩音じゃない。

いち早く俊也が気付いた。

「詩音じゃありませんね。貴女の名はアリユリー。そうですね？」

アリユリー、詩音と同じ父から生まれた特殊生命体。

それが目の前にいる。

「……詩音アルセイディが話したようね。ということは目的も知ってる？」

アリユリーは驚いた顔をしたものの、すぐに引っ込めると微笑した。
嘲笑うかのような笑みで彰と俊也を見下す。

俊也はゆっくりと海人の上から退き、そしてアリユリーを睨む。

「俺を使つて更なる強い特殊生命体を作る《アルスロッティ》。だつたな」

「正解。詩音アルセイディはやらないと言っていた。なら！このアリユリーが！
お父様のために貴方を使つて願いを叶えてあげるのよ！報酬として

私にはキャレという夫を迎えられるのよ!!」

アリユリーは手を上に上げて、うつとりとした顔で自分の手を見つめた。

「切実に成功を願っているお父様のためにも、私を愛してくれると誓ってくれたキャレのためにも、何より私のためにも・・・貴方が欲しい」

上げた手を下ろし、目をよりいつそう細めたアリユリーはさらに彰へと近づく。

近づくアリユリーの足が1歩進むと彰は大きく1歩後ずさった。海人と俊也が彰とアリユリーの間に立つ。

部屋にいる人々はそちらへと釘付けになった。
レジスタンス

正界の人々は自分たちが止めようとしていたことが起きてしまうのかと、ダズの人々は最終目的が達成できるのかと、身動き一つせずに固唾を飲んで見守る。

アリユリーは自分のものとなる彰を、彰達はアリユリーをじっと見る。

動くことのない静寂な時は、梓によって破られた。

梓は視界の端に捉えた純白の服と漆黒の服に身を包んだある人影を確認すると、伊槻の元へと足音を大きく立てながら駆け寄る。

アリユリーの視界が梓の方へとずれる。

その隙に梓が捉えた人影の一つが音もなくアリユリーへと動く。

「!!」

「っ!」

「上級移動魔術・人体消滅」

彰がその存在に気付き目を見開くと、アリユリーが僅かに遅れて気

付いた。

だが、時既に遅くアリユリーは人影の使った術によって消えてしまった。

「悪いけど、今日は帰ってもらうわ。キースの暴走止めてくれたのは感謝してるわ」

ビュークが美しい純白の戦闘衣に身を包み、先ほどまでアリユリーのいたところに立って静かにそう言った。

「合成魔術・地獄炎雷」

アリユリーが消えたことで呆然としていた一同に悲鳴の嵐が鳴り響く。

部屋の中央に地獄の光景が現れた。
雷雲と炎が突然現れ、次々とダズの兵たちを炎が包み、雷が身体を貫いていく。

部屋から脱出しようと試みたダズの人々は扉の前に立った漆黒のドレスにさらさらとした長い黒髪の仮面の女――梓の捉えたもう一つの人影に一人残らず持っていた銃で撃たれ、絶命した。
そして、5分経たぬ内にダズの兵はいなくなってしまった。

「サンキュー、梓。よく自分だって分かったな」

漆黒の女は銃をしまい、仮面をはずしながら梓の隣へと立つ。
漆黒の女は髪を下ろした詩音だった。

「親友だもん。私の一番大事なね！」

梓がにっこりと笑うと、詩音はふっと優しく笑った。

昔と変わりのない、友達を思う普通の女の子としての笑みを見せた。

「うう・・・」

「・・・うつ・・・」

伊槻とキースがほぼ同時に意識を取り戻した。

「大丈夫？」

ビュークがキースへと駆け寄り、キースの顔を覗き込む。

綺麗な顔が覚醒したてのキースの視界いっぱいには広がる。

これにはキースも堪らず赤面してしまう。

大丈夫というが、ビュークは調子が悪いの？熱でもあるの？と一向に離れようとしなない。

「伊槻も大丈夫？ったく、キースに殺されるって焦ったよ」

キースとビュークのやり取りを見ていた詩音が伊槻を見るのと同時に、伊槻もようやく覚醒しきって一番近くにいた詩音を見上げた。

伊槻はいつもと違う詩音に目を見開き、慌てて視線を逸らす。

その頬には朱が大量に散っていた。

「ごめんなさい・・・」

最初は詩音の言ったことに謝ったのかと思ったのだが、頬が赤くなることはないだろう。

なぜだと詩音は考えながら、自分と伊槻を見た。

詩音は今、ドレスを着ている。

それは、ダズの兵が万が一逃げたときに自分だと分らないようにわざと自分でフリフリでふわふわの服

絶対に着たく

ないと詩音が嫌うような服を術で実体化させて着た。

だが、あまりにスカートの丈が長いと動きづらと思った詩音はスカートを膝の少し上までにしたのだ。

その長さでは倒れていた伊槻は詩音のスカートの中が色までばっちりと見えてしまうのである。

「……やっぱ一回死ね」

「見たくて見たんじゃないんだ！本当にごめんなさい！！」

伊槻がゴロゴロと転がって詩音から離れる。

そしてすぐに土下座して許しを請うが、詩音ははずした仮面を伊槻の頭めがけて投げた。

それも、身体強化をしてだ。

[illegible]

「うるさい、伊槻」

「鼓膜が破れます」

海人と俊也が倒れたままの伊槻に蹴りを入れる。

身体強化は使わなかったが海人は腹を蹴り、俊也は急所を蹴った為か、伊槻はしばらく動けなくなった。

「伊槻は屍となりました」

「勝手に殺すなあ！！！！！！！！」

チャンチャン♪と彰が手を広げておしまいを締めくくった。

もちろん伊槻がツツコミを入れる。

しかし、**超大音量。**

「うるさいって言うてますよね？」

「うるせえつつつてんだろ！」

「うるさいよお」

「静かに」

「スイマセン……」

俊也や海人だけでなく、キースやビュークにまで怒られる。
そして、とどめの一言。

「今すぐ死^{だまつて}んでもらおうか……」

「詩……詩音、さすがに駄目だよ」

さすがにこの一言は梓が制止に入った。

詩音の目が微妙に殺気を帯びたからか、伊槻は自分で口を押さえた。
喋りませんと目で訴えかけようと詩音の目を見るが、フィと詩音は
伊槻を視界に入れないように目を逸らした。
ただ、その横顔は楽しそうだった。

「やっぱ、皆でいるほうがいいな」

「そうだね、早く祐志も仲間に入るといいね」

「7人揃って俺たちだし」

「いや、彰はどうでもいい」

「ひでえ!!」

「そうですね、喧嘩の頻度がガクツと落ちるでしょう」

「じゃあ詩音でいいだろ！詩音は伊槻とだって喧嘩になるじゃねえ
か」

「私は詩音がいなきや嫌なんだもん。そしたら詩音は絶対必要よ！」

「ということだ彰」

「……海人まで」

「ご愁傷様……同情するよ」

「伊槻に同情されたくねえ」

自分たちの世界に入って行った6人をビュークとキースが優しく見守る。

自分達の未来を切り開く彼等。

詩音がこちら側についたことで5人の緊張感が解れたように、ビュークにもキースにも大きな利点をもたらすだろう。

「ねえ、ビュークウ。フィーって変わったよねえ」

「そうね・・・」

2人の知っている詩音は守らなくてはならない人達を守りながら自分を隠し続けていた。

そんな日々が続き、精神的な疲労が酷かった。

だが、今は違う。

多少投やりだったが、ちゃんと隠してたことを吐き出した。

そして皆が理解してくれたことにホッとした詩音は自分がどうするかをしっかりと考え直し、そして今、ダズを裏切って正界へ移動した。
レジスタンス

「憑き物が落ちたって言うのかなあ。なんか明るくなった気がするよあ」

「彼等と一緒にいるからじゃないのかしら。だって無力世界でのフイーは今みたいに笑っていたもの」
かれらのせかい

ビュークが優しく見つめるその顔をキースもまた見つめていた。

「ビュークウ・・・ダズを壊滅させた後も一緒にいてよあ？相棒とかじゃなくて、・・・と・・・みたいなお互いが想い合うような関係がいいんだあ」

ポツポツと恥ずかしそうに話すキースは見た。
ビュークの頬が赤く染まり、その口がYESと動いたのを。

容姿の変化

詩音が正界に居ついて1週間。

敵としていたのはたった2〜3日だったのに、とても早く時間は過ぎていくようである。

その間に全員の能力の覚醒が完了していた。

彰は茶髪の髪の色がだんだんと変化していき、金に美しく光るようになっていった。

瞳の色も髪と同じ、美しい金へと変化した。

真の王とバレやすくなった為に彰はビュークの助言で元の茶色より明るめの色に染め、茶色のカラーコンタクトをつけた。

海人は既に覚醒が終わっている。

伊槻も覚醒が終わっていたが、髪の色がまた黒に戻っていた。

キースによれば血に似た髪の色での興奮を抑えるための身体の機能ということらしい。

そのために瞳の紅はずっと変わらず、今もお紅のままである。

俊也は毒々しい紫の髪と、美しい紫水晶の瞳をもつようになった。

俊也はかなり気に入らないようで彰と一緒に元の髪色に似た黒に染め、黒のカラーコンタクトをつけた為に以前と変わらぬ姿にはなっているのだが。

梓は綺麗な青みの強い緑の髪と瞳を持つようになった。

詩音は幼少時に覚醒が終わっている上、元から髪色の黒に黒の瞳の色で変化はない。

「うーん・・・正直まだ違和感たっぷりだよ」

覚醒による変化を嫌って元と同じような色に染めた彰と俊也や元と変わらない詩音はいい。

ほんの少しの変化だから簡単に慣れてしまう。

だが、海人は随分と感じが変わったし、梓の髪は長くてかなりよく目立つ。

全然違う人に見えてしまうのだ。

「この一週間で一番変わったのはアズちゃんですが、ここに来てからは一番伊槻がおっかなくなりましたね」

「しょうがねえだろ・・・彰や俊みたいにカラコンはつけたくないし」

「あゝ、確かに伊槻は手入れとかしなさそうだな」

「俺だつて真面目なときはあるし、結構綺麗好きなんだぞ」

「嘘つけ、伊槻は絶対気にしない」

「・・・殴っていいか？」

「ごめんなさい・・・だから睨むな！それが怖い！！」

紅い目は結構威圧感を与えられるらしい。

そして睨めば相当な威圧感を与えられるらしい。

現に今、彰が縮こまっている。

最強と呼ばれる王の情けなさ過ぎる様子に詩音とビュークが揃って笑いを堪えていた。

「フィーだったらぴったりじゃない？」

「・・・そうか？」

「似合うだろうけど俺等・・・特に俺の命が危ねえ」

「彰なんか寿命どの位縮むんだろうね」

「5年くらいは縮んじやうんじやないのあ？」

「一応特殊生命体アルティロッドの特性で生まれるときに戦族ソルの天性を授かったから赤眼にはできるけど？」

「怖い理由がわかった気がする」

海人がぼつりと独り言のように言った。

悪気はない海人の呟きだった為に、詩音は少し真面目に訊ねた。

「・・・そんなに怖いかな？」

「うん。喧嘩してるのとか見てると正直怖いもん」

即答。

しかも梓にされれば詩音も傷つく。

そつぽを向いて、「あっそう」といじけてしまった。

あの詩音をいじけさせるなんて梓が7人の中で最強なのかもしれない。

「ボス！緊急事態です！」

「スカルアース地獄世界との絶縁空間がダズに破られ、ヘルト・ドラゴン獄竜が現れました！」

いきなり部屋に飛び込むように入ってきた男2人の報告にビュークはわかったと答えるとキースに目配せをする。

キースはいつも以上の笑みを浮かべて部屋の隅においてあった大剣をとる。

「皆あ、行くよお！！」

訳が分からない彰達も行くことは決定されていたみたいだった。

戦闘開始

目の前の地獄絵図に8人は呆然としていた。

建物は燃え、人は肉片となつてあちこちに散らばっている。

黒い煙が目を傷め、血と人肉が燃えているらしい匂いが鼻をつく。

吐き気を覚えながらも空を見上げれば、黒い竜が2体、灰色の竜が1体。

自分等が作り出した地獄の上を悠然と駆けている。

「酷い・・・」

誰からかそんな呟きがもれる。

1時間もしないうちに平和な都市が死の都市へと変わってしまった。
最悪な状態だった。

数十分前

ビュークはすぐに司令塔に入って慌しく指揮を執り始めた。

たくさん飛び交う情報や指揮の内容から詩音と俊也が自体を確認。

詩音は獄竜が現れて、戦えるかもしれないとしかわかっていないキースに説明、準備を始めた。

俊也は彰達に話す。

「獄竜が人を喰らっているそうです」

「非現実世界は絶縁空間と呼ばれる見えない空間によって隔てられている。」

ヴォルメス

ただ、この空間は神が長い間維持できるようにと強度は紙からしてみればかなり低く、非常に脆くなっている。

そのために、絶大な量の魔力^{メイ}を当てれば穴を開けられてしまう。

それを利用して詩音が魔力世界から無力世界^{ヴェール}に行ったり、彰達が無^ヴ力世界から魔力世界にきたりすることができる。

マーモが言っていた「魔力がないから帰せない」というのもこのことであつた。

ダズが超巨大な穴を開け、そしてそこから獄竜^{ヘルト・ドラゴン}という恐ろしい魔物が現れたのだ。

魔の神の魔力を大量に受けて進化した地獄世界最強の魔物、獄竜^{ヘルト・ドラゴン}が3体。
その3体が近くにある都市を襲撃中、既に死者が都市の人口の半分はいつているだろう。

今、セアンとセルビアが絶縁空間の修復を実行中。
^{レジスタンス}

正界の精鋭部隊が退治を試みたが、あえなく全滅。
全員が喰われてしまった。

「私たちが出る！準備を持ってきて！」

ビュークとキースの手に戦闘衣が渡される。

普段着ている服の上からそれに着替えると、さらに液体の入った瓶をも渡された。

キースが受け取ってポケットにしまいこむ。

「ゼノリー様たちも行かれるのですか？」

「行かつて話みたいだし。行くっきゃないだろ」

下っ端らしき人がおずおずと彰に話しかけ、彰の返事がくると同時に彰達にも戦闘衣が渡される。

「メレさんも」

「イーフィ。メレはダズでのコードネームだ。それに・・・邪魔なだけだ」

詩音は戦闘衣を突き返すとその場でくるっと回った。

普段着のような服が一瞬光り、次の瞬間にはあの短いスカートに肩だしのシャツになっていた。

右目の眼帯はいつものようについたままだ。

「私と俊也と海人で1体。^{ラフィール エース}キースと伊槻と梓で1体。^{ラディ ミュース}詩音と彰で1体。^{ファイ ゼノ}必ず退治するわよ」

「OK！」

そうして8人は飛び出した。

8人が都市についた頃には人の姿が確認できないほど壊され、喰い尽くされてしまった。^{ヘルト・ドラゴン}

8人の使命は、獄竜をこの場で全て退治することだった。他所の都市でこの地獄絵図を展開させてはならない。

キースはポケットに入れていた瓶を天高く投げた。

詩音が瓶が落下を始めてすぐ銃で撃ち、中の液体を辺り一面へ振りまく。

中の強力な動物の油の匂いに獄竜が集まり、^{ヘルト・ドラゴン}そして8人に気付いた。

「私たちは灰色のを、キースたちは黒の大きい方を、フィーたちは残る黒の小さいのを！」

「『了解！』」「『了解！』」

8人が一斉に散った。
戦闘開始だ。

ビュークが灰色の獄竜に、梓が大きな黒い獄竜を、詩音が小さな黒い獄竜を魔術で攻撃。

竜を挑発した。

怒って突っ込んでくる獄竜から逃げるように、ビュークを海人が抱えて地獄と化した都市へと走る。

梓も伊槻に抱えられる。

大きく海人とは逆方向へと跳躍して獄竜から逃げると、狙い通りに大きな獄竜は追ってきた。

詩音はその場から離れずに獄竜を睨む。

狙い通り、獄竜は3体ともばらけた。

後は各個撃破するだけだ。

「デカイな・・・」

「地獄世界の竜ってこんなに大きいのか？」

「腕が鳴るねえ」

20mはゆうに越える巨大な竜に追われながらも、伊槻とキースは笑う。

己の血が過剰に反応している、戦族特有の感情。

それに挟まれている梓はいたって冷静に上空の獄竜を眺めていた。

梓の髪が輝き始める。

梓の天才の能力が封じられた扉が開き始めた。

「この辺で行くぜ！」

「連携ぐらいできるよねえ？」

「掩护します」

梓をおろした次の瞬間、2人の戦闘狂が獄竜ヘルト・ドラゴンとの戦いへと身を投げた。

「正直私は近距離戦は苦手なのよ」

「じゃあ前線は俺だけだな」

「海人、無理だけはしないでください」

都市の中にある大量の廃墟の一つに身を潜めた3人は作戦の確認をする。

スカルアース ヘルト・ドラゴン
地獄世界で獄竜と戦うときは普通近距離からだ。

だが、このメンバーでは近距離戦は無理がある。

海人の負担を俊也とビュークでサポートして倒す、もしくは他の獄竜ヘルト・ドラゴンを倒した別のグループの掩護が来るまで持ち堪えるか。

「ちょっときつかったかしら・・・」

「さて、やりましょう」

「行ってくる！」

廃墟から獄竜ヘルト・ドラゴンがよく見える位置へと海人は飛び出した。

「基本魔術・雷」

「基本魔術・炎」

詩音は目前に迫った獄竜めがけて術を放つ。ヘルト・ドラゴン

基本の術だが、詩音に流れる万族オウルの血が持つ魔力メイは特上。かなりの威力で獄竜にヒットする。ヘルト・ドラゴン

彰も獄竜^{ヘルト・ドラゴン}に炎の塊を投げつける。

だが、魔力^{メイ}の使いすぎによる暴走を防ぐためにあまり魔力^{メイ}が使えなかった。

炎でのダメージはあまり期待できない。

「・・・足引っ張るなよ」

「うるさい！」

早くも喧嘩一歩手前となってしまうた2人であった。

消えた少女と青年

セアンとセルビアは絶縁空間に開いた穴の修復に取り掛かっていた。穴を放置してさらに数を増やすわけには行かない。

絶縁空間は自然修復機能がついているが、この穴では2〜3日かかるだろう。

これが竜神世界や天空世界なら向こうからの修復も来るから楽なのだが、今回は危険な地獄世界。ドルチエリ ヴォルメン スカルアース

人を主食とする魔獣や獄竜がいる上に、最近では魔の神の復活まで噂され、その影響からか魔獣や獄竜がより強力になっているという。力のあるものもそれらから身を守るためになかなか外にでない。となると、向こうの修復は期待できない。

一刻を争う事態になっているのだ。

「貴方たちも手伝わないと間に合いませんわ！」

セルビアが絶縁空間に魔力を送るために魔術を次々と打ち込みながら後ろにいた正界の兵に呼びかける。レジスタンス

その隣ではセアンが落ちつかない様子にして立っていた。

セアンには修復隊の中で一番重大な任務が課せられていた。

数分前、セアンとセルビア率いる修復隊はここに到着した。

何度かこのように修復で向かうことはあった。

だが、今回はものすごく大きかった。

普段の穴なら小型の魔獣が1体か2体だけで被害は少ないのだが、この大きさなら獄竜が出てくるのも頷けてしまう。デス・モンスター ヘルト・ドラゴン

そこに問題があった。

今出てきてしまった3体の他・・・更に出てきた場合それを退治、もしくは穴に押し戻すのを誰がやるのか

この隊で一番肉体的に優れるのはセアン。

魔力的に優れるのはセルビア。

退治するにせよ、押し戻すにせよ、セルビアではやや不安が残るのは皆同じだった。

2人で修復に集中して穴を塞ぐのを早めることにしては万一のときの魔力が切れるというのもありうる。

だが、迷っている時間はない。

「もし来たら押し戻すのらっ」駄目になったらセルビアがやって欲しいのらっ」

そういつてセルビアを修復に取りかからせた。

セアン1人ではおそらく退治できないだろう。

だが、押し戻すということは、出てきたものを引きずって一緒に絶縁空間に飛び込むことだ。

うまく行けばそのときに絶縁空間が異常を感知して閉じる。

ダズが穴を開けて獄竜を出したときには感知できなかったのは、稀に見ることだ。

出てきて即、セアンが出てきたものと一緒に飛び込めば高確率で閉じ、これ以上彰達に負担をかけさせずに済む。

だがそれは死に行くのと同じだった。

同じ絶縁空間の穴から別の世界に飛べば同じところへとたどり着く――彰たちが魔力世界デメイスに来たときほぼ一箇所に落ちたのと同じ事

――つまり、着地するときに引きずってきたものに潰されて圧死する。

運良く潰されずに着地してもその後には食われる。

もし運良く死なずに退治できてもセアンの魔力では絶縁空間を破る

ことはできないだろう。

セアンは地獄世界で過ごす羽目になる。スカルアース

詩音かビュークなら絶縁空間を破れるだろうが、スカルアース地獄世界は魔力世界デメイや無力世界同様に広い。

誰かが助けにきてくれて、セアンが同じ場所に留まっていたとしても、見つかる可能性はほぼ0だ。

スカルアース地獄世界の死亡率は高い。

近場に食物も水もどれだけ地獄世界にあるのかも予想不能。スカルアース

詩音の体験談によれば夜の野外では生きた心地がしないらしい。行きたくないし、死にたくない。

「でも、やるしかないのら」

持ち前の明るさで穴を見つめる。

出てくるとすれば魔獣デス・モンスターの確率が大きい。

ヘルト・ドラゴン獄竜の生態数は少ない。

だから、きつと大丈夫。

「セアン、もしもの時は私もいますわ」

隣にいるセルビアだってそう言ってくれる。

大丈夫だ。

自分の楽観視ではない。

セアンは一度息をつく。

「ありがと、なのら」

それが、修復隊の聞いたセアンの最後の言葉だった。

セアンの安心を裏切るかのようについに3体の獄竜ヘルト・ドラゴンよりも巨大な獄竜ヘルト・ドラゴンが穴から現れた。

セアンは一瞬で覚悟を決めると無言でその場から獄竜へと突進、穴へと自分諸共押し込んだ。

「セアンッ！！」

だが、セアンの覚悟も空しく獄竜は穴から出ようと鼻先を出す。
セルビアはセアン同様に覚悟を決めた。

「皆、ボスに今までありがとうございましたって、お願いしますわ・
・お兄様にもライバルはいるけど頑張つてと伝えておいて欲しい
ですわ。私はきつと絶縁空間に飲まれて消えますわ」

セルビアは修復隊に笑いかけた。
悲しそうな顔ではなかった。

「梓さん、詩音さん・・・ごめんなさい。お兄様を幸せにしてあげ
てください」

そういつてセルビアは穴へと走る。

「基本魔術・風」

術は強くもさわやかな風を作り、セルビアを穴へと後押しする。

「セアン、もし飲まれずに貴方のところに行けたら一緒にいましよ
う？助けが来ないならせめて、私が助けになりたいんですの」

幼き姿の少女は青髪の青年の後を追う様に穴へと消えた。
巨大な竜を引き連れて穴の奥へと入り込み、そして穴は何事もなか
ったかのように埋まっていく。

何の音も発さずに、静かに消え去った。

伊槻・梓・キースの戦い

梓を抱えていた伊槻を追っていた黒い大きな獄竜^{ヘルト・ドラゴン}が突然追っていた人間がこちらへとやってきたことに何の考えもなく顔を地面につけ、口を開いて待ち構えた。

伊槻は走りながら刀を左手に作り出す。

白銀の刃を持つ日本刀だ。

鞘に入れたまま走る。

獄竜^{ヘルト・ドラゴン}が開く口めがけて全力で走る。

数メートル前で真上に跳躍、鼻先へと飛ぶ。

獄竜^{ヘルト・ドラゴン}が反応する前にキースが眉間の辺りに斬撃ではなく打撃を与えた。

数秒もない空白時間が生まれる。

その数秒は大きな命取りとなる。

伊槻^{ヘルト・ドラゴン}が抜き打ちの型で獄竜の巨大な黄色い眼を潰しにかかる。

「補助魔術・精密標準

合成魔術・極寒突風」

伊槻が刀を抜こうと右手をかけた時、離れたところに立っていた梓が術を同時発動させた。

伊槻の目に梓の補助魔術^{ヘルト・ドラゴン}がかかり、透視状態となった伊槻の目は獄竜の目の神経の部分をはつきりと映し出す。

伊槻はそこに狙いを定めて刀を抜いた。

梓は伊槻の補助と同時に猛吹雪のような寒さの突風^{ヘルト・ドラゴン}を獄竜へと吹かせる。

術を発動したと同時に梓は今だ獄竜^{ヘルト・ドラゴン}の上にいる伊槻とキースもただではすまないのではと刹那の間に迷う。

だが、2人はきつと大丈夫。

獄竜の腹部を狙って跳躍しようと足を曲げたときに起きた異変にキ

ースは跳躍をやめ、獄竜から離れて目の前の変化を見つめる。

無防備になると思われる腹が変化し始めていた。

だんだんと背中と同じように黒く硬くなっていく。

その中でもいくつかの鱗が鋭く変化していく。

背中や尻尾の鱗も変化し始め、顔の周りは鋭い鱗に大量に変化していく。

伊槻も風から降りてその変化を見た。

梓も見た。

迂闊に近づいて攻撃したら、返り討ちに遭いかねない。

だが、状況は絶望的ななんか欠片もなっていない。

誰も怪我していないし、疲労もまだない。

まだ自由に動けるのだ。

変化が終わり、獄竜は空を飛んだ。

「キース！離れて！」

梓は即座に叫ぶと左手に白金の大きな弓を作り出す。

右手に矢を持ち、背にはたくさんの矢を入れた筒を背負っている。

弓と同時に作り出したその矢をしっかりと引く。

弓道はかじった程度の上には下手糞としか言いようがなかった。

的を狙っても力の無さでうまく飛ばなかったり、ずれたりするのが多かった。

だが、今は術の補助がある。

身体強化で引く力を増やして飛距離やスピードを上げることができ
るし、軌道修正も術ででき。

迷い無く弓を作り出していた。

獄竜の身体に標準を定め、身体強化をした自分の限界まで引き絞る。

手を離す。

術を使わずとも矢は真っ直ぐに獄竜へと向かった。

矢が身体に刺さる直前、

「発動！」

梓の叫びに反応して矢は無数に分かれた。

1本の矢が10以上の小さな矢に分かれ、広範囲に広がる。

矢が鱗にぶつかりと矢は爆発を起こした。

その間にも梓は動く獄竜の動きを予測して次の矢を放つ。
（ルト・ドラゴン）

叫ぶ。

分かれる。

爆発。

放つ。

叫ぶ。

分かれる。

爆発。

放つ。

叫ぶ、分かれる。

爆発、放つ。

叫ぶ、分かれる、爆発、放つ。

ビークと術の訓練でやった的当ての的より動きが遅い上に大きい。

狙いやすいためにだんだんとそのペースは上がり、竜の鱗を何枚も

何枚も剥がれ落ちる。

（ルト・ドラゴン）
獄竜が梓に向かって飛ぶが、梓は移動術で場所を移す。

見事なまでに梓は獄竜を翻弄させていた。
（ルト・ドラゴン）

「アズちゃん・・・すごいな」

身体強化をした伊槻の目に映るのは、詩音といつも一緒だった優しくてか弱い幼馴染ではなく、綺麗な長い髪を風になびかせて戦う一人の女戦士となっていた。

1ヶ月もしないうちに変わったこの姿に成長を感じながらも伊槻は
（ヘルト・ドラゴン） 獄竜へと走った。

梓が作り出した傷を狙う。

キースの考えも同じだった。

「ラデイこつちい！」

伊槻とキースは合流して空を飛んでいる獄竜を地上から見上げて梓
（ヘルト・ドラゴン） の作った傷の中から特に一番大きな傷を探す。

身体強化で視力を高め、集中して探す。

胸に当たる部分だろうか、伊槻の大きな手よりも大きな鱗がこつそ
りとなくなっているところがあった。

梓が標準として狙い続けていたところであり、爆心地に一番近いと
ころであった。

「中まで一気にダメージを浸透させて潰すよお」

キースが嬉しそうに笑って言った。

矢は今だ飛んでいる。

だが、キースも伊槻もそれを止めさせる気はない。

梓も止める気はない。

伊槻が刀を両刃の大剣に作り変えて、
（ヘルト・ドラゴン） 獄竜を見た。

伊槻・梓・キースの戦い 2

「行くよお」

キースは高揚感を押さえめに言った。

爆発と矢の嵐に飛び込む。

飛び込んで、都市を簡単に滅ぼせる獄竜ヘルト・ドラゴンの身体に自分の中で最高の技を繰り出すのだ。

高揚感を押さえきれずに笑ってしまう。

ビュークに昔言われたことを思い出す。

「高揚してるときのキースは敵以上に危険ね」

今まで何度か正界レジスタンスの兵と一緒に出たときがある。

この技を出そうとしたとき、味方の兵が恐ろしさのあまりひいてしまっていたことが何度もあった。

きっと伊槻もひいただろう。

隣を見れば伊槻の姿はない。

身の危険を感じてくれないと困る。

次の技は余波がすごいのだ。

そして、伊槻の力はいらない。

自分一人で倒す。

戦うとき、一番に血が騒ぐこの瞬間。

最強で最凶で最恐な技を繰り出すこの瞬間。

この瞬間こそが「キース」という戦闘狂の生きがい。

その瞬間に余波で味方が怪我をしたとか死んだとかで高揚感を台無しにしないで欲しい。

湧き出てくる高揚感を押さえてキースは剣を構えて身体強化を充分に使って跳んだ。

「秘技・破壊神の嘲笑」

キースは矢の爆発の嵐に飛び込み、技を放つ。

自身の魔力を一時的に全て使つての命懸けの大技。

生きるためにも使われる魔力で力を上げて剣で斬るだけのこと。

誰でもなせるその技は、キースの戦いや技に対する執着で強大な力を持つて相手を傷つける。

だが、それでも獄竜の息の根を止めるには足りない。

もう一発かましたい所だが、体中の魔力を使い切つたのだ。

反動で動けない。

技を放つたときの高揚感も消えている。
地に落ちる。

「後は任せる」

キースはいなくなったはずの伊槻に受け止められ、ゆっくりとおろされた。

伊槻はそのまま矢の爆発の嵐に飛び込み、獄竜の鱗の一つに掴まる。
そして、キースの作り出した傷の中に意を決して入り込んだ。

1mほどの隙間に入つて両刃の剣を中の壁に突き刺してぶら下がる。
赤黒い血がバケツをひっくり返したかのように頭から降つていて、
すぐに体中ベトベトになる。

血の雨は続いているために息もままならない。

それでも伊槻は回転運動で剣の上に登つて更に奥へと入り込み、大量の血が流れている場所を探す。

そして運良くあるものを見つけた。

巨大な動くもの、獄竜の心臓だった。

心臓の壁にはうっすらと血が滲んでいた。

キースの技はあと少しで心臓を破れていたのだろつ。

頭の上にあつた、技の余波で千切れかけて垂れ下がっている肉を掴んでぶら下がると突き刺した剣を足を器用に使って抜いてそれを片手で持つ。

心臓めがけて力の限り思い切り投げた。

ぶら下がっていた肉は太かったが、キースの技の余波で脆くなっているのか、大柄な伊槻の体重を支えきれずにぶちりと千切れた。

「刺されっ！！」

傷口から滑り出るように伊槻は出てきた。

同時に心臓に剣が刺さったのか、大量を越える血が降ってきた。

大きな大きな血溜まりとなった。

だが、伊槻とキースに危険はあつた。

命を絶たれた獄竜が力を失い、降ってきた。
（ヘルト・ドラゴン）

だが、伊槻にもキースにも避けるほどの力とスピードは無い。

「どうせなら戦って死にたかつたあ」

「最悪じゃん・・・」

2人はそのまま目を閉じた。

「キースっ！！！！伊槻っ！！！！」

梓が2人に向かって走りながら竜を吹き飛ばそうと必死に術を打ち込むが、効果はほぼ無い。

悲痛な叫びだけが辺りに響く。

海人・俊也・ビュークの戦い

目の前の廃墟と化した大きな建物の上空を悠然と泳ぐ灰色の竜に海人は思わず見とれてしまった。

子供の頃好きだった幻の存在が目の前にいる。

その幻の存在を見ていてふと、昔を思い出した。

村の娘を喰らう悪い竜を旅人が退治していく物語があった。

その物語の劇を7人でやっていた。

俊也は物語を読むナレーター。

梓は竜に喰われそうになった娘の役になり、彰はその父親で詩音は母親。

伊槻が祐志を肩車して竜の役を担い、海人は旅人の役をやった。

まだ小学生低学年ぐらいだったと思う。

その頃から海人は梓のことが好きでその役を一番に志願していた。勇者的な役だからともちろん彰も伊槻も志願したし、祐志もやりたいたと言っていた。

それでも海人は旅人の役をやることができ、そして娘を助あすなけるという気になって竜に挑みかかった。

既に幼馴染たちの中でも大柄だった伊槻に平均やや上ぐらいだった祐志が肩車されていて、海人には大きく見えていた。

それでもひるまずに飛び込めた。

あのときの安全という保証はない。

それでもやらねばならない。

「いくぞ・・・」

覚悟を決めて海人は剣を右手に作り出して構えた。
悠然と空を泳ぐ獄竜ヘル・デ・リリオンはまだ海人に気づいていない。

「上級魔術・鎌鼬嵐」

剣に鎌鼬を従わせて獄竜（ヘルト・ドラゴン）に向かって振る。

風は剣から離れて透明な刃となり、獄竜（ヘルト・ドラゴン）の身体に傷を刻もうと飛ぶ。だが、それは獄竜（ヘルト・ドラゴン）にいと簡単にかわされる。

しなやかに体を曲げて見えない刃をかわし、口から地獄の業火を吐き出す。

後ろへと跳躍してそれを避けると、前方から膨大な量の水が飛ばされて業火を瞬時に鎮火させた。

ビュークの基本魔術によって作り出された水である。

廃墟に火が燃え移れば酸素が失われて呼吸がままなくなってしまう利になりかねない。

海人はビルが倒壊した瓦礫の山に登り、手頃な鉄の塊を拾う。

獄竜（ヘルト・ドラゴン）めがけて投げると当たったかどうかを確認する前に山をすばやく下りた。

鉄の塊は獄竜（ヘルト・ドラゴン）の尻尾のほうへと落ちた。

ゴンと地面に落ちた音に獄竜（ヘルト・ドラゴン）の視線がそちらへと注がれる。

海人はその間に半壊した建物に隠れて向かいの瓦礫の隙間を見た。

小中学生がギリギリ入れそうな隙間から一瞬俊也の顔が見え、視線がぶつかる。

海人は地面を指差してから宙に円を描く。

そして人差指を立て、もう片方の手で獄竜（ヘルト・ドラゴン）をさして首をかしげた。

「了解です。 陣・発射」

一連の動作を見終わると狭い隙間の中で俊也は両手で円を作り、海人の足元に陣を作った。

地面を指差して円を描いたのは陣の事。

人差指を立てたのは空へ上へ。

獄竜（ヘルト・ドラゴン）を指差したのは獄竜の方へということ。

首をかしげたのはわかったか、できるかと尋ねるジェスチャー！。

俊也は海人の望み通り、海人の身体を飛ばした。

（ヘルト・ドラゴン）
海人を見失った獄竜の背に海人は剣を刺す。

思った以上に柔らかい。

予想外の柔らかさに呆気にとられたがすぐに剣を抜いて飛び降りる。

「補助魔法・柔翼」

ビュークの術で海人の背に大きな柔らかかそうな翼が生え、海人を包み込む。

翼は落下の衝撃から海人を守ると弾けた。

海人はすぐに立ち上がる。

（ヘルト・ドラゴン）
獄竜が近づいている。

「上級魔術・茨林」

俊也が瓦礫の隙間から這い出るとそこらじゅうに茨を生やす。
なるべく多く、高く、密集させて。

「こつちです！獄竜！！」
（ヘルト・ドラゴン）

集中して茨の林を瞬時に作り出した後、俊也はいきなり大声を出して注意を引くと走り出した。

戦族である伊槻やキースみたいな身体強化はできない。

もともと運動が得意な分野ではない俊也だが、逃げ切れる自信があった。

今作り出した茨の林で獄竜はスピードを出せない。

もともと距離があつたためにすぐに距離が縮むことはない。

そして、逃げ切れるというその自信は確かなものとなる。

「上級魔術・巨大毒草矢」

「身体特殊能力・雷電体」

ビークが精確に巨大な毒矢を地から発射して獄竜ヘルト・ドラゴンの動きを一時的に止め、海人が体内に雷ほどの電気を溜めて身体に剣を叩きつけた。毒矢によって動きが鈍った上に雷に匹敵する電流が体を流れ、竜の動きが止まる。

「協調魔術・共鳴音」

ビークが俊也にシンクロを魔力メイで呼びかける。

俊也の耳から入った魔力メイが瞬時に脳で言葉へと変わると、俊也はすぐにそれを確認した。

海人の耳にも僅かながら届く。

『短期集中で一気に倒す』

迷わずそれに従う為の準備が始まる。

俊也はその場で魔力メイを溜めながら海人に呼びかける。

「地面！落として！」

「了解！行く！」

短い会話を終えて海人は近くの茨に軽々と登っていく。

途中の棘が何度も身体を傷つけて赤い液体を落とすが気にせず、上を目指し、獄竜ヘルト・ドラゴンより上に行く。

「印・武器強化」

剣が黄金色に輝き、不思議な紋様が柄に浮かび上がる。限界まで武器強化をして飛び降りた。

「らああああああ！！」

剣と共に獄竜ヘルト・ドラゴンを地面に向かって突き飛ばす。

だが、僅かに威力が足りず、地に落ちることはなかった。

悔しそうな顔をしながらもすぐさま海人はその場から離れて茨の上へと避難した。

「神術・重力変化」

その僅かな部分を埋めるためにビュークが一瞬だけだが重力を強めて地に落ちるのと、その術によってビュークが崩れるように倒れたのは同時だった。

どすんと鈍い音が響くと俊也が術を発動させる。

「最上級魔術・超絶猛吹雪」

獄竜ヘルト・ドラゴンの周辺だけに凍えるほどの猛吹雪を吹かせる。

俊也の魔力メイが尽きるまでひたすら続く猛吹雪は獄竜ヘルト・ドラゴンを凍らせる。

本当ならばビュークの補助魔法がかかった海人の一撃で止めだったが、ビュークが倒れてしまったのだ。

最後の一発は、海人の力だけに頼られた。

海人は茨が何重にも重なっているところに立ち、巨大な剣を作り出して両手で逆手に持った。

そして、茨の上から狙いを定めて獄竜ヘルト・ドラゴンにむかって投げ落とす。

「基本魔術・風」

その一撃に全てを賭けた。

海人の決して多くはない魔力メイが作り出した風を纏い、剣は獄竜ヘルト・ドラゴンに向かって寸分の狂いなく落ちていく。

「
」

それを見届けようとしていた俊也の耳に、何かが聞こえた。
俊也は剣から目を離して音のほうへと走り出した。

「俊也!？」

海人が戸惑って呼ぶ声も無視して俊也は走っていった。
愛する人の叫びに反応して。

詩音・彰の戦い

詩音は先ほどから彰を無視して獄竜に狙撃銃を使って弾丸を撃ち込んでいる。^{〈ルト・ドラゴン〉}

獄竜の動くスピードは遅く、単調だった。

まれに詩音に向かってくるが詩音は流れるようにかわす。

その間にも詩音は狙撃銃で獄竜を狙い続ける。^{〈ルト・ドラゴン〉}

ライフルに似たその銃は銃身から奇妙な形をしたものが生えているかのようについており、その部分は詩音の肩を覆っていた。

狙撃銃を担ぐような形で持った詩音は肩を覆う一部分にあるスコープを覗き、確実に獄竜の身体に弾丸を撃ち込んでいる。^{〈ルト・ドラゴン〉}

頬のすぐ横にある引金にかかる指に力がかかる度に弾丸は空に放たれる。

詩音の魔力^{メイ}によって作られた銃は詩音の魔力^{メイ}で作られた弾丸^{〈ルト・ドラゴン〉}で獄竜の鱗を削ぐ。

彰は見とれた。

精密な狙撃を続ける詩音の姿に、顔は見えなくとも真剣なのが伝わる。

詩音は没頭した。

素早く動くこともない獄竜を狭いスコープを通した世界の中で獄竜^{〈ルト・ドラゴン〉}の身体を追っていた。

だからこそ、獄竜^{〈ルト・ドラゴン〉}の反撃に対処できなかった。

シャアアアアア

目で追える速さでしか動かなかった獄竜^{〈ルト・ドラゴン〉}が素早く動き出し、詩音の覗くスコープの世界から消え去る。

詩音が肉眼で探し出そうと狭いスコープの世界を放棄して視野を倍以上に広くする。

突然の事に驚いていた詩音の顔が苦痛に歪んだ。

彰はその変化を見れなかった。

見る前に詩音は赤い霧を吐き出して後方に吹っ飛んで建物の残骸へと衝突する。

詩音に神速を超えるスピードで突っ込んだ獄竜は詩音にぶつかるとすぐさま上空へと昇った。

「詩音！！」

彰が詩音に気をとられたその一瞬。

その一瞬で獄竜は彰の背へと突っ込み、同様に上昇。

突っ込まれた彰は詩音と同様に吹っ飛ばされ、詩音の隣で同様に赤い霧を吐いた。

顔面強打は免れたが、突っ込まれた背骨の辺りが痛む。

どっちにしろ、かなりキツイ。

隣の詩音の顔も苦痛で歪んでいる。

「詩音・・・大丈夫か？」

「はっ、何言つてんだよ・・・と言いたいところだけど無理だな。動けねえ」

虚勢も張れない詩音に彰は一つの決断をする。

「術・・・フルでやるから後で止めてくれ」

「ハア？制御できない癖に 移動魔術・瞬間移動」

詩音がそう呟きながら彰の腕を掴み、やや離れたところに彰と共に移動する。

壊れかけた壁に寄りかかって詩音は溜息をつく。

「生憎と回復はできないからな」

もう一度溜息をつく。

^{〈ルト・ドラゴン〉}獄竜がこちらに気付いた。

「移動魔術・瞬間移動」

詩音は即座に彰の腕を掴んで術を使い、廃墟の中へと移動した。
壁に寄りかかった状態の2人は壁の奥にいる獄竜^{〈ルト・ドラゴン〉}に気付かれないよう息を潜める。

「まあ、やるしかないか」

痛む身体に鞭打って詩音は彰へと身体ごと向く。

彰は遠慮がちに詩音に手を伸ばし、負担を減らそうとした。
やることは分かっている。

また、魔力^{メイ}を吸収する封印術をかけると。

あの時の事を思い出して彰は一瞬で顔が赤くなるのを感じた。
自分が好きなのは梓だが、詩音だって女だし、綺麗だし、正直悪くないと思う。

その心を否定できなかった。

そのことから目を逸らすかのように彰は口を開く。

「よく平気でいられるよな・・・」

目の前で痛みに歪む顔には照れや躊躇が見えない。

痛みのほうが大きいからかもしれないのだが、前にしたときもなかった。

確かに童顔な彰だが、そこまで幼くは見えない。
と思ってくれるのを願っている彰だ。

「言つとくけど、自分だって恥ずかしいんだからな。ポーカーフェイスがお前より得意な方なだけだ」

「そう」

「だれでも躊躇うだろ・・・彰なんか童顔でガキだけど」

その先の言葉は飲み込んだ。
自分のプライドが許さない。

「やるよ」

彰が詩音に手を差し出す。

詩音が彰の手を掴むと引つ張って詩音を引き寄せ、抱きしめる。
首に手をかけて口を寄せる。

首にかけられた詩音の手の鼓動が伝わる。

詩音の手からも、彰の鼓動が伝わる。

彰は目の前の女の目を見た。

想っている人よりも綺麗で、意志を持ってしっかりと前を見つめる目。

強い強い目をしていた。

その目が閉じられ、その顔が視界から消える。

同時に、首の痛みが痺れる様に脳へと伝わった。

「終わった？」

「・・・一応」

応答すると詩音は首から流れる血を舐めとった。

「ひゃあ！」

いきなりの事で彰は無意識に詩音を抱きしめる力を入れて変な声を発した。

その声は詩音の耳元だったために、一瞬詩音の顔が歪んだ。

「るせえ、耳元で」

「何してんだよ」

「動くの辛いから服で拭いようがねえし」

「自分で拭える」

「へーへー」

超至近距離——おそらく過去最高記録での喧嘩。

そのことに気付いた彰だったがもったいないと思い、嫌がらせも兼ねて気付かぬ振りをした。

だが、気付いたことによつて帰ってきた照れによる赤面と速まる心臓は押さえられなかった。

すぐ目の前にいて身体が触れ合っている状態では詩音はすぐそれに気付く。

そして、今の自分の状況に気付く。

「・・・いつまでこうしてる気だ」

詩音は溜息をついて言うが、離れようという動きはしない。

彰は珍しいと思いつつも抱きしめる手をゆっくりと背中を撫でるように動かす。

一瞬詩音の肩がビクリと跳ね、僅かに震えだした。

「彰・・・」

彰の血の気が一気に引いた。

腕全体にドス黒いオーラが巻きつくかのように渦巻いていた。

発生源は詩音だ。

動くのがつらいと言っている詩音が動く気配がないのも当たり前だった。

「他の獄竜ヘル・ドラゴンに合流されたりでもすれば・・・さっさと放せ、変態野郎」

「はい!!」

慌てて彰は詩音を解放して壁に寄りかからせる。

詩音にそんな甘くて美味しいシチュエーションを求めてはいけけないのだ。

絶対に身の危険しかない。

彰の戦い

彰は痛む身体に鞭打って廃墟の外に出る。

仲間のためにも、背にある廃墟の中にいる大切な詩音のためにもふと思った。

詩音の存在は、自分の中でかなり大きくなっている。

幼馴染以上の、大事な存在。

梓とはまた違う、大事な大事な存在。

その大事な存在を守るために、彰は危険な領域へと足を踏み込む。

「移動魔術・瞬間移動」

廃墟の中の獄竜（ルト・ドラゴン）の食料に気付かれぬように廃墟から移動。

広い空白地帯となっていた広場のど真ん中へと移動する。

くすんだ空を旋回し続けていた獄竜（ルト・ドラゴン）は即座に気付いた。

「秘術・超身体強化」

獄竜（ルト・ドラゴン）が気付き、突進するまでの一瞬にも満たない時間の中で彰は身体を限界を超え、本当に壊れる一歩手前、極限へと身体を強化していた。

「遅すぎる 秘術・細胞破壊」

神速の域に達していた獄竜（ルト・ドラゴン）のフルスピードの突進は彰の感覚ではかなり遅く見えていた。

避ける素振りも見せずに棒立ちしたまま獄竜（ルト・ドラゴン）に術を放った。

声と共に術は空気に乗って拡散する。

目に見えぬ粒子は細胞に触れると同時にその細胞を破壊していく。

彰は危険な粒子が自分に触れぬよう調整。

同時にこの広場より遠くへと飛ばぬように風を操り、獄竜へと粒子（ヘルト・ドラゴン）を集中的に飛ばす。

粒子はまず獄竜の鱗と表皮を徹底的に破壊した。

鱗の破壊される痛みはなかったかもしれないが、表皮は痛んだかもしれない。（ヘルト・ドラゴン）

獄竜の動きが止まる。

「この都市の人の痛みを思い知れ」

冷たく彰は吐き捨てる。

もちろん、この言葉にも粒子を大量に乗せた。

そして、地獄が始まる。

表皮からだんだんと破壊していた粒子は血管と神経の破壊に取りかかる。

神経の伝える激痛が伝わると、空気も何も感じなくなる空白感しか残らなくなる。

血管を断ち切られ、血が噴出す。

だが、粒子を操るための風に吹かれて彰には一滴の返り血も掛からない。

破壊は筋肉へと達する。

そして、地獄は終わりを迎えようとしていた。

欠落によって奥へ奥へと破壊していた粒子が中枢機能を受け持つ全ての内蔵を破壊しきった。

絶命したのは一目同然だった。

元が何だったのか判らないほどに無残になった死骸を無視して彰は術を使つてすぐさま詩音のいる廃墟へと戻った。

「……早かったな」

詩音は先ほどと変わらない体勢で彰を見上げた。
苦笑するようにして彰は口を開いた。

「フルでやったから・・・ね」

一気に身体が痛み出す。

自分の体重も支えきれずに詩音に向かって倒れこみそうになり、慌てて壁に手をつくが、支えきれない。

伸ばしたひじは曲がり、詩音の顔のほうへと近づく。

詩音もまずいと思ったのだろう。

慌てて腕を彰へと伸ばす。

だがもちろん、詩音に支えられるほどの力に残されていない。
ズキンと身体が痛み、彰の体重で腕が曲がる。

顔が間近に迫った。

小さな楽しき一時

力をなくした2人の顔が間近に迫った。

「させるか」

「！？・・・ゲホッゲホッ」

「大丈夫か？詩音」

彰の襟首が掴まれ、強引に後ろへと引つ張られる。

首の圧迫に思わず咳き込んだ彰を無視して詩音に呼びかけたのは伊槻だ。

その周りにはニヤケ顔のキースも、心配そうな顔をした梓も、呆れ顔の俊也も、眉間に皺を寄せた海人も、微笑むビュークもいた。

「最強だっと思ってた2人が一番重傷ね 回復魔術・治癒水」

ビュークがそう言っつて傷の治癒を開始する。

と言っつても、術で作り出した治癒効果のある水を詩音と彰に頭からぶっかけてただけなのだが・・・効果は絶大で、身体の痛みを即座に消してしまった。

「やっば回復魔術はいいな。死族^{デスト}の血を引いてちゃ使えねえけど」

自分の力で立ち上がると肩や首などを回して体の調子を確かめる。

「確かにそうだねえ。死に掛けたときとか、秘技を出した後とかあ」

キースが危なかったねえとお気楽そうに笑う。

「俊也が気付いていなかったら圧死してたし」

梓（ルト・ドラゴン）が獄竜と共に落ちる2人を術で助け出してくれたときの俊也を思い出して呟く。

「梓が叫んでから風吹くまでそんなになかったはずだけだな」

伊槻が思い出すように頭を掻きあげる。

「魔族（ジック・メイ）の魔力の回復能力は他の部族より高い上に天才なら強い風を瞬時に吹かせられるわ」

ビュークがねっ？と俊也を見る。

「アズちゃんの声が聞こえてからは夢中でしたから」

照れたように俊也が言う。

「いきなり走られて焦ったよ。ちゃんと退治できたからよかったけどよ」

海人が溜息を吐きながらも笑った。

「そうか、よかった」

彰がほつと息を出す。

「よくねえよ」

「何、詩音とだけ美味しいイベントに入ってたんだよ！」

「仕方ねえだろ、身体ボロボロだったんだぞ！」

「だからって詩音とキスだなんて私が許さない！」

「アズちゃんまで・・・」

「正直詩音のラブハプニングは見たくありません」

「そのまま首絞めてよかったんだけど、伊槻」

「そうだったな」

「でも、相手がアズちゃんじゃなくてよかったな。いくら親友の彰でも許さねえ」

「確かにそうですね。絶対許しませんね。たつぷりと地獄を見せま
す」

「自分だったらどうでもいいってか？海人、俊也」

「いや・・・」

「久しぶりに俊くんが黒モードになったのに詩音瞬殺じゃん」

「したほうが少しは女らしくなるんじゃないのかなあ？」

「キース、余計なことは言わなくていいの」

「でも、一理あるかも」

「同調するなら殺すよ、伊槻。今身体は本調子だし」

「詩音、駄目だよ」

「じゃあアズちゃん彰とキスする？」

「させません」

「穢れるからやらせねえぞ」

「俺もさせたくはない」

「ひでえ・・・」

「ごめん。したくない」

「彰だけじゃなくてお前ら全員やらせねえから安心しろ。した奴は
惨殺か髑殺し」

「嬉しそくに笑って言うなああ！！」

「怖！！」

「それなら普通に殺してください」

「私も怖いよ」

「本気で殺りそうだねえ」

「廃人にでもなつてろ」

「静かになりそうね」

「確かに」

「じゃあ、今マジで殺ろうか？」

「・・・誰を」

「普通彰じゃん」

「いつもなんかやってるもんな」

「そうだなあ・・・お前だ」

「ちよつ、マジで銃をこっちに向けんなああ！」

「伊槻、僕を盾にしないでください」

「黒俊也も一緒に殺るからいいよ」

「ちよつ、引き金に指かけるな！！」

「・・・発射」

「ハツタリかけんな」

「心臓に悪いです」

「2人とも冷汗かいてるじゃん」

「詩音がやると冗談に見えない」

「詩音がやると冗談に見えません」

「あたりまえだろ、本気なんだから」

「危険人物っ！！」

賑やかな声と笑いが廃墟の中の空気を優しく包んでいる。

もうすぐやってくる不幸な知らせを知らずに、心の底からこのひと時の幸せを満喫していた。

セルビアの伝言

楽しい雰囲気の中、一つの電子音が突然に鳴り響いた。
数秒の間一つの音が単調に鳴り響く。

ビュークの持つ端末からなっているそれは一度鳴り止むと、無機質ながらも悲しい音色を奏で始める。

ビュークとキースはその音で全てを知ると、静かに電源を切った。

「どうしたの？」

何もわかっていない梓が訊ねる。

悲しみの色に染まりかけた瞳をビュークは一度閉じて笑顔を作った。

「穴が塞がったって報告よ。さあ、帰りましょう」

「よかった」

「あつ、置いてくんだよ!!」

真実を知らない彰達の後をゆつくりとキースはついて行く。

作戦終了と、セアンとセルビアの死亡報告。

先ほどの電子音の意味はそういうことだ。

「キース、あの子たちには教えないでね」

「わかったあ・・・」

ビュークに釘を刺されてキースは頷くと、空を見た。

絶縁空間に繋がっているのはこの空間全域だという説がある。

立っているところも、この空も、目の前も、全てが繋がっているらしい。

それなら今、目の前に2人が現れるのではと思う。

そんな都合のいいことはないとキースは全否定できるのだが、やはり願う。

戦闘狂のキースにしてはおかしいと思われる？

いや、思われない。

狂った感情を持つキースは思う。

「どうせ死ぬならあ、全部自分の手で壊したいんだよねえ」

気に食わないやつや嫌いなやつはもちろん、どうでもいいやつも、仲間でさえも、目の前にいる大事な大事な存在でさえも。

全部、自分の手にかかけたい。

それは許されないことだけど。

「夢っていえばいいのかなあ？」

叶って欲しくないことだというものは誰もいない。

既に皆はかなり先にいる。

キースは追いつくために走り出した。

レジスタンス

正界の基地に戻るとすぐさまビュークは自室に戻って仕事を始めた。次々と運ばれてくる書類や報告をこなしていくビュークを見て、邪魔だと思った彰達は大講堂に来た。

「キース、着替えたいんだけどいい？」

「大丈夫じゃないのお？でも、個人部屋はないよお」

「別に。ここで着替えるつもりだったし」

「ブッ！！」

大講堂に着くなり詩音が恥じらいもなく言い出したこととキースが普通に許可したことの両方に伊槻が勢いよく噴き出した。俊也と海人は無言でくると後ろを向き、彰は目を塞いだ。もちろん、全員に詩音の呆れた視線が送られた。

「普通に脱いで着替えるわけじゃねえし」

詩音がその場で回ると服が黒のシャツとベージュのズボンに変化した。

右目の眼帯は当たり前のように存在を強調している。

「んで、キース、何を隠してるのかな？」

詩音の一言にみんなの顔に緊張の色が表れる。

「穴が塞がった報告だけならもつとホツとした顔をするのではないでしょうか？」

詩音が左目だけで鋭くキースを睨み、俊也もキースの事を見上げながら不気味に笑う。

彰や海人、伊槻にとって、詩音の睨みだけでも充分怖いのだが、自分の事を見上げて不気味に笑う俊也も充分怖い。それでもキースはいつものままに笑う。

「別に何も隠してないよお」

「・・・」

「隠さなきゃいけない事ってえ、フィーは分かっちゃってるでしょ？」

「・・・」

「確認しないほうがいいんじゃないのお？」

キースはにつこりと笑うと大講堂を出て行った。
俊也が肩を竦めて駄目でしたねと小さく呟く。
その顔は本当に残念そうだったが、隣の詩音は怒ったような顔をしていた。

「間違いであって欲しかったんだよ」

「・・・何？」

「純血の死族デストの作った特殊生命体だからな。死族デストの能力はかなり受け継いでるんだよ。世の中が知っている能力の何倍もあるんだよ」

苛立つ様に吐き捨てる詩音は口を閉じると息をついた。
同時に大講堂の扉が勢いよく開いた。

「ゼノリー様!!」

彰にはまったく見覚えのない正界レジスタンスの兵だった。
ごくごく普通の正界レジスタンスの服を着たおそらくは末端兵の男はその場で肩膝をついた。

「お初にお目にかかります、先の騒動でセアン様とセルビア様と共に穴の修復に向かっておりました、修復隊のジャックと申します。

セルビア様からゼノリー様に伝言をと」

「セルビアはどこにいる？」

詩音が脅すような声色でジャックに訊く。

「・・・お答えできません」

「俺にも教えてくれないのか？」

「できません」

彰にも同じように答えようとはしなかった。

「セルビア様は、ライバルはいるけど頑張つてと言っておられました」

「他には言われなかった？」

梓の綺麗な声にジャックは思わず顔を上げ、そして固まってしまうた。

頬の辺りが真っ赤に染まっている。

「惚れたな」

「またライバル増えてるじゃん」

「アズちゃんの可愛さは罪だね」

「えっ・・・」

「梓が可愛くて一目惚れする奴は大量にいたよ」

「全部詩音と海人がのしてましたけど」

「お前だって彰だってやってたじゃねえか！」

「っっーかサクツとバラすなよ！」

盛り上がり始めたところでジャックはふと気付いた。

「梓と詩音って・・・えっ？」

ジャックの脳裏にセルビアが消える直前の言葉がよみがえった。

「梓さん、詩音さん・・・」

思わず呟いた言葉に全員の視線がジャックに集まる。

ジャックはそのまま続きを呟いた。

「ごめんなさい。お兄様を幸せにしてあげてください」

「・・・やっぱり、と言うべきか。ジャック、セルビアは絶縁空間を越えただろ？」

詩音は溜息をつく。

ジャックが静かに首を縦に動かすのを見て、詩音は溜息をついた。

「もう会えないかもしれないけど、絶縁空間を越えただけで死んじやいないんだから隠すなよ」

こんな遺言まがい言葉を残すのが馬鹿だとは思わないけど、無性に腹がたった。

もう会えないという運命に逆らおうとしない姿に。

「・・・メレでしたよね。貴女は強い魔力メイを持っていると聞いています。だから貴女は絶縁空間をいくつもいくつも破壊して何度も行方をくらませた。命があるのは破壊してすぐ潜った・・・だからですよね！今あなたの命がここにあるのは！！セルビア様は我々と共に塞ヘルト・ドラゴンごうとしていた穴にセアン様を通り、獄竜を押し込んで、それから自分で通ったのです！！貴女の時とは訳が違う！」

ジャックが強く強く叫ぶ。

「セルビアが死んだと決めつけてるような言い方だな」

「伊槻、少し黙ってる。今回の穴は地獄世界スカルアースだろ？セルビアの力なら3日だ。魔力メイを溜めに溜めればこっちに来れる。それにセアンがいたならその間身を守ってもらって2人で帰還することもできる。もう一度会いたい奴がいれば絶対やる。それに、絶縁空間を通るの

にかかる時間はたった数秒、一人が通れる大きさの穴なら閉じる
までに通る時間に+2〜3秒かかる。絶縁空間で意識を失うなんて
ありえないことにならない限りは向こうにいる。・・・何度も行き
来した奴の計算だ。実体験した奴の言うことと、お前の空想論のど
っちを信用するかはお前の勝手だから、これ以上の話は無駄だ。・
・行こう」

もう一度溜息をつく、出口へと歩き出す。

ジャックを気かけながらも皆離れて詩音についていく。

彼には、考える時間が必要だ。

闇に立つ男

深い深い闇の夜。

新月の今日は更に深い闇に包まれる。

その闇に一人、男は降り立つ。

音もなく静かに、静かに地に足を下ろした。

闇色の服に身を包んだ男は何かを呟く。

「
」

うわ言の様に呟き、歩き出す。

男の周りに蒼い炎が現れては消えてゆく。

「アルセイデイ」

男は呟く。

「アルセイデイ」

男の声は闇にとける。

「なぜ、父を裏切る」

怒りに滲むその声を聞くものはいない。
ただ、闇にとけていく。

「戻って来い」

男の目は虚空を見る。

「お前と一つになるものと共に、父の元に」

男の目は虚空を見たまま、どこか恍惚とした光を宿す。

「アルセイデー」

男はそのまま現れたときと同様に静かに消えた。

幹部達

「うっわ、なにこれ」

彰の文句に答えるものはいない。

皆わかりきっていたのだ。

彰はみんなの言葉を代弁したに過ぎない。

「どんなのだよ」

2〜3ヶ月に一度あるらしい特別任務に駆り出された彰達とはある町外れに来ていた。

今回の任務の内容はダズの戦闘兵器の破壊。

だが――

「あたり一面機械って言うのはさすがにないだろ、おい」

木の葉を隠すなら森の中、機械を隠すなら機械の中とでもいいいたいか。

ただここは廃棄物置き場なのだが、とにかくすごい。

「無力世界よりも酷いんじゃないや……」
グェール

梓が呟く。

それこそ地平線が見えるほどの広さが故障した機械で埋もれている。電力が残っているのか、歩いているとまれに機械が突然動き出したりするらしく、かなり危険である。

「はあ、やるしかねえだろ」

詩音がため息まじりに歩き出す。
その直後。

「うわっ！」

錆びた部分に乗った伊槻の足元が崩壊。
見事に顔面を機械のパネルにぶつける。

「ダサすぎです。放っておいて大丈夫です。行きまわっ！！」

軽蔑的に倒れた伊槻を見ていた俊也も数歩歩いてすぐ同じ運命を辿る。

「行きまわっ！ってなんだよ・・・ってか足元見てりゃあ大丈夫だろ」

「それは甘いんだな、海人」

慎重に歩き出した海人の背中を彰が悪戯を思いついたような目で見る。

その前にいた詩音に目をやると、視線に気付いた詩音が振り返る。
目で合図を送ると詩音は銃を手作り出す。

狙いを一瞬で定めて今降ろされようとしている海人の足の下を、踏まれる運命だった機械を打ち抜く。

「わっ！？」

バランスを崩す海人に必死で笑いを堪えながらも彰が歩き出し、そして。

「いつ！」

「によ！？」

「またかよ！！」

海人同様に詩音によって転ばされる。

それも、3回連続。

「ここまで引つかかるのはどこの大馬鹿野郎だよ」

「目の前の馬鹿です」

「俺以上に酷いな」

海人に馬鹿にされ、俊也にバツサリ切り捨てられ、伊槻に哀れまれた。

そして――

「普通3回も引つかからないよ」

「クスッ」

梓にまで呆れられ、詩音に真つ黒な笑みのまま笑われた。

日常茶飯事の悪戯だったが、今回は彰も怒った。

「いい加減にしやがれえええ！！」

ただし、最初に思いついたのは彰。

実行犯は詩音だが、主犯は紛れもなく彰で、詩音が気まぐれで彰を狙っただけである。

彰がやらせなければ防げたこと。

「貴方がほとんどの原因でしょう？若干はメレが悪いかもしれませんが」

突然降ってきた声に空を見上げると、宙に時亜がいた。
相変わらず時亜はローブを着ている。
その色はいつもよりどす黒い。

「メレ、この人たちとここにいるとは思いませんでしたよ。てつき
り私達を裏切ってここの兵器を壊しにきたのかと思ってたのですが・
・違うようですね」

時亜が口の端をぐつとあげて笑みを浮かべる。
対照的に詩音は先ほどまで浮かべた笑みを消し、無表情になる。

「そうだな、もうすぐだからな」
「・・・詩音？」

淡々とした声で詩音は時亜と会話を続ける。

「そうですね、もうすぐ夢が叶うのですから」
「お前の夢と、アイツの夢がな」
「おや、貴女も望んでいませんでした？」
「ああ、自分もだったな・・・」
「あまり嬉しくなさそうですね」
「今の自分は望んでないからな」
「軽く私にはショックな言葉ですが・・・それでも、やるのでしょ
う?。」
「やるしかないだろ。アイツの命令は絶対だ。逆らえた例がない」
「でしょうね、だからあの方についていけるのですから。さあ、や
りましょう」

時亜は機械の上に下り、足元の機械を蹴った。

奇怪な音を機械は出す。

動いたのだ。

咄嗟に彰達は身構えるも、変化は彰達の周りで起きる。妖しい色の結界が張られ始め、彰達を覆おうとする。結界が完成するまでの数秒にも満たない時間。

その間に新たな人が完成前の結界に飛び込んで来た。

「弱冠不利？でも、幼馴染を攻撃できるのかな？」

聞きなれた声、見慣れた顔。

祐志だ。

髪と瞳の色が少し褪せた様な気がする。だが、それ以外は相変わらずだった。

「祐志、やっぱりダズにいたんですね」

「俊也か。腹の調子はどう？」

「セルビアのおかげで傷も残ってません。それより」

「戻る気なんかさらさらないよ。それに」

祐志はどす黒い笑みを浮かべる。

「自分の意志で、ダズに入ったんだ。あの方に気に入られてこのラルと言う名を与えてもらってこうしてお前たちのところに来てる。もう、お前たちが苦しもうが死のうが可哀想だと思わない自信があるよ。もうお前たちとの関係はないよ。ダズに入って、すごく楽しいことばかりだったよ。その楽しいことの続きが、今回の仕事だよ」

祐志は機械の山に手をつく。

魔力を注ぎ、機械を^{メイ}変化させてゆく。

機械を結界に触れるぎりぎりの高さまでの鋼鉄の壁に変え、その壁

で結界の中は迷路のように複雑になった。

もちろん、その壁を壊されないように魔力でありとあらゆる耐性を持たせる。

技族の天才であるがゆえに、それらを一瞬で作り上げた。

「一人ずつ、追い詰めてやるよ！」

「覚悟してください」

「いくぞ」

ダズの幹部3人は迷路の中を歩き始めた。

裏切り者を裁く時

鉄の壁によって作られた迷路の中を詩音と祐志と時亜は歩く。散歩に出たような気分でのんびりと歩いている。

「最初はやっぱり俊也がいいな。あの冷静ぶってる顔を恐怖に歪ませたいんだよね」

「私としては彼と本気で勝負をしてみたいんですね。正界のボスレジスタンス以上の魔力を持ってますから、勝てるかはわかりませんが」

「恵とじやのこを利用すれば一発で動きを止めれるよ」

「ああ、噂のシスコンですか」

「笑えるよね、メレ」

「・・・」

祐志と時亜の話話を詩音は聞いていなかった。

虚空を見つめていた詩音の思考回路は完全に止まっていた。

「まだ、引きずってるのですか」

「いい加減割り切らない？」

祐志が詩音の顔を覗くと同時に、詩音の目は焦点をあわせ、思考も動き出す。

「割り切ってないところにいるだろう。ただ、アイツの言いなりなのがムカつくんだ」

「ただの反抗期ですね」

「別行動、いいか？さっさと終わらしてアイツから離れたい」

「2度目はないですよ？」

「2度目も何も裏切りはしてねえし。ああしたのは全て今日のため

の布石だ」

「確かにそうかもしれないけど、アレで見つかったら裏切りにとられてもおかしくないでしょ？」

「まあな。でも、人の事いえないだろ。自分もお前も裏切り者なんだから」

皮肉気に笑って詩音は眼帯をはずした。

眼帯の下、閉じたままの右目を開く。

どす黒い赤の瞳。

目の前の鉄の壁を見つめ、壁に向かって足を進める。

腕が壁を貫通したかのように消え、そのまま詩音の姿を壁が飲み込んだ。

「相変わらず、恐ろしい能力ですね」

スカルアース

「地獄世界を創り出し、神を恐れさせた最悪の魔神フィリールの末裔……死族^{デスト}の最悪種、呪われし死神一族の中の子が仲間だなんて光栄だね」

時亜と祐志は恍惚とした顔で詩音がすり抜けた壁を見つめた。

詩音は知っている。

自分の家系に魔神フィリールがいることを。

その中でも、フィリールの一部——どす黒い赤の瞳、フィリールの右目——を持っていることを。

危険な能力をたくさん持っていることを。

本気になれば、この世界全てを滅ぼせる力を持っている影でさえも殺せるかもしれないほどの膨大な量の魔力^{メイ}を持っていることを。

即ち、この世界を滅ぼせる存在であることを。

詩音は知っていた。

どう足掻いても、この世界は全て滅びてしまうことを。

もうすぐ、彰の中の魔力が彰を支配することを。

支配された彰がこの世界を破壊することを。

たとえ彰を殺しても、自分とアリユリーの中のフィリールの一部が世界を滅ぼすことを。

詩音はわかっていた。

もう、何をしても無駄だと言うことを。

世界は、滅びるのだと。

詩音は、間違っていたのだ。

「アイツを・・・殺さねばならなかったアイツを好きになるだなんて!!」

詩音は壁を殴りつけて叫ぶ。

「どうすればいい!? アイツが・・・アイツが殺すべき人物だと気付いたときに殺せなかった自分は、どうすればいいんだ! 叶わないと知っていたのに、それでも残しておきたかった自分の我が儘のせいで世界が滅びる・・・! そんなこと・・・そんなこと絶対許せるか!! 貴様のせいで! 自分は生まれた!!」

目の前の存在に訴える。

左目からはぼろぼろと涙が落ちる。

フィリールの右目は詩音の怒りに反応して妖しい色を浮かべていた。怨みを浮かべる詩音の顔を冷酷に見つめるのは漆黒のローブを着た男だ。

フードを被って目元を隠し、僅かに見える頬と首筋には刺青が入っている。

詩音の、アリユリーの父親、デトロイトだ。

「怨みの矛先は私ではないだろう。怨むのは自分の心と、運命だ。生まれたからこそ知った幸せがあっただろう」

呆れたように、デトロイトが淡々と言葉を紡ぐ。

自分の娘の怨嗟の声を言葉の刃で返す。

「ああ、あつたさ・・・だけどな、感謝はできねえよ！幸せであつて、生きててよかったって思ったことは一度もねえんだよ！！いつも貴様の影が付きまとう生活には本当の幸せは感じられねえんだよ！」

デトロイトを睨みながら叫ぶ。

かなりの音量が壁に反射し、反響する。

その音が聞こえなくなるまで、デトロイトは黙る。反響音が消えると口を開いた。

「本当の幸せ？そんなもの、お前が味わえると思うか？」

「・・・黙れ」

「私もだが、お前の祖先は破壊の限りを尽くした魔神フィリールだぞ。ましてやお前はそのフィリールの一部を身体に宿している」

「・・・黙れ！！」

デトロイトは一度深呼吸をした。

瞬間的に詩音は耳を塞いだ。

ききたく、ない。

「今まで無数の人の幸せを奪っていた神の一族の子が、散々人の幸せを奪った奴が本当の幸せを手に入れたと言えることではないだろう」

耳を塞いだ詩音だが、はつきりとその冷たい言葉が聞こえる。
何も言えずに詩音は立ち尽くす。

「ここまで使えない娘だとは思わなかったぞ。用済みだ、消せ」

デトロイトがそう吐き捨てて消え去る。

変わるようにその場にアリユリーが現れる。

その右手には片刃の剣が握られていた。

詩音がアリユリーに気付いて身構えるも、アリユリーはいとも簡単に詩音の背後にまわりこんでギラリと光る刃を振り下ろす。

鮮血が儚く舞い散って、倒れた人影を赤く彩った。

偽者を裁く時

「チツ、殺り損ねたか」

アリユリーは舌打ちをして剣に付いた血を振り払う。

目の前には無傷のアルセイディと、背中を斬られて赤い液体で地面を濡らしている大柄な赤髪の男。

振り下ろした剣を受けたのは、赤髪の男だった。

アリユリー以上の身体能力でとつさに脚力を強化し、アルセイディを突き飛ばし、その勢いのままにアルセイディと赤髪の男は共に倒れこんだ。

だが、手ごたえはあった。

背中あたりを斬ったのだろう、男の背からは血が流れている。

赤髪の男を見ているアリユリーの背後に突然に現れた気配から逃げるように前へ飛び、同時に持っていた剣でもう一度アルセイディを狙う。

「させません！ 上級魔術・鉄茨鞭」

近くの壁から棘の生えた鉄が映え、ありえないことに鞭のようにしなる。

咄嗟に開いていた左手を身体強化して掴もうとする。

掴める、そう思った瞬間、鞭はアリユリーから離れるかの様に逆方向へと進行方向を変えた。

「なっ！？」

驚くアリユリーの耳に、アルセイディの無感情の裁きの声が届く。

「闇魔術・同類封印」

その言葉を最後に、アリユリーの意識は途絶え、二度と戻ることはなかった。

詩音の叫びは、常識を遥に超えるほど身体強化をしていた伊槻の耳には痛いほどに届いていた。

壁によって彰達は数グループに分けられてしまったが、伊槻は運良く俊也とは離れずに済んだ。

俊也の耳には届かなかった叫びが脳内に響き、それに比べるとかなり小さいが、男の声も聞こえていた。

伊槻の記憶にはないが、酷く恐ろしい者の声だった。

嫌な予感に突き動かされて俊也の腕を掴んで叫びのほうへと走っていった伊槻は詩音の姿を見つけ、壁の陰に隠れた。

いきなり伊槻に痛いほど腕を強く掴まれ、足が宙に浮いてしまうほどのスピードで引つ張られた事に抗議しようとした俊也だったが、詩音と男の姿に気付くと事情を察したのか、無言で魔力^{メイ}を使って気配を消し、壁の影に隠れて伊槻と共に様子を窺い始める。

「今まで無数の人の幸せを奪っていた神の一族の子が、散々人の幸せを奪った奴が本当の幸せを手に入れないなど言えることではないだろう」

「ここまで使えない娘だとは思わなかったぞ。用済みだ、消せ」

男の代わりにアリユリーが現れ、背後にまわったとき、伊槻は飛び出していた。

一瞬で身体中に分散させていた身体強化用の魔力^{メイ}を両足に集中させて飛び出す。

詩音を突き飛ばして刃から遠ざけよう——いや、自分諸共！

一瞬よりも短い間に決めると、詩音を突き飛ばして自分もその勢いに逆らわず、共に倒れこむ。

もちろん、頭を打たないように気をつけて。

少し遅かったのか、背の辺りから脇腹にかけて、激痛が走る。

意識と視界に靄がかかった伊槻だが、その後の光景は見れた。

気配を消していた俊也が壁から飛び出し、術の発動準備をする。

アリユリーが前に飛んで第2の攻撃に入るが、俊也の術に気をとられてその隙を詩音がついた。

「闇魔術・同類封印」

どんな術かはわからなかったが、アリユリーが気を失って倒れたのだけはわかった。

そして、伊槻の意識もここで途絶える。

「サンキュー、伊槻。助かったよ」

「無茶をしすぎですが。ビュークに教わっておいて正解でした 回復魔術・治癒水」

俊也が前に彰と詩音にビュークが使っていた術で伊槻の傷の治療をする。

服にある赤い血の染みはそれ以上拡がることはなくなった。

だが、伊槻は起きない。

ホッとしたような顔で意識を手放している伊槻の髪を詩音が優しく撫ぜる。

黒髪が赤髪へと変化していたが今、黒髪へと戻っていく伊槻の髪を優しく撫ぜている詩音は俊也の顔を見た。

「俊也もありがとう。アリユリーを封印できた」

「自分より強いと言ってたのに、思った以上にあっさり勝ちましたね」

「まあね、アリユリーがさっきの話で自分が絶望してるって油断してたこともあるだろうし。2人のおかげで隙がはつきりとできたのはラッキーだろうね」

「そうですね・・・大丈夫ですか？」

笑う詩音に俊也は心配そうに問う。

見抜いていたのだ、俊也は。

封印をした後の詩音の魔力が極端に減っているのを。

「反動がきたただけだ。5年くらいは満足に魔力^{メイ}が使えないけど、死ぬわけじゃないし」

「でも・・・いざという時には困りますよ？」

「ん、彰の有り余ってる魔力^{メイ}をもらうことで彰が一人で制御できるようにしようって考えもあったからこの方法を使っただし。さて、彰に合流できればいいんだけど」

「傷を治しましたが伊槻にはかりあまり無理はさせられませんし。目を覚ますまで移動も無理ですね」

「そうだな。自分は身体強化しないと伊槻をおぶって歩いててもすぐへばるだろうし、キャレとかに会った時が危険だし」

「僕では伊槻をおぶることさえ無理です」

恨めしそうに俊也は伊槻の身体を見た。

かなり小柄な俊也では伊槻を引きずることになりかねない。

詩音は喉まで込みあがってきた小さいと言う言葉を飲み込んだ。

「少し、ここにいましょう」

「そうだな」

俊也は少しだけ、肩の力を抜いた。
敵の気配はなかった。

伊槻の気持ち

俊也は少しの間だけ気を緩めると、すぐに気を引き締めた。

おそらく詩音なら時亜や祐志がくれば俊也より早く気付くだろうが、それでもまともに戦えるのは俊也だけだ。

魔力は少しでも溜めておけるように気を引き締めておく。

「ショックだった？」

しばらくして、無言で伊槻の髪を撫でていた詩音が急に口を開いた。

「祐志がああなったのってやっぱりショック？」

「・・・少なくとも僕はショックでしたよ。ただ、ああなったのは僕たちのせいでもあったってことにです。伊槻も、ショックだったんでしょうね。壁ができて別れ別れになったときに伊槻は険しい顔をしてましたから」

少し前の伊槻を思い出して俊也は静かに話す。

「でも・・・」

「でも？」

僕には心当たりがもう一つ、あるんですよ？

伊槻が、誰にも言えなかった心の奥底に押し込めている悩みの事を心の中で呟く。

幼馴染の中で一番仲の良かった伊槻が一番仲のいい俊也にも隠していることも、俊也にはわかっていた。

「いえ、僕からは言えません」

本人が言おうとしていないなら、言わないであげるべきだと口を紡ぐ。

でも、悪戯心はできた。

伊槻の顔を見て、そして詩音の顔を見た。

「話は変わりますが、詩音は彰のことが好きなんですか？伊槻のことが好きなんですか？」

「っ！！」

「フフ」

詩音の肩がビクリとはねて俊也の方を見た。

だから気付かなかったのかもしれない。

伊槻が一度目をあげ、そして慌てて目を閉じて眠ったままのふりをしているのを。

「・・・なんて言う必要がある」

「詩音は毎回楽しそうに2人をいじめるじゃないですか。幼馴染以上の気があるのではないですか？」

「まさか。ただアイツらがいじめ甲斐があるだけだよ」

なかなか手ごわいと内心で呟きながらも俊也は続ける。

「アズちゃんと前に一度2人だけで話したんですよ。詩音はどちらの事が好きなのではと」

「・・・」

「結論は出ませんでしたけど」

「・・・2人だけって？」

「アズちゃんと詩音の部屋を訪ねたら詩音がいなかったんです」

俊也は気付いていない。

詩音から殺気が漏れているのに。

伊槻は寝たふりをしている以上逃げられず、冷や汗を掻いたまま動かないでいた。

「でもすぐにビュークが来たんですよ。ビューク的には彰なのではと」

その一言で殺気は消えた。

俊也は詩音の目を見て真っ直ぐに問う。

「実際はどうなんですか？」

「………どっちも大切な存在だ。彰も、伊槻も」

彰は異性として好きだと思うが、伊槻も自分を理解してくれる大切な人だ。

自分を命がけで守ってくれる、心やさしい大切な人。

優しい眼差しで伊槻を見る。

伊槻の目が開いた。

「嘘をつくなよ。詩音」

伊槻は寂しそうに言って起き上がった。

「彰のほうが必要なのは知ってる。さっきも言葉として盗聴きいたした。ごめんな、勝手に聞いて」

残念そうにいいながら謝る。

「……やっぱ聞いてた？」

「ごめん、でも言わせてくれ。好きだ、俺は詩音の事が好きだ」

真剣な目で言う。

照れもなく、真っ直ぐに。

詩音も真っ直ぐ伊槻に言う。

「うん・・・知ってる。気付いてたけど、こたえられない。ごめん
「いいんだ、他の奴らとは違う反応くれただけ」

無力世界で詩音のファンの中に、告白をした奴が何人かいた。
ヴェール

幼馴染同士で固まっていたときが多かったためか、幼馴染が告白する場に居合わせることは多かった。

手紙で呼び出されていたときは覗きに行くと言う酷いこともしていたのだが・・・

詩音に告白する奴は、彰や海人、梓に比べればかなり少ないがいた。

「他の人たちは無視するとか、かなり酷かったですよね」

彰達のように丁寧に断ることはなかった。

くだらないと吐き捨てて帰るときもあった。

お前、誰？と冷たい目で睨んでいたときもあった。

気持ち悪いと言ってから暴言連発したときもあった。

何も言わずに立ち去ることもあった。

そんな人たちに比べれば、ごめんと言われても、何億倍もいい。

目を見て、しっかりと返事を返したのだから。

「ありがとう」

「こちらこそ、ありがとう」

どちらの目にも、涙が光っていた。

こんな馬鹿男いづきに真面目に答えてくれて。
こんな裏切女しおんを好きになっけて。

「来ます!!」

突然俊也が叫び、背後を振り返る。

「人の婚約者に手を出すとはいけませんね」
「ていうか趣味悪っ」

俊也の視線を辿ると怒りに震える時亜と嘲笑している祐志がいた。

「キャレ、それはアイツが決めただけだ。それにそれは妹だ」
アリユリー

詩音が倒れたままのアリユリーを顎で示す。

生気のない顔で倒れたアリユリーを見た時亜は鼻で笑っただけだった。

「知っています。あの方から聞いてます。でも、貴女に惹かれてるのですよ・・・冷酷な死神ではなく、正義アルセイディの死神にね。だから貴女
のときに求婚したのですよ？」

「それを聞いたアイツがアリユリーにそのことを言っただけだ・・・
アリユリーがお前に気があるのを知って・・・！」

「ええ、気付いていない振りをしてたので彼女は少しも気付かなか
ったようですが、彼女には何の魅力も感じません」

「！」

「・・・！」

「・・・！」

「彼女はただ、強いだけです」

大袈裟に溜息をついて見せる時亜。

その後ろでは祐志が呆れながらもアリユリーを肩に担こうと近づいた。

見かけより非力な上に身体強化もできない技族クックの祐志は死人のような状態のアリユリーを担ぐのに四苦八苦している。

話に夢中になっている時亜と悪戦苦闘中の祐志には気付けなかった気配が、2人のその先にあった。

伊槻が気付き、詩音と俊也も遅れて気付くが、そのことにも2人は気付かない。

そこに、梓と海人がいることに。

「恐ろしい運命から逃れようともがき、切羽詰まっている強い貴女だからこそ、惹かれるのです」

「うつわ、詩音相手になんだこのラブコール・・・時亜、大丈夫か？」

「詩音にラブコールなんか許さないよ？」

時亜に冷や水をかけるかのように海人が皮肉気に笑い、梓が恐ろしいほど黒い笑みを浮かべて時亜の肩に手をかける。

「・・・本気で詩音しおんに告白した俺いつきはどうなるんだよ・・・」

思わずこぼれた呟きの思いは一致した。

闇の気持ちが消える

梓と海人は一つの賭けに出ていた。

昔の時亜を、取り戻す。

おとなしい時亜に戻す。

多少気の引けるやり方だが、やることにした。

「ねえ？聞いている」

時亜の弱点をつく。

精神的な傷トラウマを使った、できればやりたくない方法。

周りの人に高く評価されて信頼されている、いわゆる勝ち組や優等生と呼ばれる人。

外見・内面等で周りを惹きつけてグループの中心人物となる、アイドルやリーダー。

ぱっとしない性格からか、それとも別の理由があったのか、昔嫌がらせを受けた時亜。

その主犯だったのが、こういう人達だったという噂がある。

初対面の海人や梓、彰相手に明らかに戸惑い、距離を置いていた時亜。

クラスで性格のキツイ裏番的存在の女に文句を言われたときにかなり顔が青ざめ、恐怖している様子が窺え、性格が温和な方である梓がちよっとしたミスをした時亜に気を突けてと言った時も、かなりビクビクしていた。

このことから噂は本当だということが予想できる。

だからこそ、心は痛むがやる。

「許さないわよ、時亜」

怒った顔で、怒りを乗せた声で時亜を見る。
時亜の顔が一瞬歪んだ。

「おい、きいてんのか？」

ドスを効かせた声で海人が時亜の正面に立ち、睨みを利かす。
時亜は恐怖に歪んだ顔2人を見ると肩に乗ったままの梓の手を振り
払う。

先ほどまで怒りや惚気の色が合った顔は血の気が引いている。

「おい」

「ねえ？」

2人が眉間に皺を寄せる。

時亜の肩がビクッとはねる。

唇が微かに震えているのを祐志は見た。

「

」

震えた唇から何か紡がれ、そして時亜は消え去る。
逃げたのだ、術を使って。

すぐに理解した海人はホッと息をつくとすぐさま祐志に向き直った。

「祐志・・・お前、どうした？何が不満だ？」

成り行きを見ているだけだった祐志が担ぎかけていたアリユリーを
おろして海人の方に向き直る。

歪みに歪んだ顔は怒りに満ちていた。

海人は一度梓に詩音たちのほうへ行くよう目で合図する。

何かあったとき、詩音や俊也が梓を守るだろう。

梓はゆつくりとだが、移動した。

その一連の行動を睨むように見ていた祐志が口を開く。

「わからないのか・・・！」

今までの苦痛をわかつていない幼馴染に嫌気がさす。

ずっと、ずっとずっと我慢していた不満は既に限界を超えていた。
なのに、誰も気付いてくれなかった。

祐志は思った。

この程度か、自分の周りの奴らは変化に気付かない。

当たり前だ、自分が表に出してないのだから気付くわけない。

「嫌なんだ。・・・いつも笑顔が絶えないで一人にならず、ずっと誰かと楽しそうにいる伊槻が！頭が良くて礼儀正しくて、皆に尊敬されている俊也が！孤立しているのに憧れの人だと陰で言われている詩音が！皆から大事にされて幸せそうにしてる梓が！いつも自由に勝手にやってるのに周りから信頼されてる彰が！文武両道で誰からも頼りにされてる海人が！」

ずっと、耐えていた。

幼馴染たちが周りに信頼されてたり、憧れられたりしてるのを。

平凡すぎる祐志は幼馴染たちと比べてしまうと酷く劣るように思えてならなかった。

祐志には伊槻のような笑顔で誰かを惹きつけることはできない。

祐志は俊也のような天才的な頭脳は持っていない。

祐志には詩音のようにクールでかつこよく決めることはできない。

祐志は梓のように大事にされるようなものを持ち合わせていない。

祐志には彰のように自由気ままにやっても信頼を寄せてもらえるようなことはできない。

祐志は海人のような万能的な人ではない。

平凡すぎる自分は何一ついいところが見つからなかった。
何も突出したものがなかった。

「嫌なんだ！お前らを見ててすごく辛かった！一緒にいて、すごく悔しかった！！」

一緒にいて、たくさんたくさん比べられた。
離れて見ていて、自分がいないほうがいいと思った。

「お前らと一緒に居辛い・・・自分が一番嫌なんだ」

祐志が心の内を全て吐き出す。
身体から黒っぽい靄が噴出した。
それは空に昇り、煙のように消えていった。

「ラルが消えたか・・・『光と闇の技師^{レノン}』の名は伊達ではないな」

詩音たちの背後で呟かれたように聞こえた声に伊槻と詩音が勢いよく振り向いた。
デトロイトだ。

「自己の意思でダズに入った闇の技師は友の力を使って光の技師へと成り代わった・・・か」

呟くように続く声の中に含まれている恐ろしい気にその場にいる者達は動くことはできなかった。

「キャレを戦意喪失まで追い込んだことは敵ながら見事だ『絶対的^{イス}な正義の使者』よ。『慈愛と安らぎの女神^{ミューズ}』の威嚇も見事なものだった。そうそう見えるものではないな、怒りの顔など」

クツクツと笑うデトロイトが海人たちの後ろに人影に気付く。

「『最強の最恐戦士』^{ラディ} や『全知全能な光の魔王』^{ラフィール} までも仲間にし、我が娘である『闇を裏切りし死神』^{イーファイ} さえも仲間にするとは絶句ものだった・・・『世界の真の王』^{ゼノリ} よ!!」

彰が、大量の魔力を^{メイ}放出しながら現れる。

大丈夫だよ

彰は恐れていた。

今、仲間に出会ってしまうことを。

「っ！」

大事な仲間の姿を見ると逃げるように足を後ろへと下げる。

魔力は制御できず、自分の体から溢^ミれている。

周りの壁や床を少しずつ破壊しているその範囲に仲間がいれば怪我を負う。

彰は仲間から逃げた。

仲間の安全の為に。

「彰っ！」

海人の声に弾かれる様に背を向けて逃げる。

だが、足はすぐに止まってしまった。

勝手に足が動く。

向きを変え、ゆっくりと仲間のほうへと進んでいく。

一歩、また一歩。

遅すぎる歩調だが、彰の心は焦っていた。

「アハハ、ナイスタイミング」

詩音が笑みを浮かべて彰のほうへと歩き始めた。

デトロイトの顔にも笑みが浮かぶ。

「来るな・・・離れろ」

彰の声は苦悶に満ちていた。

当たり前的事だ。

魔力が制御出来ずに意志とは相反して体内を駆け回り、そして勝手に出て行き、自分や周りを傷つけているのだから。

この距離ならわからないかもしれないが、服の下は傷だらけになっている。

詩音は更に近づく。

彰も、詩音に近づく。

服に滲んだ血に、詩音が気付いた。

「・・・大丈夫か？」

「大丈夫だ・・・だから来るな・・・逃げろ」

手を伸ばし、彰に触れようとする詩音。

それを拒むように首を振る彰。

だが、足は詩音へと向かう。

だんだんと身体感覚が消えていく。

「海人！俊也！伊槻！梓！祐志！デトロイトの右腕の紋様を破壊しろお！！」

詩音が後ろへと叫ぶと、少しずつ後ろに下がりだす。

「わかった」

「了解です」

「りょーかい」

「オツケイ！」

「俺も！？」

三者三様な反応をするも、デトロイトへと対峙した。

「やはり手の内は知っているか。だが、自分で来ないところで負けた 合成魔術・地獄炎雷氷」

デトロイトは一瞬のうちに高度な術を展開、海人たちを術で飲み込んだ。

彰の身体は限界寸前だった。

傷だらけの身体から徐々に血が抜けている感触が感じられなかった。身体が自分の意志とは相反している。

視界が霞み、周りが静かなように音が脳まで伝わらない。

足が震えているのか、崩れそうな体勢で今もお、前へと進んでいる。

—— 苦しい……

だんだんと五感が働いていかなくなっている。

その中で嫌に感じるのは、自分の魔力メイの鼓動。

体内だけに留まらず、体外に出ているのに時が経つごとに大きくなっているように感じる。

ぼんやりと、目の前にいる黒い服を着た人だけが見える。

先ほどから距離が少しも変わっていないかったのだが、それがだんだんと大きく見えてきた。

—— 逃げろ……逃げろ……！

声は、出なかった。

「大丈夫だよ、彰」

優しい声。

働いていないはずの聴覚が、伝えてくれた。

足が、崩れ落ちる。

彰は倒れた。

詩音は彰の魔力メイですぐ傷だらけになった。

目の前で苦痛の表情を浮かべながら気を失って倒れた彰を支えながら、ゆっくりと腰を下ろす。

詩音は彰の有り余る魔力メイを自分に取り込むために、彰の腕を掴む。極端に減ってしまった自分の魔力メイを腕を掴む指先に集中させる。

「闇魔術・魔力吸収」

一番簡単な基本魔術でもほんの僅かな規模にしかない量の魔力メイで、死族専用デストの上級魔術に値する術を使った。

下手すれば術が発動しないかもしれない。

だが、それでも。

「っ！！」

詩音の指先から、一気に手のひら全体へと痺れのような痛みが走る。その痺れは肘まで、肩まで、身体の半身まで……ついには身体全体までに広がる。

今まで使う事がなかった術は、詩音の想像を遥に超える痺れを詩音に与えたのだった。

これが人の魔力を奪ったときに起こる、身体に馴染ませるまでの拒絶反応。

彰の魔力を多く奪っているからか、彰と詩音の魔力の違いが大きいからか、はたまたその両方か・・・詩音には判らない。

「くっ・・・う」

痺れは引かない。

彰の腕を掴んでいる手の感覚がなくなってきた。

開いている片手も掴んでいる手に添えるようにして彰の腕を掴む。

彰から奪い、馴染ませた魔力を使って一気に吸収できる量を増やす。痺れは変わらなかった。

いい加減、身体が馴染ませ方を覚えたのだろう。

やがて彰の魔力が彰の体外にでなくなった。

彰の顔からも苦痛の色が消えていき、詩音は痺れの中で微笑を浮かべた。

後は、痺れが引いたときに魔力の回復率を上げるだけだ。

彰の腕を放し、後ろを振り返る。

全力発揮

狭い通路だった場所はデトロイトの術で埋め尽くされていた。
紫電の混じる炎の壁が、大きな氷の壁の中にある。
おそらくその中に海人たちがいる。

「基本魔術・雷」

最弱の威力にして術を彰にぶつける。
手荒だが、戦力が欲しい今は起こす。

「いつ・・・てえ」

「さつさと起きないと、アイツらがやばくなる」

海人たちにデトロイトを任せたのは信頼からだ、やっぱり心のどこかで不安だった。

デトロイトは強い上に恐ろしい。

詩音は少しでも動きやすいように服を体にぴったりと合った丈夫で柔らかな黒のスーツに替えた。

ダズにある、暗殺者^{アサシン}の服に似たものだった。

死神の能力で魔力の消費を軽減^{メイ}。

特殊生命体^{アルスロット}の能力で普段の万族^{オウル}と死族^{デスト}のうち、万族^{オウル}を戦族^{ソル}に変更、戦族特有の運動能力を手に入れる。

自分についての迷いは、捨てた。

大事な人たちを助けるために使う。

「史上最悪の魔神の血を引く死族^{デスト}の特殊生命体^{アルスロット}が、人助けか」

皮肉気に笑ってみたが、迷うことはやめたのだ。

自分の気持ちは変わらなかった。

「。。。俺も真の力の制御にチャレンジするか……。詩音が魔力^{メイ}を奪ってくれたからな」

詩音の迷いなき決意をした顔を見た彰はふっと笑みを浮かべると、彰は自分のうちに集中を始めた。

袖の部分にたくさんの切れ込みがはいった白の服に自然と変化しながら、ゆつくりと彰の身体が浮かぶ。

バチバチと閃光音と共に魔力^{メイ}が発光して不思議な色合いの光となった。

彰の体内にある魔力^{メイ}は詩音が奪った以上のものとなったが、真の力はその魔力^{メイ}を制御できるようにさせてくれていた。

身体の表面を覆いながら揺れる魔力^{メイ}は緩やかに服をはためかせる。

服の下のは肌には綺麗な蒼で王の証が刻まれ、輝いていた。

彰の本能が真の力の能力を感知する。

彰の理性はそれを使うことを了承し、すぐさま発動した。

「!？」

力は突然に詩音を包み込んだ。

「闇に落ちた力、解き放て」

彰の呟きは、詩音の容姿を一瞬で変化させた。

詩音の服は漆黒の色となり、無地の眼帯に白い文様が浮かび上がった。

漆黒の地に地獄の炎と白い稲妻が刺繍として服を彩り、眼帯は異様な不気味さを醸し出す。

髪は短くなり、色が紫に変わる。

瞳は凄惨な色を湛え、左目の周りには返り血がついたような紅い刺青——フィリールの守護印——が刻まれていた。

闇を裏切った死神は、闇と魔の守護者へと変わった。

詩音の中に封じられていた、フィリールの枷が外れたのだ。

「偽の闇を謳う道化師を排除・・・」

詩音に彰は静かに命令を下す。

もちろん最悪の魔神が従うことはまずないだろう。

誰にも止められなかった魔神。

「了解」

今の魔神の意志は詩音によって封じられていた。

仲間を想い、迷いの消えた詩音はにこやかに笑みを浮かべ、彰の従者となる。

彰が従えていけるのはこの世界。

物や自然を操ることなど容易い。

ほぼ全ての人が従わざるをえない力を持つ。

そして、謀反する極々一部の者全てを屈服させる力を持つ。

そのための従者に光も闇も、善も悪も関係ない。

心底王を拒絶しなければ、従うのだ。

詩音に、彰を拒絶する心は欠片もない。

「闇魔術・黒渦」

詩音の右手に闇色の渦が生まれる。

詩音は右手を氷に向かって突き出す。

詩音の望むものを吸い込む超小規模のブラックホールだ。

渦が目の前の巨大な氷の壁を少しずつ吸い込んでいった。

小さなブラックホールは電撃の飾りをつけた炎をも飲み込み、消えた。

見えなかった海人達が見える。

全員が怪我らしい怪我をせずに立っている。

「無傷だと・・・？あれほど長い時間でか」

「あなたではないのですから。足りない魔力は皆が供給してくれました」

術が展開してすぐ俊也が術を相殺し続けていた。

足りない分は僅かながらも海人と祐志が分け、梓は俊也の相殺しきれなかったものの対処をしていた。

「それよりいいのか？」

俊也の背に当てていた手を離し、海人が笑う。

デトロイトの後ろに、音もなく伊槻が現れる。

右手に死神を宿した刀を振り上げ、デトロイトの右肩を掴もうと手を伸ばし、その肩に指先が触れる。

次の瞬間――

「何がだ？」

デトロイトは伊槻が刀を振り下ろすより先に、肩を掴むより先に移動していた。

海人の真後ろで、海人の首に短剣を突きつけていた。

「死族でも私は最強だ。なめられるとは心外だった、絶対的な正義の使者よ・・・さて、お前の力と仲間の信頼を試させてもらおうか？」

「貴様！」

デトロイトの言葉に感づいた詩音が走った。
それを止めたのは、彰だった。

デトロイトは海人の首に突きつけたナイフを僅かにだが動かした。

「さあ・・・ゆくがいい、傀儡人形よ」

デトロイトの右手が海人の頭を掴んだ。

傀儡人形

「闇魔術・傀儡」

デトロイトが呪文を唱えた。

脳を叩かれたような感覚と共に、海人の自我は消えた。

デトロイトの右手が海人の頭を掴んだ瞬間、海人の目から生気が消えうせた。

「海人……？」

「オイ……まさか」

「不味いのでは？」

嫌な予感を感じながら海人の様子を窺う。

「下がれ……奴にもう海人の人格なんてない」

詩音が彰を守るように立ち位置を替える。

海人は詩音の想像通りに動いた。

右手に剣を作り出し、走りながら振り上げ、詩音と彰めがけて振り下ろす。

それを詩音は瞬時に術によって作った愛用の銃の銃身で受け止める。すぐさま海人は距離をとる。

引き金にかかる指の動きに集中。

その間に、彰が動いた。

彰が守られている間に作り出した細身の剣が海人の剣と交わる。だが、彰の剣はすぐに弾かれた。

「っ海人！」

彰の中にある海人への思いが邪魔をする。

武器を作り直す時間の与えないように海人は高速で斬りかかる。

彰はそれを避ける逃げの一方だった。

王の力は海人には効かなかった。

はつきりとした拒絶の意の前に、強力な支配は無意味だ。

ギリギリまでフェイントを巧妙に入れ続ける海人の剣を紙一重で避けるのがやつとの状態である彰。

そこに向かって銃を向けている詩音は引き金にかかった指を動かせなかった。

彰に命中する率が高い。

細剣で乱戦に持ち込む手もあるが、詩音はそれほどいい腕を持っていない。

伊槻も俊也や祐志も梓も誰一人、彰の掩護に回ることができなかった。

目の前の一番倒すべき存在が不敵に笑っていた。

「・・・フツ・・・フフフ」

俊也が突然に笑い出す。

ギョツと見る伊槻達だが、俯いた俊也の顔は前髪で隠れていた。

「畜生があー!!」

詩音が彰達から目を離し、俊也に発砲した。

だが、死の詰まった弾は無言で展開された術でできたシールドに当たっただけだった。

術の展開時に使い切れなかった魔力メイの起こした微風は顔を隠してい

た前髪を浮かした。

その下の俊也の目が、海人と同じ様になっているのを祐志は見た。

「俊也！」

祐志が俊也に手を伸ばす。

梓がその腕を掴み、全身の力を使って引き戻す。
入れ違いに伊槻が俊也との距離を一瞬で詰める。

「悪い！」

正面で腹を狙うフェイントを入れ、倍以上の速度で俊也の背後に回る。

最初から目的は首。

手加減して打ち、気絶させる。

俊也の術は敵に回すとかなり怖いだろう。

すぐに行動を止めるべきであり、伊槻はその考えに従って動いた。
だが、長いこと一緒にいた幼馴染・・・その中でも一番長くいた大切な親友は本能以動く伊槻の行動をしっかりと予測していた。

「上級魔術・触手林」

何が起ったのかわからなかった。

呪文を言う前に発動した術。

伊槻の足は得体の知れないモノに絡みつかれていた。
地面に縫いとめられた伊槻を狙い、次の術が発動されようとする。

「基本魔術・木矢」

「作成魔術・強固壁」

鋭く、殺傷能力が高い矢から祐志が即座に守る。
かなり低レベルの術だが技族の天才が作り出した壁はとても硬い。
いとも簡単に矢の先が折れる。

「アズちゃん！詩音！彰と海人を頼む！！」

祐志が梓と詩音に2人を託した。

その代わり、自分も2人を受け持つ。

大事な仲間を傷つけずに助け出し、その間大事な仲間を傷つけないように守る。

きつと戦闘向きな種族でない自分には無理だろう。

しっかりと現実を見た祐志は決断をする。

2人を信じ、守り続ける。

「作成魔術・透明要塞」

壁の存在を放棄、新しく作り出すのは無色透明の頑強な要塞。

伊槻を守り、そして術に対抗する。

透明な要塞にはさまざまな仕掛けを施した。

術の解除をされないように、全ての魔力を要塞の存在を維持するために使い続ける。

解除するために必要な魔力の回路にたくさんのトラップを作り、解除困難にする。

炎や氷や雷、その他諸々の術に対する防御策は要塞につくった人工知能に全て任せる。

自分の頭と反射では間に合わないものが多いだろうが、自分以上の知能と機能をつくり出せる。

それに全て任せ、自分は要塞のエネルギーになる。

祐志傑作の要塞は、俊也とて壊せないだろう。

絶対の自信で目を閉じる。

瞑想し、伊槻の存在も忘れ集中し始めた。

傀儡人形（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。

責任の行方は皆同じ

意識と感覚だけが残った状態だった。

目の前が見え、音が聞こえ、剣を掴んでいる感覚しかない状態で海人はいた。

身体の制御どころか、思想までも奪われていた。

ただ、目の前の様子を眺めるだけ。

聞く気もなく聞こえる音を聞くだけだった。

振るわれ続ける剣を避け続ける彰。

地を蹴る音と風切り音と荒い息遣い。

親友を斬ろうとしているのに止めたいとも思わなかった。

ただ、見ているだけ。

それが続く。

一定のリズムができ始めていた頃に、変化が訪れた。

「海人っ！」

梓が、2人の間に割入った。

あまりにも非力げな容姿で、無防備に割入った梓。

その姿に、一瞬思想が働いた。

——嫌だ！大事に想う梓だけは……絶対に……！！

その一つが浮かび、すぐに消えた。

思想の残滓はほんの僅かに残ったのみ。

海人の腕はいきなり向きを変えた。

梓を握っていた剣の刃ではなく、柄で突き飛ばした。

骨を折る感触が伝わる。

その行動が、海人の運命を大きく変えた。

梓に思わず目が行った彰を蹴る。

隙だらけだった彰は体勢を立て直せずにその場で尻餅をつく。

「・・・オトナシクシテロ」

海人の口が歪む。

剣を振り上げて彰の右肩にある王の印を狙う。

だが、剣は空を舞った。

煌き、紅い色と異物を重ねながら、空高く。

剣にある異物を突然現れた影が掴み、消える。

「・・・・・・・・つ・あああああああああああ！！！！！」

剣が地に落ちると、海人の絶叫は同時だった。

剣についていた紅は海人の血だった。

「悪い、海人」

詩音が先ほどまで剣についていた異物を掴んだまま呟く。

人の、腕だ。

海人の右肩から先が消えていた。

詩音が彰を守るために斬った。

「いや・・・・・・・・こつち・・こそ」

激痛に耐え、苦しみながら、海人は笑った。

心底ホッとしていたのだ。

思想が激痛と共に戻ったときだ。

すぐく、すぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐくすぐく怖くなった。

なぜ、自分は彰を斬ろうとしてたのに止めたいと思わなかったのか。なぜ、大事な人をこの手で傷つけてしまったのか。術のせいだと逃げる気はまったくなかった。

こうなったのは自分のせいだと、激痛が訴えるようだった。自分が簡単に術にかかり、親友と愛する人に殺意を持った時点で決まったのだ。

一生消せない罪を背負うことが。

愛する人に手をかけ、親友を刺そうとした時点で決まったのだ。それでも、嬉しかった。

自分の腕と引き換えに2人が助かることが。

大事な人たちを殺さずに済むことに心底ホッとした。

「ごめん」

謝罪の言葉は梓にか、彰にか。

・・・違う。

「ごめんな、詩音」

一番辛かったのは詩音だ。

大切な人を守るために、大切な人を傷つけた。

一生治らない傷をつくった。

海人を見ればすぐに目がいく所に。

きっと、一生詩音は悔やむだろう。

一生自責の念で苦しむだろう。

「悪かった・・・ごめん」

でも、それは俺が悪いんだから。だから自分を責めるな、詩音。

だからさ・・・

「泣くなよ、なっ？」

痛みに耐えながら笑ってみせる。

だが、詩音が反応を見せる前に海人の意識が闇に落ちた。

自分を一番理解してくれる親友が一番想っている男に突き飛ばされた。

骨の折れる音が聞こえるほど強く。

壁に背を打ち、気を失った親友が赤い霧を吐き出した時は愕然となった。

更に男が親友を手にかけてようとしてたのを見たとき、いったい自分は何を思ったのだろうか？

無我夢中で銃を幅広の剣にして、海人の右腕を斬ってしまった。

空にとんだ右腕を掴んだのはなぜだろう？

わからない。

激情に流されてしまっていたから。

この頬を伝う涙はなぜ？

斬ってしまった罪悪感から来た涙？

それとも、梓や彰を失わずにすんだ安心感から来た涙？

・・・違う。

「何で止められなかったんだ」

こんな、人を苦しませるだけの術を。
じぶんのうち
悪魔を止められなかった自責の念だ。

「詩音だけの責任じゃない」

彰が慰める。

本当は彰もわかっているのだ。

術は、自分の今の力なら簡単に止められたことを。

止めるタイミングがなかった？

タイミングを待てばよかっただけだ。

梓が出たから？

梓が大事に想う人を放っておくはずがないとわかっているのだから想定できたはずだ。

「俺も、悪かったから」

そつと詩音の頭を撫でる。

詩音が彰を見る。

優しく、安らぐ。

気が楽になるその顔に微笑が浮かぶ。

「倒すぞ、アイツを」

覚悟の強さが滲み出る宣言に詩音も頷く。

まずは、祐志の掩護だ。

逃げる

祐志を中心として伊槻の周りは静かだった。

一定のラインを超えて術が飛んでくることはなく、祐志が集中を始めたときには絡みつかれていた物も何時の間にか消えている。

自分の存在を忘れて集中している祐志に声をかけられるはずもなく、伊槻は魔力を溜めて備える事しかやる事がなくなってしまった。

いくら付き合いが長くても絶対に俊也では追いつけないと高をくくっていた為か、祐志のように術に任せて普段以上の能力を手に入れた為かは判らないが、伊槻はかなりのスピードを出して俊也に向かったのにいとも簡単に止められたことに驚いていた。

もつと頑張らなくてはいけないと危機感を感じている。

祐志が万が一力尽きた時を考えて身体強化を身体の隅々まで行き渡らせ、祐志同様に集中した。

祐志は外界を捨て、自分の中に意識を置いた。

伊槻は思想を捨て、周囲に意識を置いた。

伊槻の意識の置く場所の結果が、2人の命をつないだ。僅かな僅かな音だった。

常人では聞こえないその微音——足元、機械の隙間をぬっていた1本の触手が機械に僅かにぶつかった音——が伊槻の耳に届く。

捨てた思想を拾うこともなく、直感と本能で祐志を抱き寄せ、空へと跳んだ。

ほぼ同時に突然祐志のいたところから一本の触手が生えた。

触手はその場でとぐろを巻くと、すぐに消え失せた。

「やりますね 隠蔽魔術・不可視」

俊也の冷めた声に2人の思考が正常化する。

弱点が見つけれられて使い物にならない要塞の存在はただエネルギー

を無駄に消費するだけのもの。

既に祐志にとって重荷でしかない。

すぐさま存在を放棄。

伊槻は俊也の声がした方へと向いた。

向いた先で見たのは突然無から現れた刃。

落ちる伊槻達より若干早く落ちる刃を避けようにも、空中では方向転換もできない。

「作成魔術・盾」

「我也参加させてもらおうか？ 基本魔術・魔術破壊」

存在を完全に放棄し、破壊し終えた祐志が瞬時に作り出した盾は実体ができた瞬間にデトロイトによって色が薄くなっていき、消えるように破壊された。

同時に、破壊された反動を術者である祐志が受ける。

一時的ではあるが、今は致命的な昏睡状態。

新たな盾は作られることもなく・・・刃が、迫る。

祐志を守るように刃に自分の背を向け、目を閉じる。

身体強化を限界まで高めて、少しでも刃を拒んだ。

「基本魔術・魔術破壊」

使わなくなった視覚と使いたくない触覚に使っていた身体強化が自動的に聴覚と嗅覚にまわされ、更に鋭くなった聴覚は神が裏切る、決定的な声を拾った。

その声は、大切な人の声でもある。

そつと目を開けて背のほうを見れば刃は消えている。

着地をすれば、目の前に立つ詩音の顔がしっかりと見えた。

祐志をそつとその場に下ろし、俊也を探す。

どこにいるかはすぐにわかった。

彰との術による攻防が繰り広げられていた。

「俊也の意識を戻すか無くせば大丈夫だ。デトロイトを潰すぞ」
「・・・」

伊槻は詩音の言葉を聞いていなかった。

ただ、俊也と彰の攻防を見ていた。

術にかかった俊也の目はいつもと違っていた。

落ち着いて周りを見ている目でもない。

いつもの人を嘲笑う目でもない。

冷酷な色を秘めながらも、楽しそうだった。

「魔王の本質は悪だ。7部族のうちの3部族・・・死族^{デスト}・魔族^{ジック}・戦^ソ族の本質が悪なんだ。我が娘が死神なのはわかるだろう？じゃあ、君と彼はどうか知っているか？」

口角を上げながら伊槻に問うデトロイト。

その先の話を知っている詩音が眉を顰めた。

「光が二つ名に入っていようと本質は悪。そして君は光を脅かす最恐戦士・・・私の、味方だ」

伊槻に向かって差し出された腕。
その腕に細い何かが絡みついた。

「かかったな・・・行け！伊槻！詩音！」

昏睡状態から復活した祐志の作ったワイヤーが複雑に絡んでいる。
作られた好機を逃すわけにはいかない。

俊也の目を感じた不快な感覚を捨てて集中する。

伊槻は溜めていた身体強化を爆発させ、詩音は魔神ファイナルの力を解き放った。
神速の域を超えて迫る伊槻の手に祐志が作った幅広の剣が握られ、爆砕の嵐を引き連れる。

詩音は溢れ出した魔力メイと体内を駆ける魔力メイを集め、破滅の力を集める。

2つがデトロイトに命中したのは刹那を更に分けるほどの時間も経っていないかった。

「連携術・存在破壊」

技の余韻に混じるかのように2人の声が静かに響く。

デトロイトがいた場所には何もない。

血の一滴も落ちていないそこには荒々しい傷が残されているだけだ。

「ハズレ、だ」

デトロイトは生きていた。

既に祐志の背を襲っていた。

伊槻の後ろ、祐志の血溜まりの上に立って右手に血塗れた死を引き連れていた伊槻に襲い掛かる。

逆手に持った短剣を振り下ろした。

「あぶねえ！！」

詩音が咄嗟に伊槻を引っ張って遠ざけるも、刃は伊槻の左頬を掠めた。

赤い血が傷から出てくる。

「秘術・幻想世界」

デトロイトの術にかからぬように詩音と伊槻は共に退避する。
だが、秘術は遠くに逃げた一人を捕らえた。

「・・・おい！しつかりしろ！！」

突然自分の腹部を斬ると、ふらふらとした足取りで歩き始めた。
斬った傷を手で覆いながら歩く。

手はすぐに血で染まり、垂れる血が地面を赤く彩っていく。
重傷となった伊槻はそれでも歩いている。

「おい！」

「既に声かけは無駄だ。意識はあるが、幻想の世界にある・・・
そして、それは私の夢の始まりだ」

デトロイトの笑いと同時に俊也と彰の攻防が崩れた。

先ほどまでの術の均衡が俊也によって俊也の有利に傾く。

焦った彰が術を更に大きく展開して逆転させた。

だが、そこがデトロイトの狙いだった。

相殺されなかった術に使われた魔力が突然に消滅^{メイ}。

そして地面に垂れた血が、ありえないことに紫に光った。

「ずっと、待っていた・・・世の破滅が！！」^{ショータイム}

「・・・っ！」

高揚した声で腹を斬った伊槻に気を取られていた詩音が我に返る。

デトロイトの野望を、止めなければ。

その為に、逃げなければ。

でも、一人でも多く助けなければ。

伊槻を右手で抱え、彰のほうへ飛ぶ。

彰を開いている左手で掴み、縛れる様に俊也へと突っ込んで運良く口元にきた俊也の衣服を噛む。

後は、梓と海人と祐志だ。

突っ込んだときに方向感覚を無くした詩音は目を動かして探す。

梓、海人・・・祐志は？

数十歩離れたところで意識を無くした梓と海人がいる。

視線を更にならして祐志を探し、デトロイトと目が合った。

これ以上は、破滅を招く・・・！

予断を許すことができない事態に詩音は苦渋の決断をする。

これ以上の移動は不可能。

3人を見捨てて3人を助けるか、全員で死ぬか。

くっ・・・そがあああ！

悲痛の叫びが声にならずに溢れ出る。

魔力を全開で放出し、詩音は別世界への扉を開く。

絶縁空間を目の前に呼び出して穴を開けると、転がるように飛び込んだ。

行き先は、無力世界、^{ヴェール}詩音たちの元の世界。

大事な幼馴染を守るために、大事な幼馴染を切り捨てた。

デトロイトに、殺される運命にしてしまった。

運命なんて、大っ嫌いだ。

苦しいことばかりが待っている。

残された3人

詩音の悔やみは、いい方へ裏切られた。

残された3人が突然デトロイトの視界から消え失せていた。

「フツッ、やつぱこんな物語はハッピーエンドが基本でしょ？」

「個人的にもお、幸せになって欲しいしねえ」

どこからともなく聞こえる声。

レジスタンス
正世界のボスとパートナーの声だ。

「お仕舞いにはしないわ。主役がいないだけ・・・停戦しましょう、
偽りの闇の王」デトロイト

「どうせなら強い相手のほうがいいだろお？」

「・・・神の守護者の言うことも神の警護者の言うことも確か
だな」ヒューク
キース

デトロイトが肩の力を抜く。

もう、俊也を操っていた力は止めていい。

そして、代わりに操るものもない。

リラックスした状態へと持っていくが、相変わらず魔力は体内で渦
巻いている。メイ

楽しみにしていたものが延期になったのに高揚感が残っていた。

「ただし、次はない。接触したのが分かれば、我は動くぞ」

妖しく笑みを浮かべて風で飛ばされる塵のように、静かに消え去った。

残された3人（後書き）

デメーヌ
魔力世界編完結です。

そして、ココでこの話自体完結させます。

理由はすみません、勉強がずさんな為です。

4月から受験生というのもあります。

余裕ができたら続きに行きます。

8話ぐらいは続きがもうかけてるので！

では、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6234j/>

非現実世界《ヴェルメン》

2011年2月14日12時32分発行